

# あゝ玉杯に花うけて

佐藤紅緑





# あゝ玉杯に花うけて

佐藤紅緑

## 一

豆腐屋のチビ公は今田圃の畦を傳つて次の町へ急ぎつゝある。爽かな春の朝日が森を離れて黄金の光の雨を緑の麥畠に黄色な菜畑に紫雲英咲く紅の田に降らす、畦の草は夜露から眼ざめて輕やかに頭を上げる、菫は薄紫の扉を開き、蒲公英は橙黄色の冠を捧げる。堰の水はちよろ〳〵音立てて田へ落ちると、蛙はこれから啼き出す準備に取り掛つて居る。

チビ公は肩の天秤棒にぶらさげた兩方の桶をくるりと廻した。さうして暫く景色に見とれた。堤

の上に赫と朝日を受けて浮き出して居る村の屋根々々、火見櫓、役場の窓、白い土藏、其等は今眠から活動に向つて歡喜の聲を擧げて居るかの樣、ところ〴〵に立つ炊煙は長閑に風に搖られて林を繞り、御宮の背後へ靡き、それからうつとりと霞む空のエメラルド色に紛れ行く。

其處の畠には豌豆の花、蠶豆の花が咲き亂れてる中に兀として葱の坊主が突つ立つて居る。いつも此處まで來るとチビ公の背中が暖くなる、春とは雖も曉は寒い、奧齒を嚙みしめ〳〵チビ公は豆腐を桶に移して家を出なければならないのである。町の人々が朝飯が濟んだ後では一丁の豆腐も賣れない、どうしても六時には一と廻りせねばならぬのだ。

だが、此の葱畠の處へ來ると彼はいつも足が進まなくなる、葱畠の次は廣い麥畠で、其の次には生垣があつて二つの土藏があつて、鵞鳥の叫び聲が聞える、それは此の町の醫者の家である。醫者がいつの年から此の家に住んだのかは今年十五歲になるチビ公の知らない處だ、伯父の話ではチビ公の父が巨財を投じて此の家を建てたのだが、父は政黨に夢中になつて凡ての財產をなくしてしまつた、父が死んでから彼は母と共に一人の伯父の厄介になつた、それは彼の二歲の時である

『しつかりしろよ御前の御父樣はえらい人なんだぞ』

伯父はチビ公をつれて此の葱畑で昔の話をした。それからといふものはチビ公はいつも葱畑に立つて其の事を考へるのであつた。

「此の家を取返してお母さんを入れてやりたい」

今日も彼はかう思つた、が彼は行かねばならない、荷を肩に負うて一と足二た足よろめいてやつと踏み止まる、彼は十五ではあるが至つてちひさい、村では彼を千三と呼ぶ人はない、チビ公の綽名で通つて居る、彼はチビ公と言はれるのが非常に嫌であつた、が人よりもチビなのだから仕方がない、來年になつたら大きくなるだらうと、そればかりを樂しみにして居た、が來年になつても大きくならない、それでもう一つ來年を待つて居るのであつた。

彼が此の畦路に立つて居る時、折り〳〵言ふに言はれぬ侮辱を受ける事がある。それは役場の助役の子で阪井巖といふのが彼を見るとぶん撲るのである。勿論巖は誰を見ても撲る、彼は喧嘩が強くて向ふ見ずで、いつでも身體に生疵が絶えない、彼は小學校でチビ公と同級であつた、小學校時代にはチビ公はいつも首席であつたが巖は一度落第して來たに拘らず末席であつた。彼はいつも蛙を懐に入れて友達を嚇かしたり、女生徒を走らしたり、さうして終りにはそれを裂いて食ふのであつた。

『やい、お前は出來ると思つて威張つてるんだらう、やい、此の蛇を食つて見ろ』

彼は凡ての者にかう言つて突つ掛つた、彼は今中學校へ通つて居る、豆腐桶を舁いだチビ公は彼を見ると遠くへ避けて居た、だがどうかすると彼は途中でばつたり逢ふ事がある。

『手前はいつ見てもちひせえな、少し大きくしてやらうか』

彼はチビ公の兩耳を摑んで、ぐつと上へ引上げ、足が地上から五寸も離れた處で、どしんと下へ降ろす。これにはチビ公も全く閉口した。

彼は今町の入口へ差掛ると向ふから巖がやつて來た、彼は頭に鉢卷をして柔道の稽古着を着て居た。チビ公ははつと思つて小路に入らうとすると巖が呼び止めた。

『やいチビ、逃げるのか貴樣』

『逃げやしません』

『豆腐をくれ』

『はい』

チビ公は不安さうに顏を見上げた。

『いかほど?』

『食へるだけ食ふんだよ、俺は朝飯前に柔道の稽古をして来たから腹が減つて堪らない、焼豆腐があるか』

『はい』

チビ公が蓋を開けると巌は直ぐ手を突つ込んだ、それから焼豆腐を掴み上げて皮ばかりぺろ〳〵と食べて中味を大地に捨てた。

『皮はうまいな』

『さうですか』とチビ公は仕方なしに言つた。

『もう一つ』

彼は三つの焼豆腐の皮を食べ終つて、濡れた手をチビ公の頭で拭いた。

『銭は此の次だよ』

『はい』

『用がないから行けよ、俺は此處で八百屋の豊公を待つてるんだ、彼奴俺の犬に石を抛りやがつたから此處で芋を分捕つてやるんだ』

チビ公はやつと虎口を遁れて町へ入つた、さうして悲しく喇叭を吹いた。喇叭を吹く口元に涙が

果てしなく零れた。

どうしてあんな奴にかうまで侮辱されなきやならないんだらう、彼奴は學校でなんにも出來ないのだ、親父が役場の助役だから威張つてるんだ、金があるから中學校へ行ける、親があるから中學校へ行ける。それに俺は金もない親もない。撲られても默つて居なきやならない、生涯豆腐を舁いで喇叭を吹かなきやならない。

彼の胸は憤怒に燃えた、彼は默つて歩き續けた。

『おい豆腐屋、賣るのか賣らないのか、喇叭を落したのか』

職人風の男が二人、から言つて笑つて過ぎた。チビ公は喇叭を吹いた、其の音はいかにも悲しさうに響いた。町にはちら〳〵中學生が登校する姿が見え出した、それは大抵去年まで自分と同級の生徒であつた。チビ公は鳥打帽の廂を深くして通り過ぎた。

『お早う青木君』と明るい聲が聞えた。

『お早う』とチビ公は振返つて言つた、聲を掛けたのは昔の學友柳光一といふ少年であつた、柳は黑い制服をきちんと着て肩に草色の雜嚢を掛け、手に長く卷いた畫用紙を持つて居た。彼はいかなる時でもチビ公に逢ふとかう聲を掛ける、彼は小學校にある時にはいつもチビと席を爭うて居

た。双方とも勉強家であるが、互に其の學力を競うて居た、これと言つて親密にしたわけでもないが光一の態度は昔も今も變らなかつた、一方が中學生となり一方は豆腐屋となつても。

『僕はね、君を時計にしてるんだよ』と光一は言つた。『君に逢つた時には非常



に早いし、君に逢はなかつた時にはおそいんだ』
『さうですか』
『重たいだらうね君』
光一はチビの荷を見やつて言つた。
『なあになれましたから』
『さうかね』と、光一はチビの顏をしみ〴〵と見やつて『暇があつたら遊びに來てくれ給へね、僕の處にはいろ〳〵な雜誌があるから、僕は君にあげようと思つてとつて置いてあるよ』
『有難う』
『ぢや失敬』
チビ公は光一に別れた、何となく嬉しい樣な、懷しい樣な思ひはむら〳〵と胸に湧いた、で彼は喇叭を吹いた、喇叭は朗かに響いた、と一旦別れた光一は大急ぎに走り戻つた。
『此の次の日曜にね、僕の誕生日だから、晝からでも……晩からでも遊びに來てくれ給へね』
『さうですか……併し』とチビ公はもぢ〳〵した。
『構はないよ、日曜だから夜學も休みだらう?』

『あゝ、さうだけれども』

『いゝからね、遠慮せずとも、僕は昔の友達に會ひに來て貰ふんだ』

『ぢや行きませう』

光一は再び起つて去つた。雜嚢を片手に抱へ、片手に畫用紙を持ち兩脇をぴつたりと寄せて姿勢正しく歩り行く、其れを見送つてチビ公は昔小學校時代の事をまざ／＼と思ひ出した。何んとなく光一の前途には其の名の如く光が溢れてる樣に見える、學問が出來て體力が充分で品行がよくて人望がある、あゝいふ人は今に立派な學者になるだらう。

そこで彼はまた喇叭を吹いた、瀏喨たる音は町中に響いた。

チビ公が賣り切れるまで町を歩いてる其の日の十二時頃、中學校の校庭で巖はもの欲しさうに皆お晝飯を食つて居るのをながめて居た、彼は大抵十時頃に晝の辨當を食つてしまふので正午になると又もや空腹を感ずるのであつた。さういふ時には必ず誰かに喧嘩を吹き掛けて其の辨當を掠奪するのである。自分の辨當を食ふよりは掠奪の方が遙かにうまい。

『みんな集まれい』と彼は怒鳴つた。だが何人も集らなかつた、いつもの事とて生徒等はこそこそと木立の陰に隱れた。

『蛇の藝當だ』と彼は言つた、さうして衣嚢から靑大將を出した。
『抑々これは漢の沛公が函谷關を越ゆる時に二つに斬つた白蛇の子孫でござい』
調子面白く囃し立てたので人々は少しづつ遠くから見て居た少年等は又始まつたと言はぬばかりに眉を顰めて居た。
『おい杓子！』と彼は背後向いて飯を食つてる一人の少年を呼んだ、杓子は終りの一口をぐつと嚥み込んで走つて來た、彼は瘠せて敏捷さうな少年だが、頭は扇の樣に開いて頰が細いので友達は杓子といふ綽名をつけた。彼は身體も氣も弱いので、いつでも强さうな人の子分になつて手先に使はれて居る。
『おい口上を言へ』と巖が言つた。
『何の？』
『蛇に藝をさせるんだ』
『よし來た……抑々これは漢の沛公が二つに斬つた白蛇の子孫でござい』
調子面白く囃し立てたので人々は少しづつ集りかけた。
『さあ〳〵御覽じろ〳〵』

杓子の調子に乗つて巖は蛇を額に卷き付け頰を這はし首に卷き、右の袖口から左の袖口から中央の懐から自由自在に繩の如く操なした。

『うまいぞ〳〵』と喝采するものがある。最後に彼は蛇を一纏めにして口の中へ入れた。人々は驚いて盛んに喝采した。

『おいどうだ』

彼は蛇を口から吐き出してから皆に言つた。

『うまい〳〵』

『みんな見たか』

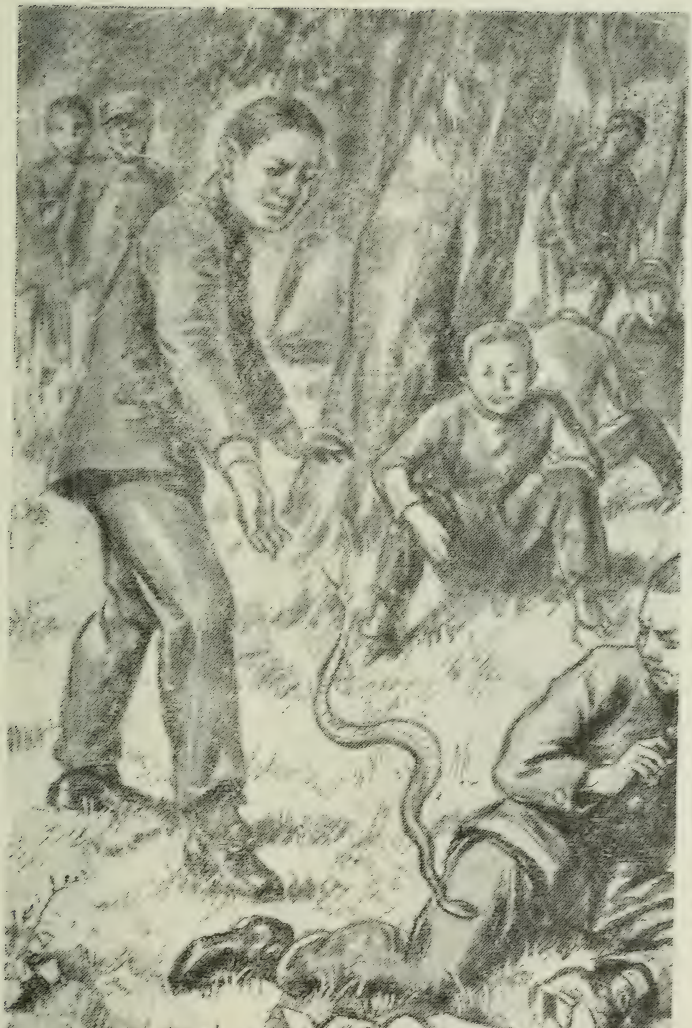
『うまいぞ』

『見たものは辨當を出せ』

人々は默つて顔を見合つた、さうして後列の方からそろ〳〵と逃げかけた。

『おい、こらツ』

今握飯を食ひながら逃げようとする一人の少年の口元目がけて蛇を投げた。少年は握飯を落した。



『次は誰だ』

彼は器械體操の棚の下に蹲まつてる少年の辨當を覗いた、辨當の中には玉子焼と鮭とあつた。

『うまさうだな』

彼は手を伸ばしてそれを食つた。そして半分を犢子にやつた。

『次は？』

もう誰も居なかつた、投げられた蛇はぐんにやりと弱つて居た。彼はそれを拾うて裏の林の方へと急いだ。其處には多くの生徒が群れて居た、彼等の大部分は水田に糸を垂れて蛙を釣つて居た。其の他の者は木陰々々に腰を下ろして雜誌を讀んだり、宿題を解いたりして居た。彼はずらりと彼等を見廻した、これといふ奴があつたら喧嘩をしてやらう。

だが生憎弱さうな奴ばかりで相手とするに足らぬ、そこで彼は木の下に立つて一同を見下ろして居た、彼の胸はいつも元氣が充ち滿ちて居る、彼は毎朝眼が覺めると嬉しさを感ずる、學校へ行つて多くの學生を撲つたり蹴飛ばしたり、自由に使役したりするのが更に嬉しい。彼はいろ／＼た冒險談を讀んだり、英雄の歴史を讀んだりした、さうしてロビンソンやクライブやナポレオンや秀吉は自分に似て居ると思つた。

『クライブは不良少年で親ももて餘した、それで印度へ追ひやられて會社の腰辨になつてる中に自分の手腕を揮つて遂に印度を英國のものにしてしまつた、俺も何處かへ追ひ出されたら、一つの國を占領して日本の領土を擴張しよう』

かういふ考は毎日の樣に起つた、彼は實際喧嘩に強い處を以て見るとクライブになり得る資格があると自信して居る。

『俺は英雄だ』

彼はナポレオンにならうと思つた時には胸の處に座蒲團を入れて反身になつて歩いた。秀吉にならうと思つた時には恐ろしく眼をむきだして猿の如くに齒を出して歩く。彼の子分の杓子は國定忠次や淸水の次郎長が好きであつた、彼は卷舌でものを言ふのが上手で、博徒の挨拶を暗記して居た。

『俺はお前の樣な下卑た奴は嫌ひだ』と巖が杓子に言つた。

『何が下卑てる?』

『國定忠次だの次郎長だの、博徒ぢやないか、尻を卷つて外を歩く樣な下卑た奴は俺の仲間にやされない』

『ぢやどうすればいゝんだ』

『俺は秀吉だからお前は加藤か小西になれよ』

彼は到頭杓子を加藤清正にしてしまつた。だが此の清正は至つて弱蟲でいつも同級生に撲られて居る。大抵の喧嘩は加藤杓子の守から發生する、杓子が撲られて巖に報告すると巖は復讐してくれるのである。

いづれの中學校でも一番生意氣で横暴なのは三年生である、四年五年は分別が定まり、自重心も生ずると共に年少者を憫れむ心も出來るが、三年は丁度新兵が二年兵になつた樣に、年少者に對して傲慢であると共に年長者に對しても傲慢である。

浦和中學の三年生と一年生はいつも仲が惡かつた、年少の悲しさは戰のある度に一年が負けた、巖はいつもそれを憤慨したが矢張り敵はなかつた。

『一年の名譽に關はるぞ』

彼はかう言ひ〳〵した、彼は今木の下に立つて群童を見下ろしてる中に、何しろ五人分の辨當を食つた腹加減は馬鹿に重く、背中を春日に照られてとろ〳〵と眠くなつた。で彼は木の根に腰を下ろして眠つた。

『やあ生蕃が眠つてらあ』

學生共はから言ひ合つた。生蕃とは巖の綽名である、彼は色黒く眼大きく頭の毛が縮れて居た、それから彼は驚くべき厚みのある 唇 を有つて居た。

うと〳〵となつたかと思ふと巖は犬の吼える聲を聞いた。初めは普通の聲で、それは學生等の混雜した話聲や足音と共に夢の樣な調節をなして居たが、突然犬の聲は憤怒と變じた。巖ははつと眼を開いた。もう凡ての學生が犬の周圍に集まつて居た。一年生の手塚といふ醫者の子が鹿毛のポインターをしつかりと抑へて居た、するとそれと向き合つて三年の細井といふ學生は大きな赤毛のブルドツグの首環を摑んで居た。

『そつちへつれて行つてくれ』と手塚が當惑らしく言つた。

『お前の方から先に逃げろ』と三年の細井が言つた。

『やらせろ〳〵面白いぞ』と杓子が中間に入つて言つた。犬と犬とが顔を見合つた時又吼え合つた。

『やれ〳〵〳〵』と一年が叫び出した。

『やるならやらう』と三年が言つた。

『止せよ』

人々を押し分けて光一が進み出た、彼は手に代數の筆記帳を持つて居た。

『やらせろ』と双方が叫んだ。

『つまらないぢやないか、犬と犬とを喧嘩させた處で面白くも何ともないよ、且給へ犬が可哀さうぢやないか、犬には喧嘩の意志がないのだよ』

『降參するなら許してやらう』と三年が言つた。

『降參とか何とか、そんな事を言ふから喧嘩になるんだ』と光一は言つた。

『だつてお前の方で、かなはないから止めてくれと言つたぢやないか』

『かなふのかなはないのといふ問題ぢやないよ、只ね、つまらない事は……』

『何を?』

三年の群から獅子と綽名された木俣といふ學生が跳り出した、木俣と言へば全校を通じて戰慄せぬものがない、彼は柔道が既に三段で小相撲の樣に肥つて腕力は拔群である、彼は鐵棒に兩手をくつつけてぶら下り、其の儘反動も付けずに膝を立てゝぬつくと膝まで迫り上げるので有名である。柔道の自慢ばかりでなく劍道も自慢で、どうかすると短刀を懷に忍ばしたり、小刀を衣嚢にかくしたりして居る。

木俣が跳り出したので人々は沈黙した。
『お辭儀をしたら許してやるよ、なあおい』
と彼は同級生を振返つて言つた。
『三遍廻つてお辭儀しろ』
光一はもう此の人達に係り合ふ事の愚を知つたので引退らうとした。
『逃げるかツ』
木俣は光一の手首を叩いた、筆記帳は地上に落ちて、さつと頁を飜へした。光一は默つてそれを拾ひ上げ靜かに人群を出た。無論彼は平素人と爭うた事がないのであつた。
『弱い奴だ』
三年生は嘲笑した。
『一體此の犬は誰の犬だ』と木俣は言つた。人々は手塚の顏を見た。
『僕のだ』
『手前に似て臆病だな』
『何を言つてるんだ』と手塚は負け惜しみを言つた。

『一年生は犬まで弱虫だと言ふ事よ』
三年生は聲を揃へて笑つた。一年生は互に顔を見合つたが何も言ふ者はなかつた。
『やつしい〳〵』と木俣はブルドッグの尻を叩いた。赤犬は恐ろしい聲を出して突進した、鹿毛は少し尻込みしたが此の時杓子が其の首環を引いて赤犬の鼻に鼻を突當てた、かうなると鹿毛も默つて居ない、疾風の如く赤犬に立ちかゝつた、赤は前足で受け止めて鹿毛の首輪の横に噛み付いた。噛まれじと鹿毛は體をかはして赤の耳をねらつた。一擧一合！ 殺氣が溢れた。
二三度同じ事を繰返して双方互に下手をねらつて首を地に摺えた。
『やつしい〳〵』
兩軍の應援は次第に熱した。此の時一年生は歡喜の聲を擧げた。のそり〳〵眠さうた眼をこすりながら生蕃がやつて來たからである。
『生蕃が來た』
『たのむぞ』
『やつてくれ』
聲々が起つた。生蕃は一言も言はずに敵軍をジョロリと見やつた時、獅子が又同じくジョロリと彼を

見た。一年の名譽を負うて立つ生蕃！　三年の王たる獅子！　正にこれ山雨來らんとして風樓に滿つるの槪。

犬の方は一向にはか取らなかつた、彼等は互に唸り合つたが、其の聲は急に稀薄になつた、さうして双方歩み寄つて嗅ぎ合つた。多分彼等はかう申し合はしたであらう。

「此の腕白共に煽動されてお互に恨みもないものが喧嘩した處で實につまらない、支那を見ても解る事だが、英國やアメリカや露西亞に尻を押されて南北互に戰爭して居る、こんな割に合はない話はないんだよ」

赤は鹿毛の耳を舐めると鹿毛は赤の尻尾を舐めた。

犬が妥協したに拘らず、人間の方は反對に興奮が加はつた。

「やあ逃げやがつた」と三年が笑つた。

「赤が逃げた」と一年が笑つた。

「もう一遍やらうか」と細井が言つた。

「あゝやるとも」と手塚が言つた、元來生蕃は手塚を好かなかつた、手塚は醫者の子でなか〱勢力があり智惠と辯才がある、が、生蕃はどうしても親む氣になれなかつた。

再び犬が火を出された、杓子と猫井は犬と犬との鼻を突き當てた。『支那の時事に鑑みてお互に和睦したのに貴様はなんだ』と鹿毛が言つた。

『和睦も糸瓜もあるものか、貴様は俺の貴重な鼻をガンと打つたね』

『貴様が先に打つたぢやないか』

『いや貴様が先だ』

『さあ來い』

『來い』

『ワン』

『ワン〳〵』

凡て戰爭なるものは氣を以て勝敗が分れるのである、兵の多少にあらず武器の利鈍にあらず、士氣旺盛なるものは勝ち、後淋しいものは負ける、特に犬の喧嘩を以て然りとする、犬の勝る處は只主人にある、素敵が強ければ犬が強くなる、故に犬を戰はさんとすれば先づ主人同士が戰はねばならぬ。

三年と一年！ 双方の陣に一道の殺氣陰々として相搏し相摩した。

『おい』と木俣は巖に言つた。
『犬に喧嘩をさせるのか、人間がやるのか』



『兩方だ』
と、巖は重い口調で言つた。
『うむ、いい事を言つた、忘れるなよ』と、木俣は言つた。此の時恐ろしい犬の格鬪が始



まつた。犬はもう憤怒に熱狂した、今しも赤は其の扁平な鼻を地上に垂れて狼の如き兩耳を屹と立てた、彼の醜惡なる面は益々獰猛を加へて其の前肢

を低く尻を高く、背中に蜿々たる力瘤を降起してじり〳〵と詰め寄る。
鹿毛は其の廣い胸をぐつと引き込めて耳を後方へぴたりと逆立てた。彼は尋常ならぬ敵と見て先づ前肢を突つ張り、後肢を低くして腮を前方に突出した。彼は赤が第一に耳を目蒐けて來る事を知つて居た、で彼は若し敵が跳んで來たら前肢で一撃を食はし、よろめく處を喉に噛み付かうと考へた。四つの眼は黃金色に輝いて齒は雪の如く白く、赤と鹿毛の毛波はきら〳〵と輝いた。八つの足は互に大地にしつかりと喰ひ込み双方の尾は棒の如く屹立した。尾は犬の聯隊旗である。

『やつしい〳〵』

人間共の叫喚は刻一刻に熱した、二つの犬は隙を見合つて一合二合三合、四合目にがつきと組んで立上つた。此の時木俣の身體がひらりと跳り出て、右足高く鹿毛の横腹に飛ぶよと見る間もあらず、巖の拳が早く木俣の襟に掛つた。

『曳ツ』

聲と共に獅子王の足が宙に飜つてばつたり地上に倒れた。

『行けッ』

一年生はこれに氣を得て突進した。

「來るなツ」

巌はかう呼んだ、彼は倒れた隙をおさへ付けようともせず默つて見て居た、彼は木俣の寢業を恐れたのである、木俣の十八番は寢業である。

「生意氣な」

木俣は立上つて猛猪の如く巌を襲うた、捕へられては巌は七分の損である、彼は十七歳、これは十五歳、柔道に於ても段が違ふ、だが柔道や劍術と實戰とは別個の事である。喧嘩になれた巌は進み來る木俣を右に透しざまに片手の目潰しを食はした。木俣のあつとひるんだ拍子に巌は左へ廻つて向脛を蹴飛ばした。

「畜生」

木俣は片膝を突いた、が此の時彼の手は早くも衣嚢に入つた、一挺の角柄の小刀が其の手にきらりと輝やいた。

「刄物を以て……卑劣な奴」

巌の憤怒は絶頂に達した、凡そ學生の喧嘩は双方木劍を以て戰ふ事を第一とし、格闘を第二とする、刀刄や銃器を以てする事は下劣であり醜悪であり、學生として齒するに足らざる事として居

る、これ古來學生の武士道卽ち學生道である。
『殺されても構はん』と生蕃は決心した。彼の赤銅色の顔の皮膚は緊張して其の厚い唇は朱の如く紅くなつた。
『さあ、來い』
木俣は再度の失敗にもう氣が顚倒して來た、彼は今此處で生蕃を殺さなければ再び世人に顏向けがならないと思つた。彼は波濤に鬣を振ふ獅子の如く驀地に突進した、小刀は人々の眼を射た、敵も味方も恐怖に打たれて何人もとめようともせずに兩人の命がけの勝負を見て居た。
生蕃は右にかはし左にかはして巧みに敵の手を潛り拔け、敵の足元の亂れるのを待つて居た、だが木俣は心に焦りながらも體に亂れはなかつた、彼は縱横に生蕃を追ひ詰めた。其處は學校の垣根である、歩一歩に詰められた生蕃は後を垣に遮られた。
『しまつた』と彼は思つた、だが、逃げる事は絕對に嫌ひである。敵を垣根におびき寄せ自分が閑放の地位に立つ方が利益だと思つた、併し彼の此の方策は誤まつた、敵をして方向を轉換させるべく其處に大きな障害がある、彼の右に三尺ばかりの扁平な石があるのに氣が付かなかつた。
『畜生!』

獅子は聲と共に生蕃の肩先目がけて飛び込んだ。ひらりと身を交はしたが生蕃は石に躓いてばたりと倒れた。

『あつ！』

一年生は一齊に叫んだ、獅子は生蕃の上に疾風の如く跳り上つた。と此の時非常な迅速さを以て垣根の横から獅子の足元に飛び込んだものがある、獅子はそれに躓いて倒れた、彼の手には小刀が矢張り光つて居た。

飛び込んだ學生は獅子に躓かした上で起上つて獅子を抱きしめた、獅子は矢鱈に小刀を振つて彼を突かうとした。

『しめたッ』

起上つた生蕃は背後から獅子の喉を締めた。獅子はぐつたりと參つてしまつた。

『怪我しなかつたか、柳君』と生蕃は蒼白な顏をして言つた。

『何でもないよ』

光一は手から滴る血汐を手巾で拭いて居た。

『早い事をするな』

『柳にあんな勇氣があつたのか』

同級生は呆氣に取られて囁き合つた。双方共再び戰ふ氣もなくなつた、犬はいつの間にか戰を止めて逃げてしまつた。

五分間の後、木俣は回氣した。生蕃と光一は水を飲ませて介抱した。

『今日はやられた』と木俣は言つた。

『明日もやられるよ』と生蕃が言つた。

『いづれね』

『堂々と來いよ』

木俣は去つた、三年生が去つた、一年生は初めて鯨波の聲を擧げた。

『君のお蔭だよ』と生蕃はしみ〴〵と光一に言つた。『君は强いんだね』

『いや僕は弱いよ』

『さうぢやない、あの場合君が獅子の股倉へ飛込んでくれなかつたら、僕はあの小刀で一突きにされる處だつたんだ』と生蕃が言つた。

『若し僕が突かれて死んだら君はどうするつもりだ』と光一は友の顏を覗く樣にして言つた。

『君が死んだらか』と生蕃は言つた。『俺も死ぬよ』

『さうして僕を殺した木俣も生きて居られないとすれば……三人だ……三人死ぬ事になる、詰らないと思はんか』

『うむ』

生蕃は暫らく考へたが、やがて大きな聲で笑ひ出した。

『お前俺に喧嘩を止させようと思つてるんだらう、それだけはいけない』

同級生は一度にわつと笑ひ出した。

『だが柳』と生蕃は又言つた。『僕は君に頭が上らなくなつたね』

## 二

商會を早くしまつてチビ公は約束通り柳光一の誕生日に行く事にした。豆腐屋の半纏を脱ぎ棄てゝ絣の着物に袴をはいた時チビ公は堪らなく嬉しかつた。一年前まではかうして學校へ行つたものだと思ふと彼は自分ながら懐舊の情がたかまつて來るやうに思はれた。母は手拭と紙とを出してくれた。

『柳さんの家は金持だからね、行儀を好くして人に笑はれないやうにおしよ』

かう繰返し〳〵言つた、それから御飯の時の心得や、挨拶の仕方まで教へた。さういふ事は母は充分にくはしく知つて居た。

『かまはねえ、豆腐屋の子だから豆腐屋らしくしろよ、何も金持だからつて御世辭を言ふにや當らねえ』と伯父の覺平が言つた。覺平は元來金持と役人は嫌ひであつた、彼は朝から晩まで働いて、只樂しむ處は晩酌の一合であつた。だが彼は一合だけで濟まなかつた。二合になり三合になり、相手があると一升の酒を飲む。それだけで止まずに折り〳〵外へ出て喧嘩をする。彼は醉ふと必ず喧嘩をするのであつた。其のくせ飲まない時にはほとんど別人のごとく溫和で優しくてにこ〳〵して居る。

『ぢや行つて參ります』

『行つておいで』

チビ公は新しい手拭を袴の紐にぶら下げ、新しい下駄をはいて家を出た。光一の家へ行くと既に五六人の友達が來て居た、其の中には醫者の子の手塚も居た、光一の家は雜貨店であるが光一の書齋は離の六疊であつた、隣りの六疊室の襖を外して其處に座蒲團が澤山に敷いてあつた、先客は既

に蓄音器を掛けて聞いて居た。

『よく來てくれたね、青木君』と光一は嬉しさうに言つた。

『今日はおめでたう』とチビ公は丁寧にお辭儀をした。餘りに禮儀正しいので友達は皆笑つた。

『やあ青木君』

『やあ』

一年前の同級生の事とて彼等は昔の如くチビ公を仲間に入れた。次第々々に客の數がふえて最早十二三人になつた、彼等は座蒲團を敷かずに緣側に坐つたり、庭へ出たりしたが御菓子や果物が出たので急に室内に集つた。手塚はかういふ會合にはなくてならない男であつた、彼は蓄音機係として一枚々々に說明を加へた。

『僕はね、カルメンよりトラビヤタの方が好きだよ』と彼が言つた。

『僕は鴨綠江節がいい』と誰かゞ言つた。

『低級趣味を發揮するなよ』と手塚は言つた。さうしてトラビヤタを掛けてひとりで何も彼も知つてるやうな顏をして首を振つたり感心した表情をしたりした。

片隅では光一をとりまいた四五人が幾何學によつて座蒲團一枚を對比して論じて居た。

『そら、角度が同じければ邊が同じだらう』と一人が言ふ。
『等邊三角形は角度も相等しだ』と手塚が言つた。
チビ公に近い處にたむろした一團は物體と影の關係に就いて論じて居た、洋畫式でいふと物體には必ず光の反射がある、どんなに影になつて居る點でも微な反射がある、此の反射と影とは非常に紛はしいので困ると一人が言つた。すると一人は影そのものにも反射があると言ひ出した。
チビ公はびつくりしてものが言へなかつた、彼はたつた一年の間に友達の學問が非常に進歩し、今ではとても及びも付かぬ程自分が後れた事を知つた。幾何や物理や英語、それだけでも今では異國人のやうに差異が出來た、かうして自分が豆腐屋になり段々此の人達とちがつた世界へ墮落して行くのだと思つた。
『ねえ君、僕等には何の話だかわからないね』
彼は隣席の豊松といふ少年にかう囁いた。豊松は八百屋の子で小學を卒業する迄に二度ほど落第した、チビ公よりは二つも年上だが、其の代りに身體が大きく力が強い、其の割合に喧嘩が弱く、よく生蕃に撲られては眼の眞中から大粒の涙をぽろりと一粒こぼしたものだ、今日集つた人々の中で中學校へも行かずに家業に追ひ使はれて居るものは豐公とチビ公の二人丈であつた、彼は學問や

何かの話よりも昔の友達がみな制服を着てるのに自分だけが和服で居るのが恥かしかつた。

『あの人達は學者になるんだよ、俺達とはちがふんだ』と彼は言つた。

『さうだね、俺達は何にならうたつて出來やしない』とチビ公が言つた。

『金持はいいなあ』と豐公は嗟嘆した。『いい着物を着ておいしいものを食べて學校へ遊びに行く、貧乏人は朝から晩まで働いて息も吐けねえ、本を讀みかけると晝の疲れで眠つてしまふした』

『君、お父さんがあるの？』とチビ公がきいた。

『ないよ、君は？』

『僕もない』

『親がないのはお金がないよりも悲しい事だね』

『それに僕は力がない、君は力があるからいいさ』

『力があつても駄目だ』と豐公は急に腹立たしく『俺は毎朝生蕃に撲られるんだ、そして芋だの豆だの梨だの柿だの分捕られるんだ、それでも俺は默つてなきやならない』

『僕も毎朝豆腐を食はれるよ、君なぞは力があるから撲り返してやるといいんだ』

『駄目だよ』と豐公は危ふくこぼれようとする涙をこらへて言つた『彼奴のお父さんは役場の役人

だらう』
チビ公は默つて溜息を吐いた。向ふでは今手塚が得意になつて活動辯士の口眞似をして居た。
『主は誰、むらさきの覆面二十三騎轡をならべて……タララヽヽタ、タラヽラヽタ、プカプカ〳〵ラヽヽラヽ』
『うまいぞ〳〵』と一同が喝采した。
『もう一つ〳〵』
手塚は得意になつて鶯の啼聲、山羊、ペリカン、猫、猫が屋根から落ちて水溜にぴしやりとおちた音などを續けざまにやつた。彼は物眞似が上手で何事に就いても器用であつた。それから彼はハイカラな流行唄を唄つた。
『僕等にやわからない』とチビ公は言つた、實際見るもの聞くものごとに彼は舊友達より遙かに後れた事に氣が付いた、朝は學校へ行く、必要な書籍や雜誌は金を惜しまず買つて貰ふ、學校から歸ると活動寫眞を見に行つていろ〳〵な事を覺えて來るのだ、天秤棒を舁いで家を出で、疲れて家へ歸り其のまゝ寢てしまふ自分等とは餘りに身分の差がある。
お膳が運ばれた、チビ公は小さくなつて室の隅に坐つた、彼は今日此の席へ來なければよかつた

と思つた。いろ〳〵な空想は失望や憤慨に伴うて頭の中に往來した。人々は盛にお膳を荒した、チビ公は默つてお膳を見ると鯛の燒肴にきんとん、蒲鉾、鮪の刺身は紅く輝き、吸物は暖かに湯氣を立てゝ居る。彼は伯父さんを思ひ出した、伯父さんはいつも口癖にかう言つた。

『鮪の刺身で一杯やらかしたいもんだなあ』

これを伯父さんへ持つて行つたらどんなに喜ぶだらう、彼はかう思ひ返した、さうして鯛は伯母さんと母が好きだから蒲鉾だけは家へ歸つてから僕が食べよう。

食事が終つてから又も餘興が初まつた、チビ公は暇を告げて一と足早く光一の家を出た、彼は手拭に包んだ肴の折箱を後生大事に片手にぶら下げ、晝の如く明るい月の町をひとり田圃路へさし掛つた。路の彼方に見える大きな建物は一年前に通ひなれた小學校である。月下の小學校は今、安らかに眠つて居る。梯形の屋根の棟から斜に擴がる瓦の波、思ひ出したやうにぎら〳〵反射する窓の硝子、こんもりと茂つた校庭の大樹、其處で自分は六年の間平和に育つた、其處には荒い風も吹かす冷たい雨も降らず、優しい先生の慈愛の眼に見まもられて、春の草に遊ぶ小鳩の如く唄ひつ走りつ跳りつ笑つた、其處には階級の偏頗もなく、貧富の差異もなく、勉強するものは一番になり怠けるものは落第した、だが六年の終り！　おうそれは喜ぶべき卒業式か、將又悲むべき卒業式

か、告別の歌を唄ふと共に同じ巣の鳩や雀は西と東、上と下へ劃然と分れた。親のある者、金のある者は猶學府の階段を攀ぢ登つて高等へ進み師範へ進み商業學校へ進む、しからざるものは此の日を限りに學問と永久に別れてしまつた。

チビ公は月光を浴びながら立ち止つて感慨にふけつた。

『やいチビ』

突然聲が聞えて路次の垣根から生蕃が現れた。

『折詰をよこせ』

『いやだよ』とチビ公は折箱をふところに押し込んだ。

『いやだ？　こら豊松はおとなしく俺に貢を捧げたのにお前はいやだと言ふのか』

『いやだ、これは伯父さんにあげるんだから』

『やい、こらッ、貴樣は俺の拳骨がこはくないかよ』

生蕃は豊公から掠奪した鯛の尾を摑んで胴の處をむしや〳〵食べながら言つた。

『阪井君、僕は毎朝君に豆腐を食はれても何とも言はなかつた、これだけは堪忍してくれ給へ、君は豊公のを食べたならそれでいいぢやないか』

「貴様は豊公を犠牲にして自分の義務を逃れようといふのか」
『義務だつて？　僕は何も君に看をやる義務がないよ」
「やいこらツ、三年のライオ



ンを退治た生蕃を知らないか、よしッ』

生蕃の手が早くもチビ公のふところに入つた。

『いやだ〳〵僕は死んでもいやだ』

チビ公は両腕を組んでふところを守つた。

『えい、面倒だ』

生蕃はずる〳〵と折箱を曳き出した、チビ公は必死になつて争うた。一は伯父を喜ばせようといふ一心にのぼせ詰めて居る、一は我が腹を充たさうといふ慾望に氣狂はしくなつて居る。大兵とチビ公、無論敵し得べくもない、生蕃はチビ公の横面をぴしやりと撲つた、撲られながらチビ公は手拭の端を握つて放さない。

『えいッ』

聲と共にけ上げた足先！　チビ公はばつたり倒れた。再び起上つた時遥に生蕃の琵琶歌が聞えた。

『夫れ達人は大觀す……榮枯は夢か幻か……』

チビ公の眼から熱い涙が止め度なく流れた、金の爲にさいなまれた彼は、腕力のためにさいなまれる、此の世のありとあらゆる迫害は只我にのみ集つて來るのだと思つた。

袴の泥をはらつてとぼ〳〵と歩き出したが、いろ〳〵な悲憤が胸に燃えて何處をどう歩いたかわからなかつた、彼はひよろ長いポプラの下に立つた時初めて我が家へ來た事を知つた、家の中では暗い電燈の下で伯父が豆を挽いて居る音が聞える。

『ぎい〳〵さら〳〵〳〵』

臼を漏るゝ豆の音が丁度霰のやうに嚴めしい中に、臼の擦れる音はいかにも閑寂である、店の奥には母が一生懸命に着物を縫うて居る。瘠せた顔に後れ毛が垂れて切れ目の長い眼で針を追ひながらふと手を止めたのは我が子の足音を聞きつけた爲であらう。

『折詰がない』

から思つた時チビ公はこらへられなくなつて泣き出した。

『誰だえ』

母の聲がした。

『千三か』

石臼の音が止んだ。さうして戸を開けると共に伯父の首だけが外へ出た。

『何をしてるんだ千三』

チビ公は黙つて居る。

『おい、泣いてるのか』

伯父は手を曳いて家へ入れた。母は心配さうに此の有様を見て居た、伯母は既に寝てしまつたらしい。

『どうしたんだ』

『伯父さんにあげようと思つて僕は……』

チビ公はとぎれ〱に仔細を語つた。

『まあ着物は破けて、袴は泥だらけに……』

と母も悲憤の涙に暮れて言つた。

『助役の子だね、阪井の子だね、よしッ』

伯父の顔は眞赤になつたかと思ふと直ぐまつさをになつた。彼は水槽の縁に載せた手拭を、ふところに押し込んで家を飛出した。

『伯父さんを止めて』と母が叫んだ。チビ公は直ぐ外へ飛出した。

『大丈夫だ、心配すな、みんな寝てもいいよ』

伯父さんは走りながらかう言つた。

『待つておいで』

母はかう言つて草履を引掛けて伯父の後を追うた。チビ公は茶の間へ上つて時計を見た、それは九時を打つたばかりであつた。チビ公は上り框に腰を掛けて伯父と母の歸りを待つて居た。伯母さんは晝の中は口やかましいにかゝはらず夜になると全く意氣地がなくなつて眠つてしまふので起した處で起きさうにもない。豆腐屋は未明に起きねばならぬ商賣だ、チビ公は晝の疲れにうと〳〵と眠くなつた

『眠つちやいけねえ』と彼は自分を叱り付けた、が一旦襲ひ來たつた睡魔は中々退かない、ぐらりぐらりと左右に首を動かしたかと思ふと障子に頭をこつんと打つた、はつと眼をさまして庭へ出て顔を洗つた、月はポプラの枝々を漏れて青白い光を戸板や石臼や菰や水槽に落すと、其れ等の影がまざ〳〵と活きたやうに浮いて來る。チビ公は口笛を吹いた。

時計は十時を打つた。

『伯父さんが喧嘩をしてるんぢやなからうか、若しさうだとすると』

チビ公はかう考へた時少年の血潮が五體に鳴響いた。



『阪井の家へ行つたに違ひない、だが阪井の親父は助役だ、子分が大勢だ、伯父さん一人ではとても敵はないだらう、さうすると……』

彼はもう默つて居る事が出來なくなつた、身體は小さいが俺の方が正しいんだ、伯父さんを助けてあげなきやならない。

彼は雨戸の心張棒を外して手に提げた、それから丈夫さうな草履にはきかへて外へ出た、目指す處は阪井の家である。彼は今にも伯父が亂鬪亂戰に火花を散らして居るかのやうに思つた、胸が高



鳴りして身體が慄へた。町に松月樓といふ料理屋がある、其の前にさし掛つた時彼は只ならぬ物音を聞いた。一人の男が跣足のまゝ。

『醫者を〳〵』と叫んで走つた。すると他の男が又同じ事を言つて走つた。

『もしや伯父が此處で……』とチビ公は直感した、途端に暗がりから母が飛出してチビ公の肩に凭れた。

『大變だよ千三、伯父さんが……』

母は半ば泣き聲であつた。ばら〳〵と玄關に五六人の影が現れた。

『惡い奴を撲るのは當り前だ、俺の家の小僧を嚇かして毎朝豆腐を強奪しやがる、俺は貧乏人だ、貧乏人のものを盜んでも助役の息子なら構はないといふのか』

確かに伯父さんの聲である。

『子供の喧嘩に出しやばつて、相手の親を撲るといふ法があるか』

二三人が怒鳴つた。

『あやまらないから撲つたんだ』

『ぐづ〳〵言はんと早く歩け』

『俺をどうするんだ』
五六人の人々が玄關口で押し合つた、其の中から伯父さんの半裸體の姿が現れた、伯父さんの顔はまつさをになつて唇から血が滴つて居た、彼の瘠せた肩は呼吸の度毎に烈しく動いた。
『さあ出ろ』と巡査が言つた。
『履ものがない』と伯父さんが言つた。
『其の儘でいい』
『俺は獸物ちやねえ』
誰かゞ外から草履を投げてやつた、伯父さんは其れをはいた。
『伯父さん！』とチビ公は門内に駈け込んで言つた。
『おう千三か、お前の仇は討つてやつたぞ、いいか明日から商賣に出る時にはな、鐵砲と薙刀と脇差と鉞と七つ道具を背負つて出ろ、いいか、助役の悴が強盜に出ても警察では豆腐屋を保護してくれないんだからな』
かう言つた伯父さんの息は酒臭かつた。
『歩け』と巡査が言つた。

『待つて下さいおまはりさん』とチビ公は巡査の前に坐つた。

『伯父さんが醉つてるんです、伯父さんを免して下さい、明日の朝になつて酒が醒めたら伯父さんと一緒に警察へあやまりに參ります、伯父さんが居なければ私一人では豆腐を作へることが出來ません』

チビ公の聲は涙に顫へて居た。

『何をぬかすか馬鹿』と伯父さんが怒鳴つた。

『商賣が出來なかつたら止めてしまへ、商賣をしたからつて助役の息子に食はれてしまふばかりだ』

伯父さんはのそ〳〵と歩き出した、彼は門の外に泣く〳〵立つて居る妹（チビ公の母）を見やつて少し躊躇したが。

『あとは賴むぜ、俺は強盜の親玉を退治たんだから、これから警察へ御褒美を貰ひに行くんだ』

母が何か言はうとしたが伯父はずん〳〵いつてしまつた、一人の巡査と、二人の町の人が付添うて行つた。チビ公と母は何處までも其の後についた、伯父さんは警察の門を入る時ちらと二人の方を振り向いた。

『困つたねえ』と母が言つた。
『阪井に怪我をさしたんでせうか』
『さうらしいよ、大した事もないやうだが、それでも相手が助役さんだからね』
『今晩歸つて來るでせう』
『さあ』
二人は思ひ〳〵の憂欝をいだいて家へ歸つた、母は戸口に立ちどまつて深い溜息を吐いた、彼女は伯母のお仙を恐れて居るのである、伯父は親切だが伯母は何かにつけて邪慳である、頼るべき親類もない親子は、毎日伯母の顏色を伺はねばならぬのであつた。
二人はやうやく家へ入つた、さうして伯母を起して仔細を語つた。
『へん』と伯母は冷やかに笑つた『何てえ馬鹿な人だらう、此の子が可愛いからつて助役さんを撲るなんて……明日から商賣をどうするつもりだらう、どうしてご飯を食べて行くつもりなの?』
お仙は眠い眼もすつかり覺めて口汚なく良人を罵つた。
『商賣は僕がやります、伯母さん、そんなに伯父さんを悪く言はないで下さい』
チビ公は決然とかう言つた。

「やれるならやつて見るがいいや、俺知らないよ」
お仙は再び寝床へもぐり込んだ。チビ公と母のお美代は床へ入つたがなか／＼眠れない。
「何よりもね、差入物をしなくちやね」とお美代が言つた。
「差入物つてなあに？」
「警察へね、毛布だのお弁当だのを持つて行くんだよ、警察だけで済めばいいけれどもね」
「お母さんが弁当をこさへてくれゝば僕が持つて行くよ」
「それがね、お金を弁当屋に払つて、差入して貰ふのでなきやいけないんだよ」
「いくら？」
「一度の弁当は一番安いので二十五銭だらうね」
「三度なら七十五銭ですね」
「あゝ」
「七十五銭！」
七十五銭はチビ公一人が一日歩いて儲ける分である、それを悉く弁当代にしてしまへば二人がどうして食べて行けよう。チビ公は当惑した。

「豆腐をひくにしても煮るにしてもお前の腕ではとても出來ないし、私の考へでは當分休むより外に仕方がないが、さうすると』

お美代はしみ〲と言つた。

『休みません、伯父さんの出來る事なら僕がやつて見せます、僕のために勘住を賣つた伯父さんに對しても僕は留守中立派にやつて見せます』

「でも差入物はな』

『お母さん、僕の考へではね、お母さんも僕と一緒に豆腐を作つて、それから伯父さんの廻り場所を賣りに出て下さい、二人でやれば大丈夫です』

「さうだ」とお美代は嬉しさうに言つた『さうだよ千三、私は女だから何も出來ないと思つて居たが、今夜から男になればいいのだ、伯父さんと同じ人になればいいのだ、さうしようね』

『お母さんに荷を擔がせて豆腐を賣らせたくはないんだけれども……お母さん、僕は未だ小さいから仕方がありません、大きくなつたら屹度此の埋合せをします』

チビ公の興奮した眼は瑠璃の如く澄み渡つて瞳は敢爲の勇氣に燃えた。

うと〱と眠つたかと思ふともう東が白みかけたので母に起された、チビ公は勢よく起きて仕事

に取り掛つた、お美代も共に火を焚き付けた、此の勢に押されてお仙はぶつ〳〵言ひながらも矢張り働き出した。

『伯母さんは何もしなくてもいいから只指圖だけして下さい』とチビ公は言つた。

至誠は必ず天に通ずる、チビ公の眞劍な勞働は邪慳のお仙の角を折つてしまつた、三人は心を一つにして、覺平が作る豆腐に劣らないものを作り上げた。

『さあ行かうぜ』とお美代は威勢好く言つた。脚絆をはいて足袋跣足になり、尻端折をして頭に頰冠をなし其の上に伯父さんの饅頭笠を被つた母の支度を見た時チビ公は胸が一ぱいになつた。

『喇叭は吹けないから鈴にするよ』とお美代は笑つて言つた。

『ぢやお先に』

チビ公は荷を擔いで家を出た、何となく戰場へでも出るやうな緊張した氣持が五體に溢れた、彼は生れて始めて責任を感じた、今までは寒いにつけ暑いにつけ、商賣を休みたいと思つた事もあつた、又伯父さんに叱られるから仕方なしに出て行つた事もあつた、併し此の日は全然それと異つた一大革命が精神の上に稻妻の如く起つた。

『俺がしつかりしなければみんなが困る』

彼は警察にある伯父さんも伯母も母も痩腕一本で養はねばならぬ大責任を感ずると共に斧鉞の如き勇氣が如何なる困難をも打砕いてやらうと決心させた。喇叭の音は朗かに響いた。彼は例の田圃路から町へ入らうとした時、今日も生蕃が待つて居るだらうと思つた。

彼は微笑した、それはいかにも自然に腹の中から湧き出た穏かな微笑であつた。いつも彼は此の所で幾度か躊躇した、彼は生蕃を恐れたのであつた、が彼は今、それを考へた時恐怖の念が夢の如く消えてしまつた。で彼は堂々と喇叭を吹いた。

町の角に……果して生蕃が立つて居た。

『やい』と生蕃は血走つた眼でチビ公を睨んだ。

『お前に食はせる豆腐はないぞ』とチビ公は昂然と言つた。

『何を？』

生蕃は吃驚して叫んだが次の句がつげなかつた、彼はいつも涙ぐんでぺこ／＼頭を下げるチビ助が、而も昨夜彼の伯父が俺の父を撲つた事を知つてるチビ助が、復讐の恐れも感ぜずにいつもより勇敢なのを見ると、實際これ程不思議な現象はないのであつた。

『待てッ』

『待つて居られないよ、明日の朝又逢はうね』

チビ公はずん〳〵去らうとした。

『こらッ』

生蕃の手が天秤棒に掛つた、と此の時電柱の蔭から聲が聞えた。

『阪井、止せよ』

それは柳光一であつた。

『何でえ』

『君は惡いよ』と光一は歩み寄つた。

『何でえ』と生蕃が吼えた。

『君は僕と親友になると言つた事を忘れたか』

『忘れやしねえ』

『ぢや、一緒に學校へ行かう』

『併し』

『もういいよ』
光一は生蕃の肱を取つた、さうしてチビ公ににつこりして振り返つた。チビ公は鳥打帽を脱いで一禮した。
此の日ほど豆腐の賣れた日はなかつた、町では覺平が助役を撲つて、拘留されたといふ噂が一圓に擴がつた、而もそれは貧しき豆腐屋の子が擔つて來る豆腐を強奪した恨みだとわかつたので町内の同情は流れの低きに就くが如くチビ公に集まつた。
『買つてやれ〳〵可哀さうに』
豆腐の嫌ひな家までが爭うて豆腐を買つた、チビ公の吹く喇叭は凱歌の如く鳴り響いた。
二時間にして賣り盡くしたのでチビ公は警察へ行つた。
『伯父さんを免して下さい、伯父さんが惡いんでないのです、酒が惡いんですから』
彼は警部にかう哀願した。
『警察では免してやりたいんだ』と警部は同情の眼を瞬いて言つた『だが阪井の方で示談にしないと警察では困るんだ』
『監獄へ行くんでせうか』

『さうなるかも知れない、君の方で阪井に掛け合つて何とかして貰ふんだね』

チビ公はがつかりして警察を出た、それから其の足で差入屋へ行き、賣溜から七十五錢を出して言つた。

『どうかよろしくお願ひします』

『覺平さんだつたね』と差入屋の亭主が言つた。

『はあ』

『覺平さんの差入は濟んでるよ』

『三度分の辨當ですよ』

『あゝ濟んでる』

『誰がしてくれたのです』

『誰だかわからないが濟んでる、五十錢の辨當が三本』

『へえ、それぢや塵紙を一つ……』

『塵紙と手拭と、毛布二枚と枕と…… それも濟んでる』

『それも？』とチビ公は呆れて『どなたがやつて下すつたのですか』

『それも言へない、言はずに居てくれと言ふんだから』
『ぢや差入するものは外になんでせう』
『其の人が皆やつてくれるからいいだらう』
チビ公は呆氣に取られて言葉が出なかつた、親類とて外にはなし、友達はあるだらうが、併し匿名にして差入するのでは、ふだんにさほど懇意にしてる人でないかも知れぬ、自分では想像も出來ぬが、母にきいたら思ひ當る事もあるだらう、かう思つて彼は其處を出た、家へ歸ると母も既に歸つて居た。生れて初めて天秤棒を舁いだので母はがつかり疲れて、肩を冷水で冷して居た。
『どうしたお母さん』とチビ公が言つた。
『大變によく賣れたよ』と母は笑つて居た。
『僕の方も非常によかつたです、二時間の中に』
彼はからの桶を見せそれから賣溜を伯母に渡して差入ものゝ一件を語つた。
『誰だらうね』
『さあ誰だらう』
伯母と母は頻りに知人の名を數へ上げたが、それはみんな匿名の必要のない人であり、毛布一枚

を買ふ資力のない人ばかりであつた。
其の日の夕飯は淋しかつた、酒を飲んで喧嘩をするのは困るが、さて其の人が牢獄にあると思へば淋しさが一層しみ〴〵と身に迫る。
『阪井に掛合つて示談にして貰ふやうにしませうかね』と母は伯母に言つた。
『まあ、さうするより他に仕方がありますまい』と伯母が言つた。チビ公を留守にして二人はそれぞれ知人を頼つて示談の運動をした。
『よろしい、何とかしませう』
から快諾してくれた人は四五人もあつたが、翌日になると悄然としてから言ふ。
『どうも阪井の奴はどうしてもききませんよ、此の上は辯護士に頼んで……』
望みの綱も切れ果てゝ一家三人は互に溜息を吐いた。元より女と子供の事である、心は勇氣に滿ちても體の疲勞は三日目の朝に激しく襲うて來た、母の肩は紫に腫れて荷を負ふ事が出來ない、チビ公は睡眠の不足と過度の勞働のために頭が大磐石の如く重くなり動悸が高まり息苦しくなつて來た。
豆腐を買ふ人は多くなつたが、作る人がなくなり賣りに出る者がなくなつた。

示談が不調で覺平は監獄へ廻された。

# 三

何人が覺平の差入物をしたかは永久の疑問として葬られた。併しチビ公の一家は次第々々に貧苦に迫つた。夜中の二時に起きて豆腐を作れば朝にはもう疲れて町を廻る事が出來ない。町を廻らうとすれば夜中に豆腐を作る事が出來ない。このためにお美代は女手一つで僅ばかりの豆腐を作り、チビ公一人が賣りに出る事にきめた。

製作の量が少いので、いくら賣れても儲ける金額は極めて少くなつた。チビ公はいつも歸り途に吉田から田螺を拾うて歸つた。一家三人のお菜は田螺と雪花菜ばかりであつた。伯母のお仙は毎日のやうに愚痴をこぼした。

「お前のためにこんな事になつたよ」

これを聞く度にチビ公はいつも淚ぐんで言つた。

「伯母さん、僕はどんなにも稼ぐから、そんな事を言はないで下さいよ」

或日彼は豆腐桶を舁いで例の裏路を通つた、彼の耳に突然異樣の音響が聞えた。それは醫者の手

塚の家であつた。夕日は赫と植込みを染めて土藏の壁が燃ゆるやうに赤く反射して居た。鬱蒼と茂つた樹々の緑の間に、明るい牡丹の花が眼ざむるばかりに咲き誇つてるのが見える。其處に大きな池があつて土橋を架け渡し汀には白い菖蒲も見える。それよりずつと奥に廻廊紆曲して障子の色眞白に、そこらからピアノの音が榮華を誇るかの如く流れて來る。

『あゝその家は僕の父の家だつたのだ』

チビ公は暗然として桶を路傍に下して腕をくんだ。

『お父さんは政黨のためにこの家まで失くなしてしまつたのだ。お父さんは隨分人の世話もし、此の町のためになる事をしたのだが、今では誰一人それを言ふ者がない。其の子の僕は豆腐を賣つて……それで御飯を食べる事が出來ない』

チビ公は急に泣きたくなつた、彼は自分が生れた時には、この邸の中を女中や乳母に抱かれて子守唄を聞きながら眠つた事だらうと想像した。

『詰らないな』と彼は歎息した。『いくら働いても御飯が食べられないのだ、働かない方がいゝ、死んでしまふ方がいゝ、僕なぞは生きてる資格がないのだ、路傍の蛙のやうに人に踏まれてへたばつてしまふのだ』

暗い憂鬱は彼の心を閉ざした。彼は自分の影法師がいかにも哀れに細長く、垣根に屈折して居るのを見ながら溜息を吐いた。
『影法師までなんだか見すぼらしいや』
ピアノの音は樹々の葉を搖つて涼風に乘つて來る。
『お父さんのある者は幸福だなあ、あゝしてぽうん〳〵ピアノをひいて樂しんで居る』
彼はがつかりして桶を舁いだ。疲れた足を曳きずつて二三間歩き出すと其處で一人の女の子にあつた。それは光一の妹の文子であつた。彼女は尋常の五年であつた。下ぶくれの瓜實顏で眼は大き過ぎる程ぱつちりとして髮を二つに割つて兩耳の處で結び玉をこさへて居る。元祿袖のセル茶の袴を穿き一生懸命にゴムほゝづきを口で鳴らして居た。
『今晩は』とチビ公は聲を掛けた。
『今晩は』と文子はにつこりして言つた。が直ぐ思ひ出したやうに『青木さん、兄さんが貴方を探してたわ』
『兄さんが？』
『あゝ』

『何か用事があるんですか』

『さうでせう私知らないけれども』

文子はから言つて又ぶう〳〵ほゝづきを鳴らした。

『急用なの？』

『さうでせう』

『なんだらう』

『會へばわかるぢやないの？』

『それはさうですな』

『兄さんが今、家に居るでせう、行つて頂戴ね』

文子はから言つたが直ぐ『私も一緒に行くわ、彼處に大きな犬が居るから追拂つて頂戴ね』

『あゝ酒屋の犬ですか』

二人は並んで歩き出した。小學校に居た時には文子はまだ幼かつた。下駄の鼻緒が切れて難儀してるのを見てチビ公は手拭を裂いて鼻緒をすげてやつた事がある。其の時肩につかまつて片足をチビ公の片足の上に載せた事を彼は記憶して居る。

二人は光一の家の裏口の前へ來た。

文子は足を蹴上げて走り出し、勝手口の戸を開けたかと思ふと大きな聲で叫んだ。

『待つてゝね』

『兄さん、青木さんをつれて來たわ、兄さん早く』

光一の姿が戸の間から現れた。

『やかましい奴だな、お轉婆！』

『そんな事を言つたら青木さんをつれて來てあげないわ』

『お前がつれて來なくても青木君は此處に居るぢやないか』

光一は笑ひながらチビ公の方を向き、

『君、一寸入つてくれ給へ』

『僕は泥足ですから』

『さうか、ぢや庭へ行かう』

チビ公は桶を片隅に置いて光一の後に從つた。二人は卯の花が雪の如く咲きみちて居る中庭へ出た。其處の鷄舍に今しも追ひ込まれた鷄共は、まだごた／＼犇めき合つて居た。

『君に相談があるんだがね』と光一は謹直な顔をして言ひ出した。『僕は僕の父ともよく相談の上で此の事をきめたんだが』

『どんな事ですか』

『つまり、君にもいろ〳〵不幸な事情が重なつてるやうだが君はもう少し學問をする氣がない





かね』
『それは僕だつて……』とチビ公は早口に言つた。『學問はしたいけれども僕の家は……』
『だからね君、君が中學校をやつて大學をやるまでの學資なら僕の父が出してあげるとかう言ふのだ。君は學校でいつも優等だつたしね、それから君の性質や品行の事に就いては此の町の人は誰でも知つてるのだからね、豆腐屋をしてるよりも、學問をしたら、きつと成功するだらうと父も言ふんだ。實はね、今度生蕃の親父の一件で君の伯父さんがあんな事になつたら、それで君は夜も晝も稼ぎ通しに稼いで居るのを見て僕の父は……』
『あゝわかつた』と、チビ公は思はず叫んだ。『伯父さんの差入物をしてくれたのは貴方のお父さんですね』
『いや〳〵、そんな事は……』と光一は頭をふつて、『僕は知らない、なんにも知らない』
『かくさないで言つて下さい、僕はお禮を言はないと氣が濟まないから』
『さうぢやないよ君、決してさうぢやない、ところで君、今の話はどうする、君は僕と一緒に中學へ通はないか、ねえ君、君は僕よりも出來るんだからね、僕の家は君に學資を出す位の餘裕があるんだ、決して遠慮する事はないよ、僕の父は商人だけれども金を貯める事ばかり考へてやしない、

金より大切なのは人間だつてしじう言つてるよ、君のやうな有望な人間を世話する事は父が一番好きなことなんだから、ねえ君、二人で一緒にやらう、大學を出るまでね、君は二年の試驗を受け給へ、きつと入學が出來るよ、ねえ君」

光一の眼は次第に熱氣を帶びて來た、彼の心は今どうかして親友の危難を救ひ、親友をして光ある世界に活躍せしめようといふ友情にみたされて居た。

『ねえ青木君、ねえ、さうしたまへよ』

彼は千三の手をしつかりと握つて顏を覗いた。卯の花が二人の胸に袂にちら／＼と散りしきる。千三は默つて俯向いて居た。

社會のどん底に蹴落されて、貧苦に小さな胸を痛め、伯父は牢獄にあり、我が身は泥に喘ぐ鮒の如き今の場合に、たゞ一人萬斛の同情と親愛を寄せてくれる人があると思ふと、千三の胸に感激の血が高波の如く躍らざるを得ない。彼は石の如く沈默した。

「ねえ青木君、僕の心持がわかつてくれたらうね」

「…………………」

「明日からでも商賣を止めてね、伯父さんが出て來るまで休んでね、さうして君は試驗の準備にか

かるんだね、決して不自由な思ひはさせないよ』

『…………………』

『僕はね、金持だからと言つて威張るわけぢやないよ、それは君もわかつてくれるだらうね』

『無論……無論……僕は……』

千三は初めて口を開いたが、胸が一ぱいになつて、なんにも言へなくなつた。烈しいすゝり泣が一度に破裂した。

『ありがたう……僕は嬉しい』

涙は頬を傳うて滴々として足元に落ちた。足には草鞋を穿いて居る

『ぢやね、さうしてくれるかね』と光一も涙をぼろ〳〵零しながら言つた。

『いゝや』と千三は頭をふつた。

『いやなのかい』

『お志は感謝します。だが柳さん』

千三は再び沈默した。肩を搖る大きな溜息が幾度も起つた。

『我儘のやうだけれども僕はお世話になる事は出來ません』

『どうして？』

『僕はねえ姉さん、僕は獨力でやり通したいんです、人の世話になつて成功するのは誰も出來ます、僕はひとりで……ひとりでやつて失敗した處が誰にも迷惑を掛けません、僕はひとりでやりたいのです』

『しかし君』

光一は千三の手を緊しく握りしめてじつと顏を見詰めたが、やがて茫然と手を放した。

『失敬した、君の言ふ處は實にもつともだ、僕はなんにも言へない』

庭の茂りの間から文子の聲が聞えた。

『兄さん！　御飯よ、今日はコロッケよ』

『そんな事を言ふものぢやない』と光一は叱るやうに言つた、文子の聲は止んだ。

『どうか惡く思はないやうにね』と千三が言つた。

『いや、僕こそ失敬したよ』と光一は言つた。

『今まで通りにお願します』

『僕もね』

二人は再び堅い握手をした。

『コロッケがさめるわよ』と文子は窓から顔を出して言つた。

『うるさい奴だな』と光一は笑つた。

『さやうなら』

千三は桶を舁いでふら〳〵と歩き出した。光一は默つて後姿を見送つたが、兩手を顔に當てゝ泣き出した。日は次第に暮れかけて卯の花だけが僅に白く殘つた。

翌日光一は學校へ行くと手塚が彼を待つて居た。

『君、氣を付けなきやいけないよ、生蕃が君を殺すと言つてるよ』

『なぜだ』

『君の父がチビ公の伯父さんの差入物をしたさうぢやないか』

『誰がそんな事を言つたんだ』

『町では專ら評判だよ』

『そんな事は僕は知らん、よしんば事實にした處で、生蕃が何も僕を殺すに當らない話だ』

『僕もさう思ふがね、あの問題はチビと生蕃のことから起つて、大人同志の喧嘩になつたんだか

らな」

『構はんさ、ほつとけ、僕は生蕃を恐れやしないよ』

『君はいつも傲慢な顔をしてるとさう言つてたよ』

『なんとでも言ふがいゝ』

『併し気を付けなけれや』

　手塚はいつも表裏反覆常なき少年で、今日は西に味方し明日は東に味方し、好んで人の間柄を裂いて喜んでるので、元一は彼の言ふ事をさまで気に留めなかつた。

　北の強壮薬は得意の絶頂にあつた、彼が三年のライオンを征服してから盛名校中に轟いた。彼は権勢を高く見せようと隊伍を聚合り、下腹を前へ突出して歩くと、北の部下共は左右に従つて同じやうな態度を真似るのであつた。特に彼は琴平の一件があつてから気焔が益々気焔を加へた。

　学校の小使は廃兵であつた。彼は喇叭を吹く事が上手で、時間々々には玄関へ出て腹一ぱいに吹き上げる。それから右と左の廊下へ吹き吹かすと生徒がぞろ〳〵教室を出る。それを見ると俺は愉快で堪らない。

『生意気な事を言つても俺の喇叭で出たり入つたりするんだ、お前達は俺の命令に従つてるんだや

ないか』

かう彼は生徒共に言ふのであつた。彼はもう五十を過ぎたが女房も子もない、ほんの一人ぽつちで毎日生徒を相手に氣焰を吐いて暮して居る、彼は日清戰爭に出征して牙山の役に敵の大將を銃劍で刺した件を話す時には其の眼が輝き其の顔は昔の誇りに滿ちて朱の如く赤くなるのであつた。

『其の時我が鎌田聯隊長閣下は馬の上で劍を高く揮つて突貫！と號令をかけた。そこで大澤一等卒は眞先かけて疾風の如く突貫した。敵は名に負ふ袁世凱の手兵だ、どツ〳〵と煙を立てゝ寄せ來る兵は何千何萬、とても敵ふべき筈がない』

『逃げたか』と誰かゞ言ふ。

『逃げるもんか、日本男兒だ、大澤一等卒は銃劍を眞向に振りかぶつて…………』

『喇叭はどうした』

『喇叭は背中へ背負ひ込んだ』

『喇叭卒にも銃劍があるのか』

『あるとも、兵たる以上は……まあ默つて聞け大澤一等卒は……』

『今や小使になつてる』



生徒は『わつ』と笑ひ出す、大抵此の位の處で軍談は中止になるのだが、彼はそれにも懲りず生徒をつかまへては懷舊談を續けるのであつた。大澤一等卒が果してそれだけの武功があつたかどうかは何人も知らない事なのだが、生徒間ではそれを信ずる者がなかつた。大澤小使の一番恐れて居たのは體操の先生の阪本少尉であつた、彼は少尉の顏を見るといつも直立不動の姿勢で最敬禮をするのであつた。

『小使！　お茶をくれ』

『はい、お茶を持つて參ります』

實際大澤は校長に對するよりも少尉に對する方が慇懃であつた、生徒は彼を最敬禮と綽名した。最敬禮の最も嫌ひなのは生蕃であつた、生蕃はいつも彼を罵倒した。生蕃は大澤一等卒が牙山の戰で一生懸命に逃げてアンペラを頭から被つて雪隱でお念佛を唱へて居たと言つた。それに對して大澤は顏を赤くして反駁した。

『見もしないでそんな事を言ふものぢやない』

『俺は見ないけれども官報にちやんと出て居たよ』と生蕃が言つた。

『途方もねえ、そんな官報があるもんですか』

何かにつけて大澤と生蕃は喧嘩した、それが或日喇叭の事で破裂した。大澤が他の用事をして居る時に生蕃が喇叭を盜んで何處かへ行つてしまつた。これは大澤に取つて由々しき大事であつた。大澤は血眼になつて喇叭を探した、さうしてとう〳〵生蕃が隣屋にくれてやつた事がわかつたので彼は自分の秘藏して居る馬の尾で編んだ朝鮮帽を隣屋にやつて喇叭を取り返した。

「助役の件でなけりや口の中へ喇叭を突込んでやるんだ」と彼は憤慨した。

生蕃の素行に就いては屢々學校の會議に上つたが、併しどうする事も出來なかつた。英語の先生に通稱カトレットといふ三十歳位の人があつた、この先生は若いに似ずいつも和服に木綿の袴をはいて居る、先生の發音は恐ろしく舊式なもので生徒は皆な不服であつた。先生はキャツト（猫）をカツトと發音する、カツレツをカトレツトと發音する。

「先生は舊式です」と生徒が言ふ。

「語學に新舊の區別があるか」と先生は儼然として言ふ。

「併し外國人と話しをする時に先生の發音では通じません」

「それだから君等はいかん、語學を修めるのは外人と話すためぢやない、外國の本を讀むためだ、本を讀んで彼の長所を取り以て我が藥籠に收めればいゝ、それだけだ、通辯になつて、日光の案內

をしようといふ下劣な根性のものは明日から學校へ來るな』

生徒は沈默した。生徒間には先生の言は道理だといふものがあり、又、頑固で困るといふものもあつた、が結局先生に對してはなにも言はなくなつた、英語の先生とは言ふもの丶、この朝井先生は猛烈な國粹主義者であつた、或日生徒は英語の和譯を左から右へ横に書いた。それを見て先生は烈火の如く怒つた。

『君等は夷狄の眞似をするか、日本の文字が右から左へ書く事は昔からの國風である、日本人が米の飯を食ふ事と、顏が黄色である事と眼玉が漆の如く黑く美しいことと、君に忠なる事と親に孝なる事と友に篤き事と先輩を敬ふ事は世界に對して誇る美點である、それを君等は淺薄な歐米の蠻風を模倣するとは何事だ、さあ手を擧げて見給へ、諸君のうちに眼玉が青くなりたい奴があるか、天皇に叛かうとする奴があるか、日本を歐米の奴隷にしようとする奴があるか』

先生の涙が輝いた、生徒はすつかり感激して泣き出してしまつた。

『新聞の廣告や、町の看板にも不心得千萬な左からの文字がある、それは日本を愛しない奴等の所爲だ、諸君はそれに惡化されてはいかん、いゝか、かういふ不心得な奴等を感化して純日本に復活せしむるのは諸君の責任だぞ、いゝか、解つたか』

此の日ほど烈しい感動を生徒に與へた事はなかつた。

—「カトレツトはえらいな」—と人々は囁き合つた。

光一は此の外に最も尊敬したのは校長の久保井先生であつた、元來光一は心の底から浦和中學を愛した。特に數多の先生に對しては單に教師と生徒の關係以上に深い尊敬と親みをもつて居た。校長は修身を受持つて居るので、生徒は中江藤樹の稱を奉つた。校長の口癖は實踐躬行の四字であつた、彼の訓話には必ず中江藤樹が引つ張り出される、世界大哲人の全集を殘らず讀んでもそれを實地に行はなければなんの役にも立たない、例へば其の……から先生は何か譬喩を考へ出さうとする。先生は譬喩が極めて上手であつた、謹嚴そのものゝやうな人が、どうしてかう奇拔な譬喩が出來るかと不思議に思ふ事がある、例へば其の、牡丹餅を見て食はないと同じ事だ、牡丹餅は眼に見るべきものでなくして、口に食すべきものだ、書籍は讀むべきものでなくして行ひに現はすべきものだ、芋は浦和の名産である、だが諸君に同じ大きさの芋の重さが異なる所以を知つて居るか、量に於いても同じである。重さに於いて一斤と二斤の差があるのは、肥料と培養法に依つてである、よき肥料と精密な培養は芋の量を殖やし又重さを殖やす、よき修養とよき勉強は同じ人間を優等にする事が出來る、諸君は即ち芋である。

此の訓話に就いては『人を馬鹿にしてる俺達を芋だと言つたぜおい』と不平をこぼしたものもあつた。

普通の教師は學校以外の場所では中折帽を被つたり鳥打帽に着流しで散歩する事もあるが、校長だけは年百年中學校の制帽で押し通して居る、白髪の食み出した學帽には浦和中學のマークがいつも燦然と輝やいて居る。校長のマークも僕等のマークも同じものだと思ふと光一は堪らなく嬉しかつた。

とこゝに一大事件が起つた。或日學校の横手に一人の鯛燒屋が屋臺を据ゑた。それはよぼ〳〵のお爺さんで、銀の針のやうな短かい髭が腮に生え、眼にはいつも涙をためてそれを汚ない手拭で拭き拭きするのであつた。先づ竈の下に粉炭をくべ、上に鐵の板を載せる。板には鯛の樣な形が彫つてあるので、爺さんはそれにメリケン粉をどろりと流す、それから眼脂を一寸拭いて次に餡を入れ其の上にまたメリケン粉を流す。

最初は爺さんが汚ないので誰も近寄らなかつたが、一人それを買つたものがあつたので、我も我もと雷同した、二年生はてんでに鯛燒を頬張つて、道路をうろ〳〵した、中學校の隣は師範學校である、由來いづれの縣でも中學と師範とは仲が惡い、前者は後者を罵つて官費の食客だと言ひ、後

者は前者を罵つて親の臑噛りだといふ。

師範の生徒は中學生が鯛燒を食つてるのを見て手をうつて笑つた。笑つたのが惡いと言つて阪井生蕃が石の雨を降らした。逃げ去つた師範生は同級生を引率して遙かに嘲笑した。

『鯛燒買つて、飴買つて、のらくらするのは浦中ちう、ちうちうちう、おやちう／＼』

妙な節でもつて唄ひ出した。すると中學も應戰して唄つた。

『官費ぢや食へめえ氣の毒だ、餡こやるからお辭儀しろ、たまには、鯛でも食べて見ろ』

この騷ぎを聞いた例の喇叭卒は早速校長に報告した。校長は默つてそれを聞いて居たが軈て嚴かに言つた。

『鯛燒屋に退却を命じろ』

如何なる事かとびく／＼して居た生徒共は校長の措置にほつと安心した、鯛燒屋は直ぐに退却した。だが哀れなる鯛燒屋！　一時間の中に數十の鯛が飛ぶが如く賣れるやうな結構な場所は他にあるべくもない。彼は翌日又もや屋臺を曳いて來た。それと見た校長は生徒を校庭に集めた。

『鯛燒を食ふものは嚴罰に處すべし』

生徒は戰慄した、と其の日の晝飯時である。生徒はそれ／＼に辨當を食ひ終つた頃、生蕃は屋臺

をがら〳〵と校庭に曳き込んで來た。

『さあみんな來い、鯛燒の大安賣だぞ』

彼はメリケン粉を鐵の型に流し込んで大きな聲で怒鳴つた。

人々は一度に集まつた。

『俺にくれ』

『俺にも』



燒ける間も待たずに一同はメリケン粉を平らげてしまつた。

これが校中の大問題になつた。

爺が横を向いてる隙を窺つて足を引いて逆さまに轉ばし、あつと悲鳴をあげてる間に屋臺をがらがらと曳いて來た阪井の早業に

はだれしも感心した。

わい／＼泣きながら爺は學校へ訴へた。鯛燒を食つたものは笑つて喝采した、食はないものは阪井の亂暴を非難した。だがそれはどういふ風に始末を付けたかは何人も知らなかつた。

『阪井は罰を食ふぞ』

皆がかう噂し合つた、だが一向なんの沙汰もなかつた。それはかうであつた。阪井は校長室によばれた。

『屋臺を曳きずり込んだのは君か』

『はい、さうです』

『なぜそんな事をしたか』

『鯛燒屋が來たゝめに皆が校則を犯すやうになりますから、皆の誘惑を防ぐために僕がやりました』

『本當か』

『本當です』

『よしツ、解つた』

阪井が室を出てから校長は歎息して言つた。

「阪井は悪い處もあるが、なか〳〵よい處もあるよ」

併し問題はそれだけでなかつた、丁度其の時は第一期の試験であつた、試験！ それは生徒に取つて地獄の苦しみである、もし平素善根を積んだものが死んで極樂に行けるものなら、平素勉強をして居るものは試験こそ極樂の關門である、だが其の日其の日を遊んで暮らすものに取つては、丁度怠け者が節季に狼狽すると同じもので、今更ながら地獄の恐ろしさをしみ〴〵と知るのである。

浦和中學は古來の關東氣質の粹として豪邁不屈な校風を以て名あるが、此の年の二年にはどういふ譯か奇妙な悪風が萌しかけた。それは東京の中學を落第して仕方なしに浦和へ來た怠惰生からの感染であつた。孔子は一人貪婪なれば一國亂をなすと言つた、一人の不良があると、全級が腐り初める。

カンニングといふ事がはやり出した、それは平素勉強をせない者が人の答案を盗み見たり、或は謄寫したりして教師の目を晦ます事である、それには全級の聯絡が約束せられ、甲から乙へ、乙から丙へと答案を廻送するのであつた、もつと巧妙な作戰は、何某の分は何某が受持つと、分擔を定める。

此の場合にいつも犠牲者となるのは勉強家である、怠惰の一團が勉強家を脅迫して答案の廻送を負擔せしめる。もし應じなければ鐵拳が頭に雨下りする。大抵學課に勉強な者は腕力が弱く怠け者は強い。

カンニングの連中にいつも脅迫されながら敢然として應じなかつたのは光一であつた。最も巧みなのは手塚であつた。

此日は幾何學の試驗であつた。朝の中に手塚が光一の傍へ來て囁やいた。

『君、今日だけ一つ生蕃を助けてやつてくれ給へね』

『いやだ』と光一は言つた。

『それぢや生蕃が可哀さうだよ』

『仕方がないさ』

『一つでも二つでもいゝからね』

『僕は自分の力で以て人を助ける事は決していとひはせんさ。だが、先生の眼を盜んでこそ〳〵とやる氣持がいやなんだ、惡い事でも公明正大にやるなら僕は贊成する、こそ〳〵は僕に出來ない、絕對に出來ないよ』

『僞善者だね君は』と手塚は言つた。

『何とでも言ひ給へ、僕は卑劣な事はしたくないからふだんに苦しんで勉強してんるだ、君等は怠けて樂をして試驗をパスしようといふんだ、其の方が利口かも知らんが僕には出來ないよ』

『君は後悔するよ、生蕃は何をするか知れないからね』

光一は答へなかつた。光一の席の後は生蕃である、光一が教室に入つた時、生蕃は青い顏をして默つて居た。

幾何學の題は至極平易なのであつた、光一はすら〳〵と解說を書いた、彼は立つて先生の卓上に答案を載せ机と机の間を通つて扉口へ歩いた時、血眼になつてカンニングの應援を待つて居る幾つかの顏を見た。阪井は頭を眞直に立てたまゝ動きもしなかつた。手塚は狡猾な眼を頻りに働かせて先生の顏を、ちら〳〵と見やつては隣席の人の手元を覗いて居た。

『氣の毒だなあ』

光一の胸に憐愍の情が一ぱいになつた。彼は自分の解說が誤まつて居ないかを確めるために控席へと急いだ。

一人々々教室から出て來た、彼等の中には頭を搔き〳〵やつて來るものもあり、又大功名をした

かの如くにこ〳〵して來るものもあり、慌しく走つて來てノートを開いて見るものもあつた、人々は光一を圍んで解說を訊いた、さうして自分の誤まれるを覺つてしよげ返るものもあり又、躍り上つて喜ぶものもあつた、此の騷の中に阪井が青い顏をしてのそりと現はれた。

『どうした、君は幾つ書いた』と人々は阪井に言つた。

『書かない』と阪井は沈痛に言つた。

『一つもか』

『一つも』

『なんにもか』

『只から書いたよ、援軍來らず零敗すと』人々は驚いて阪井の顏を見詰めた、阪井の口元に冷やかな苦笑が浮んだ。

『誰かなんとかすればいゝんだ』と手塚が言つた。

『僕は自分のだけがやつとなんだよ』と誰かゞ言つた。

『一番先に出來たのは誰だ』と手塚が言つた。

『柳だよ』『さうだ柳だ』

『柳は卑劣だ、利己主義だ』
聲が終るか終らない中に阪井は辨當箱を振上げた。光一はあつと聲をあげて眼の上に手を當てた、眉と指との間から血がたら〱と流れた。血を見た阪井は益〻狂暴になつて椅子を兩手に掴んだ。
『止せよ、止せ、止せ』人々は總立ちになつて阪井をとめた。
『あんな奴、殺してしまふんだ、とめるな、そこ退け』
阪井は上衣を脫ぎ捨てゝ荒れ廻つた、此の騷ぎの最中に最敬禮の喇叭卒がやつて來た、彼は滿身の力でもつて阪井を後から羽掻ぜめにした。『此の野郎、今日こそは承知が出來ねえぞ、さあ暴れるなら暴れて見ろ、牙山の腕前を知らしてやらあ』

## 四

阪井が柳を打擲して負傷させたといふ事は直ぐ全校に響き渡つた。上級の同情は一に柳に集まつた。
『阪井を撲れ〱』
聲は隅から隅へと流れた。

『この機會に阪井を退校さすべし』

この說は一番多かつた。或者は校長に談判しようと言ひ、或者は阪井の家へ襲撃しようと言ひ、或者は阪井を捕へて鐵棒に逆に吊さうと言つた。憤激！　興奮！　平素阪井の傲慢や亂暴を苦々しく思つて居た彼等はこの際徹底的に懲罰しようと思つた。二時の放課になつても生徒は一人も去らなかつた。ものものしい氣分が全校に漲つた。

何事か初まるだらうといふ期待の下に人々は校庭に集つた。

『諸君！』

大きな聲でもつて怒鳴つたのは曾て阪井と喧嘩をした木俣ライオンであつた。

『我校のために不良少年を驅逐しなければならん、彼は溫厚なる柳を傷つけた、さうして』

『わかつてる〳〵』と叫ぶものがある。

『お前も不良ぢやないか』と叫ぶものがある。

木俣は何か言續けようとしたが、頭を搔いて引込んだ、人々はどつと笑つた。これを口切として二三人の三年や四年の生徒が現はれた。

『校長に談判しよう』

『やれ〳〵』
『徹底的にやれ』
少年の血潮は時々、刻々に熱した。
『待てツ、諸君、待ち給へ』
五年生の小原といふ靑年は木馬の上に立つて叫んだ。小原は平素沈默寡言、學力はさほどでないが、野球部の捕手として全校に信賴されて居る。肩幅が廣く顏は四角で泥の如く黑いが、大きな眼はセンターからでもマスクを透して見えるので有名である、誰かゞ彼を評して馬の樣な眼だと言つた時、彼はさうぢやない、俺の眼は古今東西の書を讀み盡したからこんなに大きくなつたのだと言つた。
身體が大きくて腕力もあるが人と爭うた事はないので何人も彼と親んだ、木馬の上に立つた彼を見た時、人々は鳴を靜めた。小原の黑い顏は朱の如く赤かつた、彼は兩手を高く擧げて再び叫んだ。
『諸君は校長を信ずるか』
『信ずる』と一同が叫んだ。
『生徒の賞罰は校長の權利である、我々は校長に一任して可なりだ、靜肅に〳〵我々は決して騷い

では いかん』

『賛成々々』の聲が四方から起つた。狂瀾の如き公憤の波は收まつて一同はぞろ〳〵家へ歸つた。

其時職員室では秘密な取調が行はれた。職員達はどれも〳〵苦い顔をして居た。當時其場に居合せた重なる生徒が五六人一人づつ職員室へ呼ばれる事になつた。一番最初に呼ばれたのは手塚であつた。手塚はいつも阪井の保護を受けて居る、いつか三年と犬の喧嘩の時に阪井のお蔭で勝利を占めた、彼は何とかして阪井を助けてやりたい、さうして一層阪井に親しくして貰はうと思つた。

『柳の方から喧嘩をしかけたと言へばそれでいい』

彼はかう心に決めた、が職員室へ入ると彼は第一に嚴肅な室内の空氣に驚いた。中央に校長の疎らに白い頭と謹直な顔が見えた、其左に背の高い鶴の如く痩せた漢文の先生、それと隣合つて例の英語の朝井先生、磊落な數學の先生、右側には身體の割に大きな聲を出す歴史の先生、人の好い圖畫の先生、一番終りに扉口に近く體操の先生の少尉が控へて居る。

『後をしめて』と少尉が怒鳴つた。手塚は慌てゝ扉をしめた。

『阪井はどうして柳を撲つたのか』と少尉が言つた。

『僕にはわかりません』

『わからんといふ事があるかッ』
少尉は嚙み付く樣に怒鳴つた。
『知つてるだけを言ひ給へ』と朝井先生が穩かに言つた。
『幾何の答案を出して體操場へ行きますと柳が居ました、そこへ阪井が來ました、それから……』
手塚はさつと顏を赤めて默つた。
『それからどうした』と少尉が促した。
『喧嘩をしました』
『ごまかしちやいかん』と少尉は怒鳴つた。『どういふ動機で喧嘩をしたか、男らしく言つてしまはんと君のためにならんぞ』
『カンニングの其の……』
『どうした』
『柳が阪井に敎へてやらないので』
『それで阪井が撲つたのか』
『はい』

『一番先に答案が出來たのは柳だ、それに柳が阪井を救はすに教室を出たのは卑怯だ、利己主義だと言つたのは誰か』

『僕ぢやありません』と手塚はしどろになつて言つた。

『君でなければ誰か』

『知りません』

『知らんといふか』

『多分桑田でせう』

『桑田か』

『はい』

『君もカンニングをやるか』

『やりません』

『君は一番うまいといふ話だぞ』

『それは間違です』

『よしツ歸つてもよい』

手塚は鼠の逃ぐるが如く室を出て吻と息を吐いた。雜嚢を肩にかけて歩きながら考へて見る



と阪井を辯護しようと思つた初の志と全然反對に却つて阪井の不利益を述べ立てた事になつた。

『これが阪井に知れたら、どんな目に逢ふかも知れない』

怜悧なる手塚は直ぐ一策を案じて阪井を訪ねた、阪井は竹刀を提げて友達の許へ行く處であつた。

『やあ君、大變だぞ』と手塚は忠義顔に言つた。

『何が大變だ』と阪井は落着いて言つた。

『先生も校長も非常に怒つて君を退校させると言つてる』

『退校させるならさせるがいいさ、片端から叩き斬つてやるから』

『短氣を起すなよ、僕がうまくごまかして來たから多分大丈夫だ』

『何と言つた』

『柳の方から喧嘩を賣つたのです。柳は生蕃に向つてお前はふだん威張つてもなんにも出來やしないぢやないかと言つても生蕃は默つて居ると……』

『おい生蕃とは誰の事だ』

『やあ失敬』

『それから？』

『柳が生……生……ぢやない阪井に唾を吐きかけたから阪井が怒つて立上ると柳は阪井の顔を打つたので阪井は辨當を抛り付けたのです』

『うまい事を言ふな、君はなか〳〵口がうまいよ』

『さう言はなければ辯護のしやうがないぢやないか』

『だが俺は厭だ、俺は君と絶交だ』と阪井は急に改まつて言つた。

『なぜだ』

『馬鹿野郎！　俺は人に唾を吐きかけられたら其奴を殺してしまはなきや承知しないんだ、唾を吐きかけられたとあつては阪井は世間へ顔出しが出來ない、嘘もいい加減に言へよ馬鹿ッ』

阪井はずん〳〵急ぎ足で去つた、手塚は恨めしさうに其の方を見やつた。

『どつちが馬鹿か、俺が正直に白狀したのも知らないで……今に見ろ退校されるから』

彼はかうひとりで言つて角を曲つた。

『だが先生達の顔色で見ると、柳の方へ從く方が利益だ、さうだ、柳の見舞に行つてやらう』

學校では職員會議が酣であつた。阪井の亂暴に就いては何人も平素憤慨して居る事である。人々は口を揃へて阪井を退校に處すべき旨を主張した。

『試驗の答案に、援軍來らず零敗すと書くなんて、こんな亂暴な話はありません』と幾何學の先生が言つた。

『併し』と漢學の先生が言つた、『阪井は亂暴だが極めて純な點があります、嘘を吐かない、手塚の樣に小細工をしない、煽てられて喧嘩をするが、ものゝ理窟がわからない方でもない、無論今度の事は等閑に附すべからざる事ですが、退校は少しく酷に過ぎはしますまいか』

『いや、彼奴は破廉恥罪を犯して平氣で居ます、人の畠の芋を掘る、駄菓子屋の菓子を攫つ拂ふ、つい此頃豆腐屋の折詰を強奪して其の爲に豆腐屋の親父が復讐をして牢獄に投ぜられた始末、私が幾度も訓戒したがききません、彼のために全校の氣風が惡化して來ました、雜草を刈取らなければ他の優秀な草が生長を妨げられます、これはなんとかして斷乎たる處分に出なければなりますまい、いかゞですか校長』

朝井先生がかう言つた時、一同の眼が校長に注がれた。校長は先刻から默然として一言も言はずに眼を閉ぢて居たが、此時漸く眼を瞬いた。涙が睫毛を傳うて卓子にぽたり〳〵零れた。

『わかりました、諸君の言ふ處がよくわかりました、實は私は此の事あるを憂ひて、前後五回ほど阪井の父を訪ねて忠告したのです、それに拘らず彼の父は彼を嚴重に戒めないのです、これだけ

に手を盡しても改悛せず、其の惡風を全校に及ぼすのを見ると、今は斷乎たる處置を取らなきやならない場合だと思ひます。併しながら諸君、併しながら……』

校長の語氣は次第に熱して來た。

『基督の言葉に九十九の羊を差し置いても一頭の迷へる羊を救へといふのがあります、あれだけ惡い家庭に育つてあれだけ惡い事をする阪井は憎いに違ひないが、それだけに尙可哀さうぢやありませんか、あんな惡い事を働いて、それが惡い事だと知らずに居る阪井巖を誰が救うてくれるでせうか、善良な羊は手を掛けずとも善良に育つが、惡い羊を善良にするのは牧羊者の義務ではありますまいか、今此處で退校されゝば彼は不良少年として再び正しき學校へ行く事が出來なくなり、益々自暴自棄になります、さうすると、一人の男を見す〳〵墮落させるやうなものです、救ひ得る道があるなら救うてやりたいですな』

『いかにもなア』

感嘆の聲が起つた、人々は校長が生徒を愛する念の深きに今更ながら驚いた。

『御尤もです』と朝井先生は言つた『校長の情深いお說に對しては申し上げやうもありません、併し教育者は一頭の羊の爲に九十九の羊を捨てる事は出來ません、一人のコレラ患者のために全校の

生徒を殺す事は出來ません。阪井に就いては師範校からも苦情が來て居ります、彼の父は彼よりも兇惡です、而も政黨の有力者であり助役である處からして其の子がどんな惡い事をしても罰する事が出來ないのだと、世間で學校を嘲笑して居ます、學校の威嚴が一たび崩れると生徒が決して我々の訓戒をきかなくなります。旁々此の場合斷乎たる處置を取られる事を希望致します」

「宜しい、決めませう、一週間の停學にしませう、それでも駄目だつたら退校にしませう、どんな罪があらうと、其の罪の一半は私の德の足らないためだと私は思ひます、私も深く反省しませう、諸君もより以上に注意して下さい、惡い親を持つた一少年を學校が見捨てたら、もうそれつきりですからなあ」

寬大過ぎるとは思つたが、朝井先生は校長の美しい心に打たれて反對する事が出來なくなつた、人々は沈默した。さうして靜かに會議を終つた。

「こんなに有難い校長及び職員一同の心持が阪井に解らんのかなア」と少尉は涙ぐんで言つた。

停學を命ずといふ掲示が翌日掲げられた時、生徒一同は萬歳を叫んだ。だがそれと同時に阪井は退校屆を出した。校長は幾度も阪井の家を訪うて退校屆の撤回を勸めたがきかなかつた。

校長は又々柳の見舞に行つた。光一の負傷は淺かつたが、何かの黴菌に觸れて顏が一面に腫れ上

つた。彼の母は毎日見舞の人々にかう言つて涙をこぼした。

『阪井の伜にこんなに酷い目に逢はされましたよ』

それを見て父の利三郎は母を叱り付けた。

『愚痴を言ふなよ、男の子は外へ出ると喧嘩をするのは仕方がない、先方の子を怪我させるよりも家の子が怪我する方がいゝ』

其頃町々は町會議員の選擧で鼎の沸くが如く混亂した、あらゆる商店の主人はほとんど店を空にして奔走した、演說會のビラが電信柱や辻々に貼り出され、家々は運動員の應接に忙しく、料理屋には同志會專屬のものと立憲黨專屬の者とが出來た。

阪井猛太は巖の父である。昔から同志會に屬し其の幹部として知られて居る、其の反對に柳利三郎は立憲黨であつた、さういふ事情から兩家は何となく不和である、のみならず此の忙しい選擧騷ぎの最中に阪井の息子が柳の息子の額を割つたといふので、それを政黨爭ひの意味に言ひ觸らすものもあつた。

次第々々恢復に向つた光一は、聞くともなしに選擧の話を聞いた。

『私は商人だからな、政黨は餘り深入せんやうにして居る』

かういつも言つて居た父が、急に選擧に熱して來た事を不思議に思つて、選擧は罪惡であるから

たつた一人の爭奪である、だが一人であるだけに競爭が激しい。政黨の事なんかどうでも構はたいと思つた光一も、父が熱し親戚が熱し出入の者共が熱するにつれて、自然なんとかして立憲黨が勝てばよいと思ふやうになつた。

選擧の期日が近づくに從つて町々の狂熱が益々加はつた。丁度其時誰が言ふとたく、豆腐屋の覺平が出獄するといふ噂が擴まつた。

「面白い、覺平が屹度復讐をするに違ひない」人々は言つた。

或日光一は覺平を見た、それは汚れた袷に古い袴を穿いて首に手拭を卷いて居た。一ヶ月の獄中生活で彼はすつかり痩せて野良犬のやうに穢くなり眼ばかりが奇妙に光つて居た、彼は非常に鄭重な態度で疊に頭を擦り付けて泣いて居た。

「御恩は決して忘れません、屹度々々お返し申します」

彼は屹度々々と言ふ度に涙をぼろ／＼零した。

「もうい〻／＼わかりました、誰にも言はないやうにしてな、いいかね、言はないやうにな」

と父はしきりに言つた。

『乾度、乾度！』

覺平はかう言つて家を出て行つた、光一は初めて例の差入ものは父である事を覺つた。其の翌日から町々を顛倒させるやうな滑稽なものが現はれた。懲役人の着る衣服と同じものを着た覺平は大きな旗を眞直に立てゝ町々を歩き廻るのである。旗には墨痕淋漓とかう書いてある。

『同志會の幹事は强盗の親分である』

彼は辻々に立ち、それから町役場の前に立ち、次に阪井の家の前に立つて怒鳴つた。

『折詰を盗んだ奴、豆腐を盗んだ奴、學校を追ひ出された奴、其奴の親父は阪井猛太だ』



巡査が退去を命ずれば逆はずにおとなしく退去するが、巡査が去ると直ぐ又現はれる、町の人々は頗る興味を感じた、立憲



黨の人々は盛んに喝采した、時には金や品物を贈るのであつたが、覺平は一切拒絶した。

これがどれだけの効果があつたかは知らぬが選擧は遂に立憲黨の勝利に歸した。覺平は町々を踊り歩いた。

『ざまあ見ろ阪井の泥棒！』

もう光一は學校へ通ふやうになつた、と此の時校内では悲しい噂が何處からともなく起つた。

『校長が轉任する』

此の噂は日一日と濃厚になつた、生徒の二三が他の先生達に訊いた。

『そんな事はありますまい』

かう答へるのだが、さういふ先生の顏にも悲しさうな色が隱しきれなかつた。生徒の主なる者が寄り／＼額をあつめて協議した。

『本當だらうか』

此の疑の解けぬ矢先に手塚はかういふ報告を齎した。

『校長が立憲黨のために運動したので諭旨免官となるんださうだ』

これは生徒に取つて餘りに不思議な事であつた。

『どういふわけだ』
『校長がね、柳の家へ屢々出入したのを見た者があるんだよ』
と手塚が言つた『それで阪井の親父が校長排斥をやつたんだ』
『それは大變な間違ひだ』と光一は叫んだ『先生が僕の家へ來たのは二度だ、それは學校で負傷させたのは校長の責任だといふので校長自身で僕の父にあやまりに來たのと、今一つは僕の見舞のためだ、先生は僕の枕元に坐つて僕の顏を見詰めたまま他の事はなんにも言はない、僕の父と二人で話した事もないのだ』
『そりや、さうだらうとも』と人々は言つた。
『若しそれでも校長が惡いといふなら、我々は覺悟を決めなきやならん』と捕手の小原が言つた。
『無論だ、學校を燒いてしまへ』とライオンが言つた。
『變な事を言ふな』と捕手はライオンを叱り付けて『今度こそはだぞ、諸君！ 關東男兒の意氣を示すのは此の時だ、いゝか諸君！ 天下廣しと雖も久保井先生の如き人格が高く識見があり、我々生徒を自分の子の如く愛してくれる校長が他にあると思ふか、この校長ありてこの職員ありだ、どの先生だつて悉く立派な人格者ばかりだ、久保井先生が居なくなつたら第一カトレツト先生が出

て行く、三角先生も出て行く、山の芋先生も、ナポレオン先生……』
『最敬禮も』と誰かゞ言つた。
『眞面目な話だよ』と捕手は憮然として咎めた、さうして續けた。
『いいか諸君、久保井先生がなければ學校が滅びるんだぞ、僕等は何のために漢文や修身や歴史で古今の偉人の事蹟を學んでるのだ、士は己れを知るものゝ爲に死すだ、いいか僕等は久保井先生のため浦和中學のため、死を以て當らなきやならん』
『それでなければ男ぢやないぞ』と叫んだものがある。
其日學校の廣庭に全校の生徒が集まつた、さうして一級から三人づつの委員を選定して事實を確かめる事にした、もしそれが事實であるとすれば、全校連署の上縣廳へ留任を哀願しようといふのである。光一は二年の委員に擧げられた。
光一は悲しかつた、彼の心は政黨に對する憤怒に燃えて居た。どういふ理由か知らぬが、校長が僕の家へ見舞に來ただけで政黨が校長を排斥するのは餘りに陋劣だ。
小原の言ふ如く久保井先生のやうな立派な校長は再び得られない。今の先生方のやうな立派な先生も再び得られない。それに拘はらず學校がめちや〳〵になる、それでは僕等をどうしようといふ

んだらう、政黨の都合がよければ學校がどうなつても構はないのだらうか。
そんな馬鹿な話はない、これは正義を以て戰へば必ず勝てる、父に仔細を話してなんとかして貰はう。
いろ〳〵な感慨が胸に溢れて歩くともなく歩いて來ると、彼は町の辻々に數名の巡査が立つてるのを見た、町は何やら騷々しく、いろ〳〵な人が往來し、店々の人は不安さうに外を覗いて居る。
『何が始まつたんだらう』
かう考へながら光一は家の近くへ來ると、向ふから伯父さんの總兵衛が急ぎ足でやつてきた、彼は縞の羽織を着て懷に一ぱい何か入れ込んで、極めて舊式な山高帽を被つて居た。伯父さんはいつも鳥打帽であるが、葬式や婚禮の時だけ山高帽を被るのであつた、布袋さんのやうに肥つて顎が垂れて腮が二重にも三重にもなつて居る、その胸の處には熊のやうな毛が生えて居る、光一は子供の時にいつも伯父さんに抱かれて胸の毛を引張つたものだ。
『伯父さん何處へ行つて來たの?』と光一は訊いた。
『あゝ光一か、俺は今町會傍聽に行つて來た、面白いぞ、うむ畜生！ 面白いぞ、畜生め、うむ畜生』

面白いのに畜生呼ばりは光一に合點が行かなかつた。

『何が面白いの？』

『何がつてお前、糞ッ』伯父さんはひどく興奮して居た。

『泥棒めが、畜生』

『泥棒が居たの？』

『泥棒ぢやねえか、町會議員と阪井とがぐるになつて道路の修繕費をごまかして選擧費に使用しやがつた、それをお前大庭さんがギユウ／＼質問したもんだから、困りやがつて休憩にしやがつた、さあ面白い、お父さん居るか』

『僕は今學校の歸りですから知らない』

『知らない？　馬鹿ツ、そんならさうと何故早く言はないのだ、そんな風ぢや出世しないぞ』

伯父さんはぶり／＼して足を急がせたが、何しろ肥つてるので頭と背中が搖れる割合に一向足が捗取らなかつた。

さういふ政黨の爭は光一に取つて何の興味もなかつた、彼は家へ入ると、もう伯父さんの大きな聲が聞えて居た。

「泥棒の奴め、畜生ッ、さあ面白いぞ」
父はげら／＼笑つて居た、母も笑つて居た、伯父さんが憤慨すればする程女中達や店の者共に滑稽に聞えた。伯父さんは疎忽しいのが有名で、光一の家へ來る度に帽子を忘れるとか、下駄をはき違へるとか、或は誰か默つて持つて行くとかするのである。
光一は父と語る暇がなかつた、父は伯父さんと共に外出して夜晩く歸つた、光一は床に入つてから校長の事ばかりを考へた。
「停學された復讐として阪井の父は校長を追出すのだ」
から思ふと果てしなく涙が零れた。
翌日學校へ行くと何事もなかつた、正午の食事が濟むと委員が校長に面會を乞ふ手筈になつて居る。
「堂々とやるんだぞ、吾々の血と涙を以てやるんだ、至誠以て鬼神を動かすに足るだ」と小原が委員を激勵した。
委員はそこ／＼に食事を濟まして校長室へ行かうとした時、突然最敬禮の喇叭が響いた。
「講堂へ集まれい」と少尉が叫び廻つた。

『何だらう』

人々は互ひに怪みながら講堂へ集まつた、講堂には既に各先生が講壇の左右に控へて居た、どれも〳〵悲痛な顔をして拳を握りしめて居た。最も目に立つたのは漢文の先生であつた、ひよろ〳〵と痩せて高い、其の眼に涙が一ぱい溜つて居た。

『あの一件だぞ』と委員達は早くも覺つた、さうして委員は期せずして一番前に腰を掛けた。さわさわと動く人波が靜まるのを待つて少尉は恐ろしい嚴格な顔をして講壇に立つた。

『諸君も或は知つて居るかも知らんが、今度久保井校長が東京へ榮轉さるゝ事になりました、就いては告別のため校長から諸君にお話があるのですから謹聽なさるがいゝ、決して輕率な事がないやうに注意をして置く』

此の聲が終るか終らない中に講堂は潮の如く湧き立つた。

『なぜ校長先生がこの學校を出るのですか』

『榮轉ですか、免官ですか』

『先生が僕等を棄てるんですか』

『先生を追ひ出す奴があるんですか』

小さな聲大きな聲、バスとバリトンの差はあれども聲々は熱狂に顫へて居た、實際それは若き純粹な血と涙が一度に潰裂した至情の洪水であつた。

「諸君！」

小原捕手は講壇の下に跳り出して一同の方へ兩手を擧げて立つた。

「校長先生が諸君に告別の辭を賜はるさうだが、諸君は先生と別れる意志があるか、意志があるなら告別の辭を聽くべしだ、意志のない者は……どうしても先生と別れたくないものはお話を聽く必要がないと思ふがどうだ」

「さうだ、無論だ」

講堂の壁が破れるばかりの喝采と拍手が起つた。

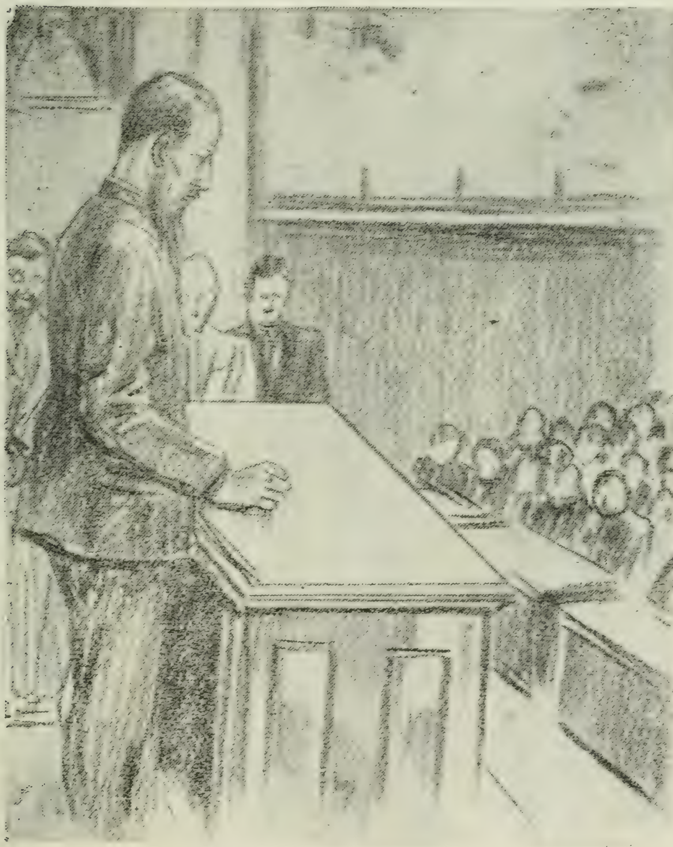
「小原、お願ひしてくれ、先生にお願ひしてくれ」

誰かが透き通る聲でかう言つた。校長はまつさをになつてこの體を見て居た。彼は自分が手鹽にかけて教育した生徒がかほどまで自分を信じてくれるかと思ふと心の中で泣かずには居られなかつた。

「先生！」

小原は校長の方へ向き直つて言つた、其の眞黒な顔に燃ゆる如き炎が閃めいた、廣い肩と太い首

が波の如く顫へて居る。
『先生！』
彼は再び言つたが涙が喉に塞つて何も言へなくなつた。
『校長先生！』
かう言ふや否や彼は急に聲を立ててすゝりあげ、其太い腕を眼に當ててしまつた。講堂は水を打つたやう



に靜まつた、時雨に打たるゝ冬草の如く其處此處から泣聲が起つた、とそれが堪へきれなくなつて一度に泣き出した、漢文の先生は兩手で顏を隱した、剌井先生は扉を開けて外へ出た、他の先生達は右に傾き左に傾いて涙を隱した。

校長は靜かに講壇に立つた。低い而も底力のある聲は唇から洩れた。

「諸君！ 不肖久保井克巳が當校に奉職してより此に六年、未だ日淺きにかゝはらず、前校長の遺された美風と當地方の健全なる空氣と、職員諸氏の篤實とに依つて幸に大過なく校長の任務を盡し得たる事を滿足に思つて居ます。今回當局の命に依り本校を去り諸君と別れる事になつた事は實に遺憾とする處でありますが事情實に止むを得ません。惟ふに離合集散は人生の常、敢て悲むに足らざる事であります、只、諸君にして私を思ふ心あるなら其の美しき友情を次に來るべき校長に捧げてくれ給へ、諸君の一言一行にして若し道を誤まるやうな事があれば、前校長の久保井は無能者であると笑はれるだらう、諸君の健全なる、剛毅果敢なる、正義に篤く友情に富める、此の氣風を失はざればそれは總て久保井克巳の名譽である、私は諸君が、いかに私を愛してくれるかを知つて居る、諸君も亦私の心を知つて居るだらう、雲山煙水相隔つれども一片の至情此に相許せば、別れる事は何でもない、私を思ふなら、靜かに〳〵私を此地から去らしめてくれ給へ、私も諸君を思へ

ばこそ此地を去るのだ……』
聲は靜な〳〵夕波が岸を打つかの如くであつたが、次第に興奮して飛沫がさつと岩頭に跳ねかゝるかと思ふと、それを抑へる如く元の靜かさに返るのであつた、一同は大鳥の翼に抱き込まれた雛鳥の如く鳴を靜めた。

『若し諸君にして私を思ふ餘りに輕率な行動を取ると、私が六年間此の浦和町に盡した志は全然葬られてしまふ事になる、諸君は學生の分を知らなければならん、學生は決して俗世界の事に指を染めてはならん、只、私は諸君に言ふ、ヂョン・ブライトは「正を踏んで恐るゝなかれ」と言つた、私はこの格言を諸君に敎へた、私が去るのもそれである、諸君も亦此の格言を忘れてはならぬ、五年生は來年だ、一年生も五年の後には卒業するだらう、其の時にはまた會へる、遙かに浦和の天を眺めて諸君の健全を祈らう、諸君も亦今まで通りに立派に勉强し給へ』

小原はぐつたりと頭を垂れて默つた、もう何人も言ふものがない、校長がいかにも悲しげに一同を見下して一禮した、生徒は悉く起立して御辭儀をした。さうして其儘再び泣き出した。
後列の方から扉口へ崩れ出した、いとしめやかな足取、葬式の如く悲しげに一同は講堂を出た。

『駄目かなア』

光一は人々と離れて一人泣きたいと思つた、彼は夢の如く町を歩いた、彼は自分の背後から急がしさうに歩いて来る足音を聞いた、足音は次第に近附いた、さうして光一を通り過した。

『青木君』彼は呼止めた。

『あゝ柳さん』

『何處へ行く?』

光一はチビ公が豆腐桶も舁がないのを不思議に思つた。

『僕の伯父さんを見ませんか』と千三はうろ／＼して言つた。

『いや、見ない』

『あゝさうですか、今朝から家を出たきりですからな、又阪井の家へ怒鳴り込みに行つたのではないかと思つてね』

千三は泣き出しさうな顔をして居た。

『心配だらうね、僕も一緒に探してあげよう』

## 五

チビ公と光一は裏門通りから清水屋横町へ出た。そこでチビ公は知合の八百屋に訊いた。
『家の伯父さんを見ませんか』
『あゝ見たよ』と八百屋が言つた。
『さつきね丸太棒の様なものを持つてね、此處を通つたから聲を掛けるとね、俺は大泥棒を打殺しに行くんだと言つてたつけ』
『何處へ行つたでせう』
『さあ、停車場の方へ行つた樣だ』
『醉つてましたか』
『ちとばかり酒臭かつた樣だつたが、なあチビ公早く行かないと、飛んだことになるかも知れないよ』
『ありがたう』
チビ公はもう胸が一ぱいになつた、やうやく監獄から出て來たものが又しても阪井に手荒な事をしては伯父さんの身體は此に亡ぶるより他はない、どんなにしても伯父さんを搜し出し家へ伴れて歸らねばならぬ。

二人は足を早めた。停車場へ行くと伯父さんの姿が見えない、千代子は車掌に訊いた。
『あゝ来たよ』
『何分ばかり前ですか』
『さあ三十分ばかり前かね』
『どつちの方へ行きましたか』
『さあ』と巡査は首を傾げて『常盤町通りを真直に行つた様に思ふが……』
二人は大通りへ路を取つた。
『どうしてかういやな事ばかりあるんだらうね』と進一は言つた。
『僕が思ふに、此の世の中に一人悪い奴があると世の中全體が悪くなるんです』と千代子は言つた。
『だが君、社會が正しいものであるなら、一人や二人位悪い奴があつてもそれを撃退する力があるべき筈だ』
『それはさうだが、併し悪い奴の方が正しい人よりも智恵がありますからね、つまり君の學校の校長さんよりも阪井の方が智恵があります、どうしても悪い奴には敵ひません』

『そんな事はない』と光一は顔を眞赤にして叫んだ。『若し此の世に正義がなかつたら僕等は一日たつて生きて居られないのだ、僕等は惡い奴と戰はなきやならない、此の世の惡漢を悉く撃退して正義の國にしようと思へばこそ僕等は學問をするんぢやないか』

『それはさうだが、併し強い奴には敵ひません、正義々々と言つた處で、僕の伯父は監獄へやられる、阪井は助役で威張つてる、それはどうともならないぢやありませんか』

二人は警察署の前へ來た、今しも七八人の人々が一人の男を引き立てゝ門内へ入る處であつた。チビ公は電氣に感じた樣に跳り上つて人々の後を追うた。と又直ぐ戻つて來た。

『伯父さんかと思つたらさうでなかつた』

彼は安心したもゝの如く眼を輝やかした、さうしてから言つた。

『喧嘩して人を斬つたんですつて、それは善い事ではないが、僕はあゝいふ人を見ると、何だか、其の人の方が正しい樣な氣がしてなりません、時に依ると僕もね、僕が若し身體がこんなにチビでなかつたら、もう少し腕に力があつたら、惡い奴を片端から斬つてやりたいと思ふ事があります、身體が小さくて貧乏で、弱い母親と二人で伯父さんの厄介になつて居るんでは、言ひたい事があつても言へない、いつそ僕の頭がガムシヤラで亂暴で阪井の樣に善と惡との差別がないなら僕はもう

少し幸福かも知らないけれども、學校で先生に敎はつた事を忘れないし、道に外れた事をしたくないために、人に踏まれても蹴られても我慢する氣になります、そんな事では損です、世の中に生きて居られません、さう思ひながら矢張り惡い事はしたくないしね」

チビ公は涙ぐんで歎息した、光一は何も言ふ事が出來なくなつた。彼は今まで正義は必らず邪惡に勝つものと信じて居た。それが今日最も尊敬する久保井校長が阪井のために逐ひ拂はれたのを見て、正義に對する疑惑が靑天に群がる白雲の如く湧き出したところであつた。彼は今チビ公の喟歎を聞き、覺平の薄倖を思ふと此の世は果してそんなに汚らはしきものであるかと考へずに居られなかつた。

二人は默つて歩き續けた。と米屋の横合から突然聲を掛けたものがある。

「靑木君!」

それは手塚であつた。此の頃手塚は裏切者として何人にも嫌はれた、で彼は光一にもたれるより策がなかつた。彼は何か探る樣に狡猾な眼を光一に向けて微笑した。

「僕は素敵に面白い小說を買つたから君に見せようと思つてね……今は持つて居ないけれども晩に屆けるよ。「春の惱み」といふんだ」

『僕は小說は嫌ひだ』と光一は言つた。

『あゝさうか』と手塚は別に耻もせず『それぢや「世界の怪奇」て奴を君に見せよう、胴體が百五十間もある烏賊だの、鼻に輪を通した蕃人だの、着色寫眞が百枚もあるよ、あれを持つて行から』と彼は輕快にかう言つてから次に蔑すむ樣な口調でチビ公に言つた。

『どうだチビ公、其の後は……商賣をやつてるの？』

『毎日やつて居ます』とチビ公は言つた。

『たまには僕の家へも寄りたまへね、豆腐を買つてあげるからね、チビ公』

『チビ公といふのは失敬ぢやないか、僕等の學友だよ』と光一はむつとして言つた。

『さうだ、やあ失敬、堪忍々々』

手塚は流暢にあやまつた。が直ぐ思ひ出した樣に言つた。

『君の伯父さんが今彼處で暴れて居たよ』

『何處で？』とチビ公は顏色を變へた。

『稅務署で』

『稅務署？』

『酔拂つてるから役場と税務署とを間違へて飛込んだのだよ、阪井を出せ、泥棒を出せつて怒鳴つて居たよ』

『ありがたう』

チビ公は奔馬の如く



走り出した。光一も走り出した。

少年讀者諸君に一言する。日本の政治は立憲政治である、立憲政治といふのは憲法に由つて政治の運用は人民の手を以て行ふのである。人民は其のために自分の信ずる人を代議士に選擧する、縣に於ては縣會議員、市に於ては市會議員、町村に於ては町村會議員。

これ等の代議員が國政、縣政、市政、町政を決議するので、其の主義を共にする者は集つて一團となる、それを政黨と言ふ。

政黨は國家の利益を增進するための機關である、然るに甲の政黨と乙の政黨とは其の主義を異にするために仲が惡い、仲が惡くとも國家のためなら爭鬪も止むを得ざる處であるが、中には國家の利益よりも政黨の利益ばかりを主とする者がある。人民に稅金を課して自分達の政黨の運動費とする者もある。人間に惡人と善人とある如く、政黨にも惡黨と善黨とある、さうして善黨は極めて稀であつて、惡黨が非常に多い。これが日本の今日の政界である。

阪井猛太は自黨の多數を恃みにして助役の地位にあるのを幸に、不正工事を起して自黨の利益にしようとした、これに對する立憲黨は町會に於て斷々乎として其の不正を責め立てた。若し事敗るれば町長の不名譽、助役の瀆職、さうして立憲黨の潰裂になる。猛太は今浮沈の境に立つて

居る。
巌は未だ學生の身である。政治の事は解らないが、彼は絶對に父を信じて居た。彼は町へ出ると彼方此方で不正工事の噂を聞くのであつた、だが彼は肚の中でせゝら笑つて居た。
『馬鹿な奴等だ、彼奴等に僕の親父の値打が解るもんか』
彼は何人よりも父が好きであつた、父は雄辯家で博識で法律が明るくて勢力があつて、町の人々に怖れられて居る、父はいつも口を極めて當代の知名の政治家、大臣、政黨首領などを罵倒する、文部大臣の如きは父は自分の親友の如くに言ひ做す。それを見て巌は益々父は偉いと思つた。
其の日彼は理髪床で二人の客が話して居るのを聞いた。
『流石の猛太も今日こそは往生したらしいぜ、町長にひどく叱られたさうだよ』と一人が言つた。
『町長だつてどうやら臭いものだ』と一人が言ふ。
『いや町長 はなか／＼善い人だ』
二人の話を聞きながら巌は又しても肚の中で冷笑した。
『町長なんて、それは俺の親父に振廻されてる木偶坊だつて事を知らないんだ』
彼はかう思うて家へ歸つた、父は既に歸つて居た、默つて苦りきつた顏をして坐つて居たので巌

は次の室へ引込んだ、機嫌の悪い時に近付くと拳骨が飛んで來る虞があるからである、父は短氣だから拳骨が非常に早い。

『おい巖』と猛太は呼んだ。

『はい』

『貴樣、何處へ行つて來た』

『床屋へ行きました』

『何しに行つた』

『頭を刈りに』

『馬鹿ッ、頭を刈つたつて貴樣の頭がよくなるかッ』

『お母さんが行けと言つたから』

『お母さんも馬鹿だ、頭は幾何だ』

『二十錢です』

『二十錢で頭を刈りやがつて、學校を退校されやがつて』

巖は默つた、二十錢の頭と自分の退校といかなる關係があるかと考へて見たが彼には解らなかつ

たっかういふ時に家に居ると碌な事がないと思つたので彼はそつと外へ出た。町を一巡して再び歸ると父の室に來客があつた。それは信用の庶務課長の土井といふ老人であつた。此の老人は非常に好人物といふ評判も高いが、非常に慾張りだといふ評判も高い、つまり好人物であつて慾張りなのである。

伜は何處へ行つたか姿が見えない、父と土井老人は酒を飲みながら話は餘程佳境に入つたらしい。

『心配するなよ、何でもないさ、そんな小さな量見では天下が取れないぜ』

父の態は快活豪放であつた。

『でも……其のね、町會があんなに騒ぎ出すと、どうしてもね……』

『もう可いよ解つたよ、俺に考へがあるから、何を馬鹿な、はツはツ〳〵』

笑ひが出る樣では父は餘程酔つて居ると彼は思つた。

『併し、いよ〳〵明日頃……多分明日頃、檢事が……或は檢事が調べに來るかも知れんので……』

『何を言ふか、檢事が來た處で何だ、證據があるかツ』

『帳簿は其の……』

『燒いてしまへ』

老人は『あつ』と聲を擧げたきり默つてしまつた。

『はツ〳〵』と猛太は笑つた。が巖の足音を聞いて直ぐ怒鳴つた。

『誰だッ』

『僕です』

『巖か、何遍床屋へ行くんだ、いくら頭を刈つても利口にならんぞ』

巖は默つて自分の室に入り机に向つて本を讀み初めた、彼は本を讀むと眠くなるのが癖である。幾時間机にもたれて眠つたか解らないが、がら〳〵と戸を開ける音に眼を覺ますと、客は既に去り母も床に就いたらしい。

『何だらう』

かう思つた時彼は父が外へ出る姿を見た。

『何處へ行くんだらう』

俄然として彼の頭に浮んだのは、チビ公の伯父覺平が父猛太を窺つて復讐せんとして居る事である、今日も役場を間違つて税務署へ闖入した處をチビ公がつれて行つたさうだ、蛇の如く執念深い奴だから、いつどんな處から飛出して暴行を加へるか知れない。

『父を保護したきやならん』

巖は立上つた、彼は細身の刀を仕込んだ黑塗の洋杖（父が昔愛用したもの）を小脇に抱へて父の後をつけた。二十日餘りの月が寢惚けた樣に町の片側を薄黃色に明るくして居た。父の足元は巖が豫想した程亂れては居なかつた、彼は町の暗い方の側を急ぎ足で歩いた。

『何處へ行くんだらう』

巖はかう思ひながら父と二十歩ばかりの間隔を取つて覺られぬ樣に軒下に沿うて行つた。父はそれとも知らずに眞直に本通りへ出て左へ曲つた。

『役場へ行くんだ』

此の深夜に役場へ行くのは何のためだらう、巖の頭に一朶の疑雲が漂うた。と彼は更に驚くべきものを見た、父は役場の入口から入らずに暫らく窓の下に佇んで居たが軈て輕々と窓枠に攀ぢ登つた、手を硝子窓に掛けたかと思ふと、硝子が微かに反射の光と共に動いた。父の姿はもう見えない。

『どうした事だらう』

巖は呆氣に取られたが直ぐかう思ひ返した。

『何か忘れものをしたのだらう』

たが此の時彼はぱつと一閃の火光が窓の硝子に映つた樣な氣がした、さうしてそれが直ぐ消えた。

『なぜ電燈をつけないんだらう』

再び火光がぱつと閃めいた。歪んだ樣な反射が硝子をきらきらさせた、それは蠟燭の光でもなければ瓦斯の光でもない、穗末の煙が黑みと白みと混合して牛乳色に天井に立ちのぼつた。

巖は我を忘れて窓に攀ぢ登り、奔馬の如く廊下へ降りた。窓から南風がさつと吹き込んだ、炎々たる火光と黑煙の間に父は非常な迅速さを以て帳簿箱に油を注いで居る、石油の臭ひは窒息するばかりに激しく鼻を衝く、さうして凄まじい勢を以て煙を一ぱいに漲らす、焰の舌は見る〳〵床板を嘗め、卓子を嘗め、壁を傳うて天井を這はんとしつゝある。

巖はいきなり、其處にある机掛を取つて床の上の火炎を叩き出した。

『誰だ』と父は忍び聲に怒鳴つた。

『僕ですお父さん』

『お前か……何をする』

『消しませう』

『危ない、早く逃げろ』

『消しませう』と巌は猶も火を叩きながら言つた。
『危ない、早く〳〵、逃げろ』
ぱち〳〵〳〵とけたゝましい音がして黒煙は幾つとなく並んだ卓子の下を潜つて噴水の如く向ふの穴から噴き出した。窓といふ窓の硝子は晝の如く反射した。
『もう駄目だ、早く〳〵、下を這へ、立つてるとむせるぞ、下を這つて……這つて逃げろ』
『消しませう』
と巌は三度言つた。
『何を云ふか、ぐづ〳〵してると死ぬぞ』
『死んでも構ひません、消しませう、お父さん』
『馬鹿ツ、來い』
父はむずと巌の手を掴んだ、巌は其手を握りしめながら言つた。
『お父さん、貴方は證據書類を燒くために、此の役場を燒くんですか』
『何を？』
父は手を放してよろよろとしざつた。

「消して下さい、お兄さん」殿は炎の中へ飛込んだ。彼は右に走り左に走り、あらゆる卓子を火に遠く離し、それから壁や棚や窓の下を駈けずり廻つて火の手を遮り〱叩きのめし、踏



みしだき、阿修羅王が炎の車にのつて火の粉を降らし憤の雲を湧かし行くが如く暴れ廻つた。だがそれは無駄であつた。油と木材の燃ゆる悪臭と、眞黒な煙とは曦の五體を包んだ。



『消して下さい』と巖は苦しさうに猶も叫び續けた。

『巖！ 何處だ、巖！』

父は我が身を忘れて煙の中に巖を探した。

『消して…… 消して…… お父さん』

ごぶ〳〵と湯の滾る樣な音が、そこ此處に聞えた。それは椅子の綿や、毛類や、蒲團などが燃ゆる音であつた。さうして其の間にガチン〳〵といふ硝子の割れる音が聞えた。

『巖！ 巖！』

父は聲を限りに叫んだ。答がない。

『巖！ 巖！』

矢つ張り答がない。

猛太は仰天した、彼は再び火中に飛び込んだ、もう火の手は床一面に擴がつた、右を見ても左を見ても火の波が躍つて居る。天井には火龍の舌が輝き出した。

『巖！』

猛太の胸は張り裂けるばかりである、彼はもう凶惡な三百代言でもなければ、不正な政黨屋でも

ない、彼のあらゆる血は我子を救はうとする一心に燃え立つた。

彼は煙に卷かれて窒息して居る巖の體に足を觸れた、彼は狂氣の如くそれを肩に掛けた、さうして乾と窓の方を見やつた。が彼は爛々たる炎の鏡に射られて眼が眩んだ、五色の虹霓が紛と腦を刺したかと思ふと其の光の中に劃然と一人の男の顏が現れた。

『やあ覺平！』

彼はかう叫んで倒れさうになつた、途端に覺平の腕は早くも彼の胴體を抱へた。

『おい、しつかりしろ』と覺平は言つた。

『貴樣は俺を殺しに來たのか』

『助けに來たんだ』

覺平は猛太と巖を左右に抱へた、さうして全力を込めて窓の外へ躍り出た。

當直の人々や近所の人々に依つて火は消されたが、室內の什器は殆ど用をなさなかつた。重要な書類は悉く燒失した。

人々は窓の外に倒れて居る猛太父子を病院に送つた。覺平は人々と共に消火に努めた、騷ぎの中に夜がほの〴〵と明けた。

町は鼎の沸くが如く流言蜚語が起つた。不正工事の問題が起りつゝあり、大疑獄が此に開かれんとする矢先に役場に放火をしたものがあるといふことは何人と雖も疑はずに居られない。甲はから言ふ。

『これは同志會即ち役場派の者が證據を堙滅させるために放火したのである』

乙はから言ふ。

『役場反對派卽ち立憲黨の奴等が役場を疑はせるために故意に放火したのだ』

色眼鏡を以て見るといづれも道理の樣に思へる。だが多數の人はから言つた。

『猛太父子が一命を投げ出して消火に努めた處を以て見ると、役場派が放火したのではなからう』

から言つて人々は猛太が浦和町のために目ざましい働きをした事を口を極めて、稱讚した、それと同時に巖の功勞に對する稱讚も八方から起つた。

半死半生のまゝ病院へ運ばれたまでは意識して居たが其の後の事は巖はなんにも知らなかつた。

彼が病院の一室に眼が覺めた時、全身も顏も繃帶されて居るのに氣が付いた。

『眼が覺めて？』

母の聲が枕元に聞えた、同時に優しい母の眼がはつきりと見えた、母の顏は蒼ざめて居た。

『お父さんは？』と義母が訊いた。
『其處に寢んでいらつしやいます』
義母は向き直らうとしたが痛くて堪らないのでやつと首だけを向けた、丁度並んだ隣の寢臺に父は繃帶した片手を胸に當てゝ眠つて居る、髭も鬢も燒け縮れてところ／＼黑ずんで居る顏は繃帶の間から漏れて見える。
『お父さんはどんなですか』
『大した事もないのです、手だけが少しひどい樣ですよ』
『それはよかつた』
義母はかう言つて再びつく／＼と父の寢顏を見やつた。
『これが僕のお父さんなのかなあ』
ふと呟く樣にかう言つた。
『何を言つてるの？』と母は微笑した。
『いや、何でもありません』
義母は默つた、彼の頭には不思議な疑惑が生じた。これが果して僕の父だらうか。我が身の罪を隱

蔽するために役場を焼かうとした凶悪な昨夜の行爲！　それが僕の父だらうか。

彼は幼少から我が父を尊敬し崇拜して居た、學識があり膽力があり、東京の知名の士と親しく交はつて浦和の町に素晴しく勢力のある父、正義を叫び人道を叫び、政治の覺醒を叫んで居る父！實際彼は我が父を唯一の矜持として居た、が今やそれ等の尊敬や信仰や矜持は全然として凡て胸の中から消え失せた。

『お父さんは惡い人だ』

彼は大聲を出して泣きたくなつた、彼には何ものもなくなつた。

今まで父に敎へられた事、叱られた事、其等はみんな嘘の樣に思へた。

『惡い人だ！』

燒けて縮れた髭がいゝゝむにやゝゝと動いて、口がぽつかり開いて亂杭の齒があらはれたかと思ふと巖太は眼をぱつちりと開いた。父と子の視線が合つた。

『おう、口がさめたのか、どうだ、痛むか』

父は起き直つて言つた。

『何でもありません』と巖は冷やかに言つた、父は寢臺を降りようとして首に吊つた繃帶を氣にし

ながら巖の寢臺へ寄り添うた、さうして心配さうな眼を巖の顔に近付けた。
「元氣を出せよ、いゝか、何處も痛みはしないか、苦しかつたら苦しいと言へよ」
巖は默つて顔をそむけた、苦しさは首を鋸で挽かれるより苦しい、併しそれは火傷の痛みではない、父を蔑む心の深傷である。此の世の中に神であり佛であり正義の英雄であると信じて居たものが一夜の中に悪魔波旬となつた絶望の苦しみである。
猛太父子の見舞にとて來客が殺到した、町の人々はいろ／＼な物品を贈つた、猛太は左の腕と左の脚を燒いたので外出は出來なかつた、彼は寢臺の上に坐つて來客に接した。彼はかう人々に言つた。
「悴が命がけでやつてくれたもんだからやつと消し止めましたよ」
それから彼は悴と二人で役場の前を通ると火の光が見えたので、窓を叩き毀して中へ入つたが其の時は重要書類が燒けてしまつた後であつたのが何より殘念だと言つた。人々は益々二人の勇氣を感激した。さうして町會は決議を以て二人に感謝狀を贈らうといふ相談があるなどと言つた。
「嘘をつく事は實にうまい」と巖は驚いて胸を轟かした。さうして町の人が何も知らずに、役場を燒かうとした犯人に感謝狀を贈るとは何事だらうと思うた。

二三日は過ぎた、町の噂が益々高くなつた、だが或日町長が顔色を變へてやつて來た。
『妙な噂が出て來たよ』と彼は言つた『放火犯人は役場員だといふのでな』
『怪しからん事だ』と猛太は叫んだ。
『警察の方では、どうも其の方に傾いて居るらしい。そこでだね、君に何か心當りがあるなら言つて貰ひたいんだが』
『何にもありやしない』と猛太は苦りきつて言つた。
『君が行つた時、犯人らしいもの〻姿を見なかつたかね』
『さあ』
猛太は下唇を噛んでじつと考へ込んだ。
『彼等が言ふには、阪井が工事の帳簿を燒かうとしたんだとね、かういふもんだから、まさか親子連れで火をつけに歩き廻る奴もなからうぢやないかと私は嘲笑してやつたんだ、それにしても疑はれるのは損だからね、何か曲者らしいもの〻姿でも見たのなら非常に有利なんだが』
『見た』と猛太は力なき聲で言つた。
『見た？』

『あゝ見た』
『どんな風態の者だ』
『それは覺平によく似た奴だつた』
巖は頭の頂天から氷の棒を打ち込まれた樣な氣がして思はず叫んだ。
『ちがひますお父さん』
『默つて居れ』と猛太は怒鳴つて巖をハッと睨んだ、眼は殺氣を帶びて居る。
『覺平か』と町長は身體をぐつと反らしたが直ぐ兩手をぴしやりとうつた。
『さうだ、それに違ひない。彼奴は君に怨があるから、君に放火犯人の疑をかけさせようと思つて放火したに違ひない、例の工事問題が起つてる最中だから、君が帳簿を燒くために火をつけたのだらうとは、一寸誰でも考へる事だからな、いや彼奴は實にうまく考へたものだ』
『さうだ、事に依ると立憲黨の奴等が覺平を煽動したのかも知れんぜ』
『いよいよ面白い』と町長は椅子を乘出して『これを機會に根柢から立憲黨を潰滅するんだね』
『さうだ實に好機會だ、禍が轉じて福となるぜ、おい、早く退院してくれ』
『ちがひます』と巖は再び叫んだ『覺平は僕等を救ひ出してくれたのです、僕もお父さんも煙に卷

かれて倒れた處をあの人が火の中を潜つて助けてくれました』

『馬鹿ッ、默つてろ、お前はなんにも知らない癖に』と猛太は怒鳴つた。

『何にしても彼奴が其の場に居たといふ事が不思議ぢやないか』と町長が言つた。

『さうだ〳〵』

町長は喜び勇んで室を出て行つた。後で猛太は其の儘身動きもせずに考へ込んだ。巖は繃帯だらけの顔を天井に向けたまゝ默つた、父と子は互に眼を見合はす事を恐れた。陰慘な沈默が長い間續いた。

巖の眼から果てしなく涙が流れた、彼はそれをこらへよう〳〵としたがこらへきれずにしやくりあげた。

『お父さん』と彼は到頭言つた。父は矢張默つて居る。

『お父さん、貴方は僕のお父さんでなくなりましたね』

『何を言ふか』と父は怒鳴つた。

『お父さんは僕に嘘を吐くなと敎へました。それだのに貴方は嘘を吐いて居ます、貴方は僕に義俠といふ事を敎へました、それだのに貴方は命を助けてくれた恩人を罪に陥れようとして居ます、

僕のお父さんはそんなお父さんぢやなかつた』

『生意氣な事を言ふな、お前なぞの知つた事ぢやない、俺はな俺一人の身體ぢやない、同志會を背負つて立つてる體だ、浦和町のために生きてる體だ、豆腐屋一人位を犠牲にしても天下國家の利益を圖らねばならんのだ』

『むづかしい事は僕に解りませんが、お父さん、自分の罪を他人に着せて、それで以て天下國家が治まるでせうか―

『馬鹿々々々々』と父は大喝した。さうして急いで室を出ようとした。

『待つて下さい』

巖は痛さを忘れて寢臺の上を這ひ上り片手を伸ばして父の袖を摑んだ。

『一寸待つて下さい、お父さん、僕の一生のお願ひです』

『放せ、放さんか』と父は叫んだ。

『放しません、お父さん、たつた一言言はして下さい、お父さん、僕は不孝者です、學校を退學されました、町の者に憎まれました、其れはねえお父さん、僕の考へが間違つて居たからです、お父さんは僕が幼ない時から僕に強くなれ〳〵、人より偉くなれと教へました、僕はどんな事をしても

人より偉くならうと思ひました、それで僕は偉くなるためには悪い手段でも構はないと信じて居ました、僕は小刀や短銃を振廻して友達を脅かしました、柔道や剣道で腕を鍛へて片端から人を撲りました、豆腐屋や八百屋のものを分捕しました、皆が僕を恐れました、僕は自分で偉いものだと思ひました、それか



ら學校でカンニングをやつて試驗を遁れました、手段が不正でも偉くなりさへすればいいと思つたからです、それはお父さんが僕に教へたのです、お父さんは天下國家のためだから惡い事をしても構はない、同志會のためなら恩人を懲役にしても構はないと思つていらつしやる、貴方も僕も同じです、それが今僕にはつきり解りました、腕力で人を征服するよりも心の中から尊敬されるのが本當に偉い人です、カンニングで試驗をパスするよりか寧ろ落第する方が立派です、人に罪を着せて自分が偉さうな顏をしてる事は、一番耻づべき事ではないでせうか、僕は幼ないからお父さんは浦和中で一番えらい人だとそれを自慢にして居ました、だが今になつて考へると僕は浦和中で一番劣等なお父さんをもつて居たのでした、ねえお父さん……」

「貴樣は〳〵〳〵」と猛太は眞赤になつて袖を拂つた。

「馬鹿野郎！　親不孝者！　大行は細謹を顧みずといふ諺を知らんか、阪井猛太は天下の志士だぞ、馬鹿ッ」

父はさつさと出て行つた。

「お父さん！」

巖は敷臺の緣に片手をかけ、幽靈の如く這ひ出して父の後を追はんとしたが、火傷の痛みに中心

を失つて思はず寢臺の下にドウと落ちた。

『お父さん待つて……』

彼は痛みを怺へて起上らうとしたが繃帶に惹かれて右の方へ倒れた。

『待つて下さい……お父さん！』

再び起き上ると又左の方へ倒れる。

『おとう……とう……と、と、と……』

聲は次第に弱つた、涙は泉の如く湧いた、さうして肩息になつて寢臺に手を掛けた、もう這ひ上る力もない。

病院の外で子供等が唄ふ聲が聞える。

『夕燒小燒、あした天氣になあれ』

## 六

小原捕手はいつもよりはやく眼を覺ましそれから十杯の釣瓶水を浴び心身を潔めてから屋根に上つて朝日を拜んだ。これはいかなる嚴冬と雖も一度も休んだ事のない彼の日課である。冷水に依つ

て眠氣と惰氣とを拂ひ、爽かな朝日を拜んで清新な英氣を受ける。

だが此の日はいつもより悲しかつた。全校生徒の歡迎があつたに拘らず久保井校長の轉任を祝す事が出來なかつた。

今日は校長が愈々浦和を去る日である。

大急ぎで朝飯を濟まし彼は直ぐ柳の家を訪ねた、柳も亦小原を訪ねようと家を出かけたところであつた。

『愈々駄目だね』と柳は言つた、平素溫和な彼に似ず此の日はさつと顏を染めて一抹悲憤の氣が顏に溢れて居た。

『仕方がないよ』と小原は言つた。二人は朝日の光が縱に流れる町を東に向つて歩いた。

『ところでね君』と小原は暫らくあつて言つた。

『今日の見送りだね、若し生徒が輕々しく騷ぎ出す樣な事があると、校長先生が僕等を煽動したと疑られるから、此の點だけはどうしても愼まなきやならんよ』

『僕もさう思つたから君に相談しようと思つて出掛けたんだ』

『さうか、さうか』と小原は大人らしくうなづいて『一番猛烈なのは三年だからね、僕は昨夜も晩

ら僕等は靜肅に校長を見送らうぢやないか』

『僕もさう思ふよ』

『ぢや其の積でやつてくれ、だが三年はどうかな』

小原は頻りに三年の事を心配して居た、何れの中學校でも一番御し難いのは三年生である、一年二年は未だ子供らしい點がある、四年五年になると、そろ〳〵思慮分別が出來る、ひとり三年は單純である代りに元氣が潑剌として常軌を逸する、而も有名な木俣ライオンが牛耳を執つて居る、校長轉任の披露があつてからライオンは十疋の蛇を町役場へ放さうと計畫して居るといふ噂を聞いた。又校長を見送つてから其の足で縣廳や役場を襲はうといふ計畫もあると聞いて居る。

小原には彼等の氣持は十分に解つて居た、彼等がそんな事をせずとも、小原自身が眞先になつて暴動を起したいのである、だが彼は校長の熱烈な演說と、其の言はんとして言はざる滿腹の不平を忍んで、學生は學生らしくすべしといふ訓戒を垂れた敬虔な態度を見ると、竹槍蓆旗の暴動よりも靜肅の方がどれだけ立派か知れないといふ溶々大海の如き寛濶な氣持が全身に漲つた。彼は初めて校長先生の偉大さが解つた。先生は何の抵抗もせずに此の地方の教育界の將來のために喜んで十字

架に就いたのである、先生は浦和の町人が、必ず其の不正不義を反省する時が來ると自信して居るのだ。

小原はかういふ事を柳に語つた。

『ねえ君、僕にはよく先生の氣持が解つた、それはね、僕が捕手をやつてるからだよ、捕手は決して自分だけの事を考へちやいかんのだ、全體の事を……みんなのことを第一に考へなけりやならない、丁度校長は捕手の様なものだからね』

『さうかね』

柳はひどく感慨に打たれて言つた。さうして口の中で『みんなの事〳〵』と繰返した。

二人は停車場へ行くと早や東から西から南から北から見送りの生徒が三々五々集りつゝあつた。昨日の申合はせで生徒は悉く和服で集ることになつて居た、白飛白に小倉の袴、手拭を左の腰に下げて、朴歯の下駄をから〳〵引摺るさまが珍しいので、町の人々は何事が始まつたかと怪しんだ。

集まるものは悉く少壮の士、噴き出しさうな血は全身に躍つて居る、其の鬱勃たる客氣は何物かに觸れると爆發する、而も今や涙を以て慈父の如く敬愛する校長と別れんとするのである。危

險は刻々に迫つて來る。彼等は何を見てもさわいだ。馬が荷車を曳いて走つたと言つては喝采し、お婆さんが轉んだと言つては喝采し、巡査が饅頭を食つて居るのを見ては喝采した。
小原は極めて手際よく彼等を鎭撫した、彼は平素沈默である代りにかういふ時には砲彈の樣な聲で一同を制するのであつた。野球試合の時どんな難戰に陷つても彼はマスクを脫ぎ雨手を擧げて
『しつかりやれよ』と叫ぶと、三軍の元氣俄かに振盪するのであつた。
彼は一同を廣場の片側に整列させた、何人も彼の命に背くものはなかつた、が併し人々の悲痛と憤怒はどうしても壓へきる事は出來なかつた。一年を制すれば二年が騷ぎ出し、二年を制すれば又一年が崩れる、流石に四年五年は肅然として淚を吞んで居る。
此等の動搖の波濤の中を潛り拔けては小原は東西に驅けずり廻つた、彼は帽子を脫いでそれを目標に振り〳〵叫んだ。其の單衣は汗にびしよ濡れて居た、彼は額から雨の如く傳はり落ちる汗を手拭で拭き〳〵した。
此の騷ぎの中に人々は一層不安の念を起したのは三年生の全部が見えない事であつた。
『三年が來ない』
口から口に傳はつて人々は罵り立てた。



「三年の奴は不埒だ」

だが此の罵りは直ぐ一種の反撥的な喝采と變つた。

「三年は全部結束して次の驛の構で校長を見送るらしい」

「いや赤羽まで校長と同車する計畫だ」

此の報知は確かに人々の胸を打つた、と又飛報が來た。

『カトレツト先生が辭表を出したさうだ、漢文の先生は校長を見送つてから辭職するさうだ』

此の噂は益々一同の神經を苛立たせた。

『學校を燒いてしまへ』

誰言ふとなく此の聲が非常な力を以て傳播した。

『靜かにし給へ、諸君、決して輕々しい事をしてくれるな』

小原は血眼になつて叫び廻つた、と此の時三年生は調神社に集まつて何事かを計畫して居るといふ噂が立つた。

『行つて見る』と小原は言つた『柳君、しばらく頼むぜ』

彼は下駄を脱ぎ捨てゝ跣足になつた、さうして袴を高く褰げて走り出した。

此の熱烈な小原の誠意には何人も感歎せぬものはなかつた。

『俺も行く』

『俺も……』

後藤といふ投手と濱井といふ三壘手は直ぐに續いた。

『學校の體面を思へばこそ小原も濱井も後藤もあの通りに奔走してるんだ、諸君はどう思ふか』

柳がかう言つた時一同は沈默した。

『あゝありがたいものは先輩だ』と柳はつく〴〵感じた。

ものゝ二十分と經たぬ中に町の彼方に颯と土埃が立つた。大通の曲り角から三年生の一隊が現れた、彼等は丁度送葬の人の如く打萎れて默つて居た、其の眞先に木俣ライオンが長い旗竿を擔つて居た、旗には「浦和に正義なし」と大書せるものがあつたが、小原の强硬な忠告に依つてそれを捲く事にした、彼等は何れも〳〵暗涙に咽んで齒をくひしばつて居た。

『賴むぞ木俣、なあおい』

小原はライオンの肩を叩いて頻りに宥めると、木俣はもう猫の如く柔順になつて、終りにはひとり群を離れて人蔭で泣いて居た。

純粹無垢な鏡の如き青年、澄徹淸水の如き學生! それは神武以來任俠の熱血を以て名ある關東男兒の尊き傳統である。此の傳統を無視して正義を迫害した政黨者流に對する公憤は神の如き學生の胸に勃發した。

かゝる騷ぎがあらうとは夢にも思はなかつた久保井校長は、五人の子と夫人と、女中とそれから

八十に餘る一人の老母と共に現れた。

『やあ、これは……』

彼は兩側に整列した生徒を見やつて立止まつた。生徒は一人として顔を擧げ得なかつた、水々とした黑い頭、生氣の漲る首筋が、糸を引いた樣に眞直に並ぶ、其の若やかな胸には萬斛の血が高潮を躍らして居る。

校長はほツとして立止まつたまゝ動かない。彼は何か言はうとしたが涙が咽に詰まつて言へなかつた。彼は全校生徒がかくまで自分を慕つてくれるとは思はなかつた。

生徒は矢張りなんにも言はなかつた。彼等は此の純潔な刹那に於て、校長と自分の靈魂が觸れ合つた樣な氣がした。

『ありがたう、どうもありがたう』

校長の口からかういふ低い聲が漏れた。實際校長の心持は千萬言を費やすよりもありがたうの一語に盡きて居るのであつた、彼は今九百の青少年から人間として最も美しい精靈を感受する事が出來たのであつた。

彼はかう言つてから老母の手を取つて何やら囁いた。老母は雪の樣な白髮頭を眞直に起して一

同を見廻した、其の氣高く彫んだ顏の皺々が波の樣に顫へると、慌てゝ手巾を懷から出して顏に當てた。

怺へ／＼た悲しみは大河の決する如く場内に溢れ出した。ライオンは跳り出て叫んだ。

『やれッ』

一同は校歌を唄ひ出した。

いつ先生が汽車に乘つたか、乘つた時にどんな風であつたか、それを詳らかに知つてゐるものはなかつた、一同が歩廊へ流れ出た時に早や汽車が動き出した。

『久保井先生萬歳！』

熱狂の聲が怒濤の如く起つた。

窓から半身を出した校長の顏は若やかに輝いた。彼は兩手を高く擧げて聲のあらん限りに叫んだ。

『浦和中學バンザアイ』

『久保井先生バンザアイ』

もう汽車は見えなくなつた、生徒はぞろり／＼と力なく停車場を出た。

丁度汽車が動き出した時、一人の少年が大急ぎでやつて來た、改札口が閉鎖されたので彼は柵を乘り越えようとした。

駅員は彼を突飛ばした。彼はよろ〳〵と倒れさうになつて泳ぐ樣に五六歩退つた、さうしてやつと壁に身體を凭らして呼吸をきらしながら默つた、其の片手は繃帶に卷かれて首から吊られてある。彼の胸が露はになつた時其の胸元も亦繃帶されてあるのが見えた。

『いけません』

彼は默つて便所と倉庫らしい建物の間へ出た、其處には燒杭の柵が結はれてある、彼は其處に立つて片肱を柵に置いた、靑黑い病人じみた顏は眼ばかり光つて見えた、帶が解けかけたのも、草履の鼻緒が切れたのも一切彼は氣が付かぬものゝ如く汽車を見詰めて居た。

萬歲々々の聲と共に校長の顏が現れた時彼はじつと眼を校長に据ゑた。彼の胸は顫へ彼の口元は悲痛と悔恨に弛み、さうして彼の眼から大粒の涙が零れた。

彼は阪井巖である。

汽車が見えなくなつた時彼はやうやく柵を離れて長い溜息を吐いた。それからじつと大通りの方を見やつた。其處には學校の友達が波の崩れる如く、歸り行く、阪井は顏をたれて靜かに歩いた。

と誰かの聲がした。

『生蕃が居る』

『阪井の奴が來て居る』

少年達の眼は一度に阪井に注がれた、阪井は棒の如く立竦んだ。

『やい生蕃』

眞先に詰め寄つたのはライオンであつた。

『やい』

阪井は默つて居る。

『貴樣は何しに來た』

『久保井先生に用事があつて來たよ』と阪井は矢張顏も上げずに言つた。

『貴樣は久保井先生を學校から逐ひ出したんぢやないか、どの面下げてやつて來たんだ』

『…………』

『おい、犬でも畜生でも恩は知つてるよ、俺は隨分不良だが校長先生の恩だけは知つてるんだ、貴樣は先生を逐ひ出した、犬畜生にも劣る奴だ』

『…………』

『貴様の様な奴はくたばつてしまやがれ、貴様の様な奴があるのは浦和の耻辱だぞ、どうだ諸君、こいつを打ち殺さうか』

『やつちまへ〳〵』と聲々が叫んだ。彼等は今五分前に先生と悲しい別れをした、滿々たる憤怒と悲痛は漏らす事も出來ずに胸の中で渦卷いて居る、何かの刺戟あれば爆發せずに居られない程血潮が湧き立つて居る。其等の炎々たる焰は凡て阪井の上に燃え移つた。

『やれ〳〵』

『制裁々々』

激昂した聲は刻一刻に猛烈になつた。人々は潮の如く阪井に向つて突進した。

『撲つてくれ！』

今まで罪人の如く沈默して居た阪井は何とも言へぬ悲痛な顏をして、押し寄せ來る學友の前に決然と進み出た、さうしてぴたりと大地に坐つた。

『俺はおやまりに來たんだ、俺は先生におやまりに來たんだ、俺はお前達に殺されゝば本望だ、さあ殺してくれ、俺は……俺は……犬に違ひない、畜生に違ひたい……』

繃帶を首から吊つた片手を其の儘に、片手は大地に突いて首を差し延べた、火事場の後と其の儘の髪の毛はところ〴〵焼け縮れて居る、彼は眉毛一つも動かさない。

『あやまりに来たと吐かしやがる、弱い奴だ、さあ覚悟しろ』

ライオンは朴歯の下駄の儘、彼の眉間を礑と蹴つた。阪井はぐつと頭を反らして倒れさうになつたがじつと姿勢を戻して片手を大地から離さない。

『畜生！』

『馬鹿野郎！』

『恩知らず』聲々が湧いた。

『撲るのは手の汚れだ、唾を吐きかけてやれ』

と誰かゞ言つた。唾の雨が彼の顔となく首となく背中となく降り注いだ。

『馬鹿野郎！』

最後に手塚が唾を吐きかけた、

『手塚、お前までが』

巌はじつと手塚を見詰めたので手塚は人中へ隠れた。

『さあ歸らう』とライオンが言つた『最後に臨んで足で彼奴の頭を撫でてやらう、さあみんな一緒だぞ、一！　二！三！』

下駄の亂箭が飛ぶかと思ふ一刹那。

『待つてくれ』

腸を剔る樣な聲と共に柳は巖の身體の上に蔽さつた。

『待つてくれ、阪井は火傷をしてるんだ、あやまりに來たものを撲るつて法があるか』

鶴が病む時には友の鶴が翼を擴げて五體を温めてやる、丁度其の樣に柳は泥や唾に汚れた阪井の全身を其の胸の下に包み、屹と顏を上げて



瞋恚に燃ゆる數十の眼を見上げた、其の眼には友情の至誠が輝き、其の口元には犯すべからざる勇氣が溢れた。

『なぜ阪井を撲るか、撲つた處で校長が再び歸つて來やしない、今日は僕等が泣きたい日なんだ、先生に別れて一日泣くべき日なんだ、人を撲るべき日ではない、阪井だつて……阪井だつて……先生を見送りに來たんぢやないか、……諸君、歸つてくれ給へ、なあ阪井君も歸れよ、諸君歸つてくれ、阪井歸れよ、諸君……阪井……』

柳はまつさをになつて歎願する樣に一同に言つた。もうだれも手を下さうとする者もなかつた、彼等は凱歌を擧げた、さうして下駄を曳きずり〳〵がら〳〵引上げた。

後に殘つた柳は、屈辱と悲憤に咽んで居る阪井の頭や背中の泥や唾を拭いてやつた。

『さあ行かう』

阪井は默つて居る。

『何處か痛いか、えつ？　歩けないか』

阪井は矢張默つて居る。

『さあ行かう、ねえ見つともないぢやないか、車でも呼ばうか』

手を取つて扶け起さうとする柳の手をぐつと握つて阪井は眼をかつと睜いた。
『柳、許してくれ』
『何をいふんだ、過去の事はお互に忘れよう』
『俺はお前に悪い事ばかりした、それだのにお前は二度とも俺を救うてくれた』
『そんな事はどうでもいゝよ、さあ行かう』
柳は阪井を強ひて立たした、二人は黙つて裏通へ出た。
『俺はなあ柳』
阪井は感慨に堪へぬものゝ如く言つた。
『俺は今日から生れ變るんだぞ』
『どうしてだ』
『俺は今まで善いと思つて居た事は凡て悪い事なんだ、それが解つたよ』
『それはどういふ事だ』
『どういふ事つてお前、凡てだよ、凡てだ、何も彼も俺は悪い事をして悪いと思はなかつたのだ、親父は俺に何でも學校で一番強い人間になれといふだらう、だから俺は喧嘩をした、活動を見ると

人を斬つたり賭博をしたりするのが豪傑だといふ人だ、だから俺はそれを真似て見たんだ、そ
れは間違つてるね、悪い事をして人より偉くならうといふのは泥棒して金持にならうとするのと同
じものだね、さう思はないか』

『さうだとも』

『だからさ……』

阪井はかう言つた時、傷が痛むので眉を顰めた。

『君の家まで送つて行かう』と柳は言つた。

『構はない、もう少し歩かう』

阪井は再び何か言續けようとしたが急に口を噤んで悲しさうな顔をした。

『俥に乗れよ』

『何でもないよ……ねえ柳、僕はお前に訊きたい事があるんだが』

『何だ』

『一年の時、重盛の諫言を讀んだね』

『あゝ、忠孝兩道の處だらう』

『うん、君に忠ならんとすれば親に孝ならず、重盛は可哀さうだね』
『あゝ』
『清盛は悪い奴だね』
『あゝ』
『重盛がいくら諫めても清盛が改心しなかつたのだね』
『あゝ』
『それで重盛はどうしたらう』
『熊野の神様に死を祈つたぢやないか』
『さうだ、死を祈つた、なぜ死なうとしたんだらう』
『忠孝兩道を全うする事が出來ないからさ』
『困つたから死なうといふんだね』
『あゝ』
『ではお前』
阪井の語氣は荒かつた。

『困る時に死んでしまへばいゝのかえ』
『それが問題だよ』
『何が？』
『自分だけ楽をすれば後はどうなつても構はないといふのは卑怯だからね』
『ぢや重盛は卑怯かえ』
『理論からいふと、さうなるよ、併し重盛だつてよく〳〵考へたらうと思ふよ』
『さうかね』
阪井は長大息をした。彼は默つて歩き續けた。さうして軈て靜かに言つた。
『淸盛が改心するまで重盛が生きて居なければならなかつたね』
『さあ僕には解らないが』
『僕には解つてるよ、解つてるとも、さうでなかつたら無責任だ』
柳は阪井を家まで送つて我が家へ歸つて來ると途中で手塚に逢つた。
『やあ、今、君の處へ行かうと思つて來たんだよ』
『さうか』

柳は手塚の行爲に就いて少からぬ惡感を有つて居たので極めて冷淡に答へた。

『生蕃はどうした』

『歸つたよ』

『彼奴、僕の事を怒つて居たらう』

『どうだか知らんよ、だが怒つて居るだらうさ、今まで君と阪井とは一番親しかつたんだらう、それを君が皆と一緒になつて唾を吐きかけたんだからね』

『だつて彼奴は惡徒だからさ』

『君ほど惡徒ではないよ』

柳は思はずから言つた。手塚はさつと顏を赧めたがそれは憤慨のためではなかつた。彼は柳に肚の中を見透かされたのが耻かしかつたのである。だが此の位の侮辱は彼に取つては耳慣れて居る。

彼は親む樣に柳の顏を見やつて、

『君、活動へ行かないか』

『いやだ』

『クラヽキンボールヤング素敵だぜ』

『それは何だ、西洋の乞食か』

『はゝゝ君はクラちやんを知らないのかえ』

『知らないよ』

『話せねえな、一遍見給へ、僕が奢るから』

『活動といふものはね、君の様な奴が見て喜ぶものだよ』

流石に手塚は眼をぱちくりさせて言葉が出なかつた。だが此位の事にひるむ様な手塚ではない。

彼は媚びる様な眼を向けて言つた。

『君、僕のカナリヤが子を孵したからあげようね』

『いらないよ』

『ぢやね、君は犬を好きだらう、僕のポインターをあげようね』

『僕の家にもポインターがあるよ』

『さうだね』

手塚はひどく當惑して默つたが、もうこらへきれずに言つた。

『君は生蕃が好きになつたのか』

『元から好きだよ』

『だつて彼奴は君を負傷させたぢやないか』

『喧嘩はお互ひだ、生蕃には男らしい處があるよ』

『ぢや失敬』

『失敬』二人は冷然と別れた。

光一に送られた巖は家へ入るや否や我が室へ轉がり込んだ。今までこらへ〳〵た腹立たしさと悲しさと全身の痛みが、急に犇々と迫つて來る。彼は疊にころりと倒れたまゝ天井を見詰めて深い考へに沈んだ。

彼の頭の中には停車場前に於て學友に打たれ撲られ唾を吐きかけられた光景が浮んだ。下駄で踏まれた額の瘤がしく〳〵痛み出す。が彼はそれよりも痛いのは胸の底を刺される樣な大なる傷であつた。

父の不正！　校長の轉任！　學友の反感！　數へ來たれば凡ての非は我にある。

『巖、何處へ行つてたの？』

母は心配さうに彼の室を覗いた。巖は答へなかつた。

「お腹が空いたらう。御飯を食べない？」
「欲しくありません」
「火傷が癒らない中に外へ出歩いてはいけないよ、おや額をどうしたんです」
「何でもありません」
「又喧嘩かえ」
「彼方へ行つてゝ下さい」と巖は噛みつく様に言つた。
「何をそんなに怒つてるんです」
母は屹と眼を据ゑた。其の眼には不安の色が浮び、口元には慈愛が滿ちて居る。
「何でもいゝです」
「何か氣にさはる事があるならお言ひなさい」
「彼方へ行つて下さいといふに」
母はしを／＼と出て行つた。巖は起き上つて母の後姿を見やつた。何とも言ひ様のない悲しみが一ぱいになる。お母さんにはあんな亂暴な言葉を使ふんぢやなかつた、といふ後悔がむらむらと出て來る。

「どうしようか」

實際彼は進退に迷うた。今まで神の如く尊敬して居た父は惡人なのだ。此の失望は彼の單純な自尊心を谷底へ突落してしまつた。彼には全く光がなくなつた。

死んでしまはうか。

いや！　平重盛は馬鹿だ。

二つの心持が惑亂して腦の底が重たくだるくなつた。彼はじつと机の上を見た。其處に友達から借りた漢文の本がひらいたまゝ載つてある。

「周處三害」

支那に周處といふ不良少年があつた。喧嘩はする。強盗はする。村の者をいぢめる、田畑を荒らす、どうもかうも仕樣のない惡者であつた。或時彼の母が大變に鬱ぎ込んで居るのを見て彼はかう訊いた。

「お母さん何か御心配があるのですか」

「あゝ、私はもう心配で死にさうだ」と母が言つた。

「何がそんなに御心配なのですか」

『此の村に三害と言つて三つの害物がある。その為に私も村の人も毎日びくびく心配して居る』
『三害とは何ですか』
『南山に白額の虎が出て村の人を喰ふ、長橋の下に蛟龍が出て村の人を喰ふ、今一つは……』
かう言つて母は周處の顔を見やつた。
『今一つは何ですか』
『お前だ、お前が悪い事をして村の害をなす、虎と龍とお前が此の村の三害だ』
此の話を聞いた周處は俄然として悟つた。
『お母さん、御安心なさい、僕は三害を除きませう』
周處は南山へ行つて白虎を殺し、長橋へ行つて蛟龍を殺し、自分は品行を正しくして村のために善事を盡くした。此に於て此の村は太平和楽になつた。
僕は讀むともなしにそれを讀んだ。突然僕の頭に透明な光が射し込んだ。僕は呼吸も吐かずにもう一度讀んだ。
『三害を除かう、僕は男だ』僕はかう叫んだ。
『俺に悪い癖があるなら俺が改めればいゝ、お父様に悪い癖があるなら僕が諫めて改めさせればい

い、二人が善人になれば此の村は善くなるのだ、南山に虎を搏ちに行く必要もなければ長橋に龍を屠りに行く必要もない、第一の害は俺だ、俺を改めて父を改める、それでいゝのだ』

彼は立つて室を一周した、得も言へぬ勇氣は全身に漲つて歡喜の聲を擧げて高く叫びたくなつた。

彼は窓を開いて外を見やつた、涼しい風が庭の若葉を吹いて簾がさら〳〵と動いた、木々の綠は眼ざめる様に鮮かである。

『豆腐ィ……』

喇叭の音と交代にチビ公の聲が聞える。

『チビ公だ』彼は伸び上つて塀の外を見やつた。

『とうふい――』

暑い日光をものともせず、大きな桶を擔うて行くチビ公の菅笠が僅かに見える。

『俺は彼奴にあやまらなきやならない』巖は脱兎の如く跣足のまゝで外へ出た。さうして突然チビ公の前に立塞がつた。

『青木！　おい、堪忍してくれ、なあおい俺は悪かつた、俺は今日から三害を除くんだ』

## 七

お宮の銀杏が黄色になれば畦には薄、水引、蓼の花、露草などが薄日を頼りに咲き亂れて、橋の下を行くちよろ／＼水の音に秋が深くなり行く。

役場の火事に續いては町の人は何も言はなくなつた、阪井猛太は助役をやめて伜の巖と共に川越の方へ移つた、中學校にはあたらしい校長が來た。浦和の町は太平である。

チビ公は矢張一日も休まずに豆腐を賣り廻つた、それでも一家の貧しさは以前と變りがなかつた、彼は毎日喇叭を吹いて町々を歩いて居る中に幾度となく昔の小學校友達に逢ふのである、中には光一の樣に優しい言葉を掛けてくれるものもあるが、多くは顔を反向けて通るのである。チビ公としても先方の體面をはかつて素知らぬ顔をせねばならぬ事もあつた、特に彼の心を悲ませるものは小學校時代にいつも先生に叱られて居た不成績の子が、立派な中學生の服裝で雜嚢を肩に掛け、徽章の着いた帽子を輝かして行くのを見た時である。

『金持の家に生れゝば出來ない子でも大學まで行ける、貧乏人の子は學校へも行けない、彼等が學士になり博士になる時にも俺は矢張り豆腐屋で居るだらう』

から思ふと情ない樣な氣が胸一ぱいになる。

『學校へ行きたいな』

彼の歸り途は縣廳の横手の小川の堤である、彼は堤の露草を踏み〳〵ぐつたりと顏をたれて同じ事を繰返し〳〵考へるのであつた。

時として彼は師範學校の裏手を通る、其處の寄宿舍には灯影が並んで折り〳〵若やかな唱歌の聲が聞える。

『官費でいゝから學校へ行きたい』

からも考へる、だが彼は直ぐそれを打消す。彼の眼の前に伯父覺平の老顏があり〳〵と見えるのである。

『俺が働かなきや、みんなが食べて行けない』

そこで彼は夕闇に殘る西雲の微明に向つて喇叭を吹く。喇叭の音は遠くの森に響き、近くの藁屋根に反響して我が胸に悲しい思ひを打ち返す。

或日伯父の覺平は突然彼にから言つた。

『千三、お前學校へ行きたいだらうな』

『いゝえ』とチビ公は答へた。
『俺だつてお前を豆腐屋にしたくないんだ、なあ千三、其の中に何とかするから辛抱してくれ、其の代りに夜學へ行つたらどうか、晝の疲れで眠たからうが、一心にやればやれない事もなからう』
『夜學に行つてもいゝんですか』
千三の眼は喜びに輝いた。
『夜學だけなら構はないよ、お宮の近くに夜學の先生があるだらう』
『默々先生ですか』
『うむ、變り者だがなか〳〵えらい人だつて評判だよ』
『恐いな』と千三は思はず言つた。默々先生と言へば本名の篠原浩藏を言はなくとも浦和の人は誰でも知つて居る。先生は今五十五六歳、未だ老人といふ歳でもないが、頭と髭は雪の様に白くそれと共に左の眉に二寸ばかり長い毛が一本突出て居る、怒る時には此の長い毛が上に動き、笑ふ時には下に垂れる、町の人は此の毛を以て先生の機嫌のバロメーターにして居る。
先生の履歴に就いて町の人は詳しく知らなかつた、或る人は曾て文部省の參事官であつたと言ひ、或る人は地方の長官であつたと言ひ、或る人はまた馬賊の頭目であつたとも言ふ、眞僞は判ら

ぬが彼は熊谷の豪族の子孫である事だけは明らかであり、また帝國大學初期の卒業者である事も明らかである、何のために官職を辭して浦和に歸臥したのか、其等の點に就いては彼は一度も人に語つた事はない。

彼が浦和に歸つたのは十年前である、其の時は獨身であつたが人の勸に依つて後妻を迎へた、だが彼は朝から晩まで家にある時には讀書ばかりして居る、妻が何を言つても『うん〳〵』となつくばかりで何も言はない。で妻は彼に詰問した。

『貴方何か言つて下さい』

『うん』

『うんだけではいけません』

『うん』

『貴方は何もおつしやる事がないんですか』

『うん』

『何か用事があるでせう』

『うん』

『御飯はどうなさるの？』

『うん』

『召し上らないんですか』

『うん』

妻は呆れて三日目に離縁した。彼は其の小さな軒に英漢數教授といふ看板を出した。妻にものを言はない人だから生徒に對しても、ものを言はないだらうと人々は危ぶんだが、一旦講義に取り掛ると全くそれと反對であつた。

最初の一二年は生徒が少なかつたが、年を經るに從つて次第に増加した。彼には月謝の制定がない、五圓もあれば五十錢もある、米や豆や芋などを持つて來るものもある、獨身の先生だからといふので魚を贈る人が至つて少ない、そこで先生は折り折り一竿を肩にして河へ釣に行く、一尾の鮒も釣れない時には町で魚を買つて其の腮を鉤に貫き揚々として肩に荷うて歸る、時には鯵、時には鰯、時には章魚、時には鹽鮭の切身！

『先生！　釣れましたか？』と人が問へば、先生輕く答へる。

『うん』

「鈎に引掛つてるのは蒲鉾ぢやありませんか」
「蒲鉾は魚なり」
千三は子供の時から何となく默々先生が恐かつた。併し彼として學問をするには此の私塾より他にはない。
翌日千三は夕飯を濟まして默々先生を訪ねた、其處にはもう五六の學生が居た。それは中學の二年生もあれば五年生もあり又髭の生えた人もあり、百姓もあれば商家の丁稚もある。千三が入つた時丁度小學校の教師が難かしい漢文を讀んで居た。
「いかん〱」と先生は怒鳴つた「もつと聲を大きくして、漢文は朗々として吟ずべきものだ、語尾をはつきりせんのは心が臆して居るからだ、聖賢の書を讀むに何の疚しい處がある、此の家が毀れる樣な聲で讀め」
教師は眞赤な顔をして大きな聲で讀んだ、先生は默つて聞いて居た。
「よしつ、君は子弟を教育するんだ、兎角に今日の學校は朗讀法を蔑にする嫌がある、大切な事だぜ」
先生はひよろ長い痩せた首を伸ばして末座に縮まつてる千三を見下した。

『君、此處へ來給へ』

『はあ』

『君の名は?』

『青木千三です』

『うむ、何をやるか』

『英漢數です』

『よしッ、これを讀んで見い』

先生は一册の本を千三の前へ投げ出した。それは黑茶色の表紙の着いた日本綴であつた、標箋に大學と書いてある。

『これをですか』

千三は中學校一二年生の國語漢文讀本を教はる積であつた、今大學といふ書を見て急に驚いた。大學といふ本の名を知つたのも初めてゞある。

『うむ』

『何處を讀むのですか』

『何処でもいゝ』
千三は中をひらいた。難かしい漢字が並んだばかりでどう読んでいゝのか解らない。
『読めません』と彼は言つた。
『読める字だけ読め』
『湯……曰……日……新……日……日……新又日新』
千三は読める字だけを読んだ、汗が額ににじんで胸が波の如く躍る。
『よし、よく読んだ』と先生は微笑して『其の意味は何だ』
『解りません』
『考へて見い』
千三は考へ込んだ。
『これは毎日々々御湯へ入つて新しくなれといふのでせう』



『えらい！』

先生は思はず叫んだ、さうして千三の顔をじつと見詰めながら讀み下した。

『湯の盤の銘に曰く、苟に日に新にせば、日日に新にし又日に新にせん……かう讀むのだ』

『はあ』

『湯は御湯でない、王様の名だ、盤は盥だ、盥に格言を刻り付けたのだ、人間は毎日顔を洗ひ口を漱いで我が身を新にする如く、其の心をも毎日々々洗ひ淨めて新な氣持にならなければならん、とかういふのだ、



だが君の解釋は字句に於て間違があるが大體の意義に於て間違はない、書を讀むに文字を讀むものがある、そんな奴は帳面付や詩人などになるがいゝ。また文字に拘泥せずに其の大意を握る人がある、それが本當の活眼を以て活書を讀むものだ、よいか、文字を知らないのは決して恥でない、意味を知らないのが恥辱だぞ』

かう言つて先生は次の少年共に向つた。

『日本の歴史中に惡い人物は誰か』

いろ〳〵な聲が一度に出た。

『弓削道鏡です』

『蘇我入鹿です』

『足利尊氏です』

『源　頼朝です』

『頼朝はどうして惡いか』と先生が口をいれた。

『武力を以て皇室の大權を冒しました』

『うん、それから』

武田信玄といふものがある。
『信玄はどうして』
『親を幽閉して國を奪ひました』
『うん』
『徳川家康！』
『どうして？』
『皇室に無禮を働きました』
『うん、それで、君等は何を以つて悪い人物、善い人物を區別するか』
『君に不忠、親に不孝なるものは、他にどんな善い事をしても悪い人物です、忠孝の士は他に缺點があつても善い人物です』
『よしッ、それでよい』
先生は、いかにも快然と言つた、先生の教へる處は常にかういふ風なのであつた、先生はどんな事件に對しても必ずはつきりした判斷をさせるのであつた、たとへそれが間違であつてもそれを臆面なく告白すれば先生が喜ぶ。

千三は其日から毎夜先生の許へ通うた、先生はまた地理と歷史の關係を最も精密に教へてくれた、それは普通の中學校では極めて忽せにして居る事であつた、中學校では地理の先生と歷史の先生と別な人であるのが多い、其のために密接な二つの關係が分離されてしまふが、默々先生は歷史の進行と共に地理を展開させた、神武以來大和は發祥の地になつて居る、そこで先生は大和の地理を教へる、同時に大和に活躍した人物の傳記や逸話等を教へる。學生の頭には其の人と其の地と其の時代が深く刻まれる。先生は代數や幾何を教へるにも凡て其の方法で、決して廻りくどい術語を用ひたり、強ひて頭を混惑させる樣な問題を提供したりしなかつた。其の英語の如きも一々漢文の文法と對照した、其のために生徒は英漢の文法を一度に知る事が出來た。

先生はいかなる場合にも虛僞と臆病を嫌つた。臆病は虛僞の基である、彼は講義をなしつゝある間に突然かう言ふ時がある。

『眠い人があるか』

『あります』と千三が手を擧げた。

『庭へ出て水を浴びて來い』

先生は千三の正直が氣に入つた。

冬が來た、正月も間近になる、せめて母に新しく綿の入つたもの一枚でも着せてやりたい、かういふ考へから千三は一生懸命に働いた、而も通學は一日も休まなかつた、彼は先生の家を出ると直ぐぐら／＼眠りながら家へ歸る夜が多かつた。

と、災厄は次から次へと起る、或夜彼が家へ歸ると母が麻糸繋ぎをやつて居た、いくらにもならないのだが、彼女はいくらでも働かねば正月を迎へる事が出來ないのであつた。

『只今』

千三は勢よく聲を掛けた。

『お歸り、寒かつたらう』と母は火鉢の火を掻き立てた、灰の中には僅かに埋めて置た火が見えた、外はひゆう／＼風が唸つて居る。

『寒いなあ』と千三は思はず言つた。

『お待ちよ、今消炭を持つて來るから』

母は麻糸を片寄せて起たうとした。

『おや』

母は起てなかつた。

『おや』

母は再び言つて起たうとしたが顔がさつと青くなつて後に倒れた。

『お母さん』

千三は抱き起さうとした。母の眼は上の方へつつた。

『お母さん』

聲に驚いて伯父夫婦が起きて來た。千三は早速手塚醫師の許へ驅け付けた。元來彼は手塚の許へ行くのを好まなかつた、併し火急の場合、他へ走る事も出來なかつた。

粉雪まじりの師走の風が電線に唸つて居た、町はもう寢靜まつて、風呂屋から流れて來る下水の湯氣が溝板の隙から、もやもやと凍て付いた地面を這つて居た。

『今晩は……今晩は……』

千三は手塚の門を叩いた。

音がない。

『今晩は！』

彼は聲を限りに呼び力を限りに叩いた。奥には未だ人の聲がする。



『どうしたんだらう』

千三は手塚なる醫者が金持には幇間の如くちやほやするが、貧乏人には極めて冷淡だといふ人の噂を想ひ出した、それと同時に此の深夜に來診を請ふと、隨分少なからぬお禮を出さねばなるまいが、それも出來ずに無暗と門を叩くのはいかにも厚かましい事だと考へたりした。

やつとの事で書生の聲がした。

『どなた？』

『豆腐屋の青木ですが、母が急病ですからどうか一寸お出を願ひたいんです』

『はあ――』と妙に氣の拔けた返事が聞えた。『豆腐屋の……青木？』

『はい』

『先生は風邪氣でお寢みですから……どうですか伺つて見ませう』

『どうぞお願ひします、急病ですから』

千三は暗い門前で靜かに耳を欹てた、奥で碁石を崩す音がちやら／＼と聞える。

『何だ、碁を打つてるのにお寢みだなんて』

かう千三は思つた。と再び小さな窓が開いた。

『只今伺ひます』

『ありがたうございます』と千三は思はず大きな聲で言つた。

『どうぞ、よろしく、ありがたうございます』

千三は一足先に家へ歸つた、母は未だ正體がない。

『冷えたんだから足を温めるがいゝ』

から伯父が言つた。伯母は只うろ〳〵して佛壇に灯を點したりして居る。千三は直ぐ火を起しかけた。其處へ車の音がした。

『どうも御苦勞樣で……どうぞ』

潜りの戸を入つて來たのは手塚醫師でなくて代診の森といふ男である。此の森といふのは、隨分古くから手塚の藥局にゐるが、代診として患者を往診した事は極めて稀である、千三はいつも森が白い藥局服を着て往來でキヤツチボールをやつてるのを見て居るので甚だ覺束なく思つた。

『先生が風邪氣なんで……』

森はかう言つてずん〳〵奧へ上り込んだ、彼は其の外套と帽子を車夫に渡した、それから眼鏡を一寸鼻の上へせり上げて病人を見やつた。

『どんなに悪いんですか、あゝん?』

彼はお美代の腕を取つて脈を檢べた。それから發病の模樣を聞きながら聽診器を胸に當てたり、眼瞼を引き繰返して見たりした、其の態度はいかにも落着き拂つて居る。これが折り〳〵玄關で手塚と腕押しをしたり鯱鉾立ちをしたり、近所の子供にからかつたりする人とは思へない。門口で車夫が頻りに咳拂をして居る、それは『寒くて堪らないからいゝ加減にして歸つてくれ』と言ふかの如く見えた。

『はあん……これは腦貧血ですな、あゝん、大した事はありません、頭寒足熱ですかな、足を溫めて頭を冷やして安眠させるといゝです、あゝん、藥は散藥と水藥……あゝん、直ぐでよろしい』

彼はから言つてから先生から借りて來た鞄を取り上げて室を出た。

『おい幸吉』

幸吉とは車夫の名である、彼はいつも朝と晩に尻端折をして幸吉と二人で門前に水を撒いて居るのである。書生と車夫は同じくこれ奉公人仲間、言はゞ同階級である。それが今傲然と呼び捨てにされたので幸吉たるもの胸中聊か穩かでない、彼は默つて答へなかつた。

『おい幸吉! 何をしとるかツ、あゝん』

『早く行きませうよ森さん』と幸吉は業腹まぎれに言つた

『こらッ外套と帽子をおくれ、あゝん』

森は外へ出た、車の走る音が聞えた、寒さは寒し不平は不平なり、恐らくは幸吉、車も覆れとばかり走つた事であらう。

車に後れじと千三も走つた、彼が醫者の玄關に着いた時、奥では矢張り圍碁の音が聞えて居た。

母の病狀はそれ以上に進まなかつた。が、さりとて床を出る事は出來なかつた。

『明日になつたら起きられるだらう』

かう母は言つた、だが翌日も起きられなかつた。病弱な彼女が寒さを冒して毎日毎夜內職を働いた其の疲れが積り積つて腦に及んだのである。千三は豆腐を舁いで町廻りの歸りしなに手塚の家へ寄つて藥を貰ふのであつた、最初藥は二日分づつであつたが、母のお美代はそれを拒んだ。

『直き癒るから一日分づつでいゝ、二日分貰つても無駄になるから』

これはいかにも道理ある言葉であつた、どういふわけか醫者は二日分づつの藥を呉れる、それも一つは必ず胃の藥である、金持の家は藥代にも困らぬが、貧しき家では一日分の藥價は一日分の米代に相當する。お美代は毎日藥を飲む度に勿體ない勿體ないと言つた。

或日千三は歸つて母にかう言つた。

『お母さん、手塚の家の天井は格子になつて一つ〳〵に繪を貼つてあります、絹に畫いた綺麗な繪！』

『あれを見たかえ』と母は病に衰へた眼を向けて淋しく言つた。『あれは應接室だつたんです、お父さんが支那風が好きだつたから』

『さう？』

『あの隣の室のもう一つ隣りの室は茶室風でお前が其處で生れたのです、萩の天井です、床の間には……』

母の聲はハタと止んだ、彼女は眼をうつとりとさせて昔其の良人が世にありし時の全盛な生活を回想したのであつた。

『あの時には女中が五人、書生が三人……』

睫毛を傳うて玉の露がほろりとこぼれる。

『お母さん！　詰らない事を言ふのは止して下さい、僕は今にあれ以上の家を建てゝあげます』

『さう〳〵、さうだね』

母は激しく笑つた、千三は堪らなく苦しくなつた、今まで胸の底におさへ付けて置いた憂鬱がむら／＼と雲の如く湧いた。彼は薬を貰ひに醫者の家へ行く、支那風の天井の下に小さく坐つて居ると例の憂鬱がひし／＼と迫つて來る。

『あゝ此處が俺の生れた處なんだ、俺が生れた時に手塚の親父がぺこ／＼頭を下げて見舞に來たんだ、それが今其奴に占領されてあべこべに俺の方が頭を下げて薬を貰ひに來てる』

或日彼はこんな事を考へながら門を入らうとすると其處で代診森君が手塚と捕球をして居た。

『そら今度はドロップだぞ』

手塚は得意になつて球を握り代へてモーションを付けた。

『よし來た』

森君はへつぴり腰になつて片足を浮かして構へた、若し足に當りさうな球が來たら片足をあけて逃がさうといふ腹なのである。

『さあ來い』

『よしッ』

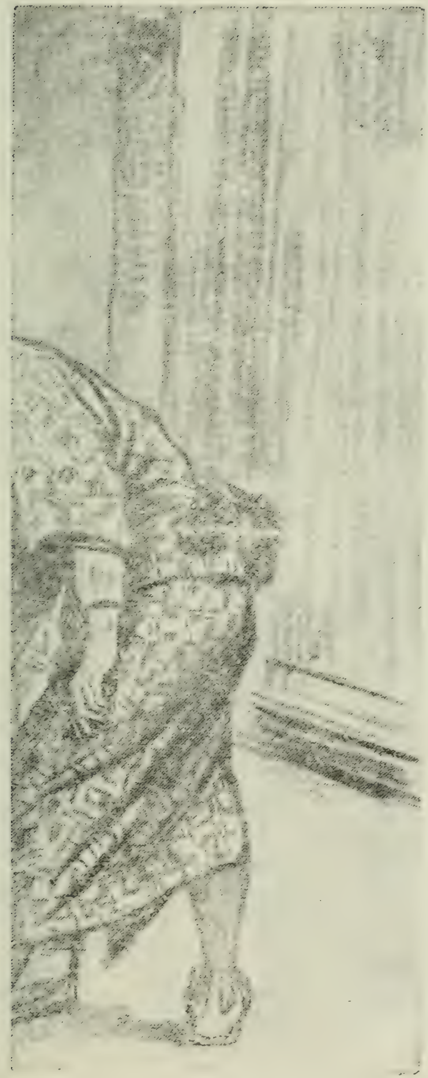
球は大地を叩いて横の塀を打ち更に跳り上つて千三の豆腐桶を打ち、ころ／＼と溝の方へ轉が

つた。

『おい豆腐屋！　早く球をとれよ』手塚が叫んだ。

『はッ』

千三は桶を舁いだまゝ球を追駈けた。桶の水はだぶ〳〵と波を跳らして蓋も庖丁も大地に落ちた。





『やあ〳〵勇敢々々』と森君は喝采した、千三は球が石の溝端を傳つて泥の中へ落ち込まうとするをやつと抑へようとした、天秤棒が土塀にがたんと突當つたと思ふと彼ははね返されて豆腐桶諸共尻餅を突いた、豆腐は魚の如くはねて地上に散つた。

『馬鹿だね、桶を置いて走ればいゝんだ、馬鹿ツ』

手塚はかう言つて自分で溝泥の中から球を撮み上げ、いきなり千三の桶の中で球を洗つた。

『それは困ります』と千三は訴へる樣に行つた。

『豆腐代を拂つたら文句がないだらう』

手塚は笑つて奥へ引込んだ。

『待てツ』と千三は呼止めようとしたが、じつと下唇を嚙んだ。

『今手塚と喧嘩をすれば母の藥を貰ふ事が出來なくなる』

彼の眼から熱い涙が湧き出た。人間の貴重な食料品！　其の桶の中に溝泥にまみれた球を突込んで洗ふなんて餘りの亂暴である。だが貧乏の悲しさ、彼と爭ふ事は出來ない。

どれだけ泣いたか知れない。彼はもう喇叭を吹く力もなくなつた。

『俺は駄目だ』

彼はかう考へた、どんなに勉強しても矢張り金持にはかなはない。

『俺と伯父さんは夜の眼も寢ずに豆腐を作る、だがそれを食ふものは金持だ、作つた俺達の口に入るのは其の餘りかすの雪花菜だけだ、學問は止めよう』

彼はがつかりして家へ歸つた、彼は默々先生の夜學を休んで早く寢床に入つた。翌朝起きて町へ出た。もう彼の考へは全然今までと變つてしまつた。彼は町々の立派な商店、會社、銀行其等を見るとそれが凡て呪はしきものとなつた。

『彼奴等は惡い事をして金を溜めて威張つてるんだ、彼奴等は俺達の血と汗を絞り取る鬼共だ』

其の夜も夜學を休んだ、其翌日も……。

『俺がチビだからみんなが俺を馬鹿にしてるんだ、俺が貧乏だからみんなが俺を馬鹿にしてるんだ』

彼の母は彼が夜學へも行かなくなつたのを見て心配さうに訊ねた。

『千三、お前今夜も休むの？』

『あゝ』

『どうしてだ』

『行きたくないから行きません』

彼の聲は突慳貪であつた、母は悲しさうな眼で彼を見やつたなり何も言はなかつた、千三は夜具の中に首を突込んでから心の中で母にあやまつた。

『お母さん堪忍して下さい、僕は自分で自分をどうする事も出來ないのです』

此のすさんだ心持が五日も六日も續いた、と或る日彼は夕日に向つて喇叭を吹きもて行くと突然彼の脊後から呼び止めるものがある。

『おい青木！』

夕方の町は人通が頻繁である、餘りに大きな聲なので往來の人は立止まつた。

『おい、青木！』

千三が振返る、それは默々先生であつた、先生は肩に釣竿を荷ひ、片手に炭俵を抱へて居る、俵の底から芋の尻尾が零れさうにぶら〳〵して居る。

『おい、君の桶の上にこれを載せてくれ』

千三は默つて一禮した。先生は炭俵を桶の上に載せ、其儘自分の肩を入れて歩き出した。

『先生！　僕が舁いでお宅まで持つて行きます』

と千三が言つた。
『いや構はん、俺について來い』
ひよろ長い先生の桶を舁いだ影法師が夕日にかつきりと地上に映つた。
『君は病氣か』
『いゝえ』
『どうして來ない？』
『何だかいやになりました』
『さうか』
先生はそれについて何も言はなかつた。
默々先生が芋俵を載せた豆腐桶を擔ひ、其の傍に豆腐屋のチビ公が從いて行くのを見て町の人々はみんな笑ひ出した。二人は默々塾へ着いた。
『はいれ』と先生は天秤を下ろしてから言つた。
『はい』
もう日が暮れかけて家の中は薄暗かつた、千三は草鞋を脫いで緣端に坐つた。先生は默つて七輪

を取出し、それに粉炭をくべて鍋を掛け、七八本の芋を其の儘抛り込んだ。
『洗つて参りませうか』
『洗はん方がうまいぞ』
かう言つてから先生は再び起つて書棚を探したが軈て二三枚の紙綴を千三の前に置いた。
『おい、これを見い、私は君に見せようと思つて書いて置いたのだ』
『何ですか』
『君の先祖からの由緒書だ』
『はあ』
千三は由緒書なるものは何であるかを知らなかつた、で彼はそれをひらいた。
『村上天皇の皇子中務卿具平親王』
千三は最初の一段高く記した一行を讀んで吃驚した。
『先生何ですか、これは』
『あとを讀め』
『右大臣師房卿――後一條天皇の時始めて源朝臣の姓を賜はる』

『變なものですね』

先生は七輪の火を吹いたので火の粉がぱち／＼と散つた。

『――雅家、北畠と號す――北畠親房其の子顯家、顯信、顯能の三子と共に南朝無二の忠臣、楠公父子と比肩すべきもの、神皇正統記を著はして皇國の正統を明かにす』

『北畠親房を知つてるか』

『よくは知りません、歴史で少しばかり』

『日本第一の忠臣を知らんか、其のあとを讀め』

『親房の第二子顯信の子守親陸奥守に任ぜらる……其孫武藏に住み相模鎌ヶ谷に轉ず、上杉家に仕ふ、上杉家滅ぶるに及び姓を扇に改め後青木に改む、……青木龍平――長男千三……チビ公と稱す、懦弱取るに足らず……』

鍋の芋は湯氣を立てゝ蓋は跳り上つた。先生はじつと千三の顏を見詰めた。

『どうだ』

『先生！』

『君の父祖は南朝の忠臣だ、君の血の中に祖先の血が活きてる筈だ、君の精神の中に祖先の魂が躍

つてる筈だ、君は選ばれたる國民だ、大切な身體だ、日本になくてはならない身體だ、さうは思はんか』

『先生！』

『何も言ふ事はない、祖先の名を辱しめないやうに奮發するか』

『先生』

『それとも生涯豆腐屋で朽ち果てるか』

『先生！　私は……』

『何も言ふな、さあ芋を食つてから返事をしろ』

先生は芋の鍋を下ろした、庭は既に暮れて落葉がさら〳〵と鳴る、七輪の火が風に吹かれてぱつと燃え上ると白髪白髯の黙々先生の顔と張り裂ける様に涼しい眼を睜いた少年の赤い顔とが暗の中に浮き出して見える。

## 八

黙々先生に系圖を見せられた其の夜、千三はまんじりともせずに考へ込んだ、彼の胸の中に新しい

光が射し込んだ。彼は嬉しくて堪らなかつた、何とも知れぬ勇氣が勃々と躍り出す。彼は大きな聲を出して怒鳴りたくなつた。

眠らなければ、明日の商賣に障る、彼は足を充分に伸ばし胸一ぱいに呼吸をして一二三四と數へた。さうして彼は淡い／＼夢に包まれた。

ふと見ると彼は或る山路を歩いて居る。路の兩側には櫻の老樹が並んで、今を盛りに咲き誇つて居る。

『あゝ此處は何處だらう』

から思つて眼を擧げると谷を隔てた向ふの山々も悉く櫻である。右も櫻左も櫻、上も櫻下も櫻の花に埋もれて白一白、落英繽紛として馥に冷たい。

『あゝ綺麗な處だなあ』

から思ふ途端に靜かに／＼馬蹄の音が何處からとなくきこえる。

『ぱか／＼／＼／＼』

煙の如く霞む花の薄絹を透して人馬の行列が見える。錦の御旗、錦の御輿！ 其の前後を護る鎧武者！ さながら錦繪の樣。

行列は花の木の間を縫うて薄絹の中から、そろり〳〵と現れて來る。
『下に坐つて〳〵』
聲が聞えるので側を見ると一人の白髪の老翁が大地に跪いて居る。
『お爺さんこれは何の行列ですか』
かう訊ねるとお爺さんは千三の顔をじつと眺めた、それは紙幣で見た事のある武内宿禰に似た顔であつた。
『あれはな、後村上天皇が今行幸になつた所だ』
『あゝそれぢや此處は？』
『吉野だ』
『どうして此處へいらつしつたのです』
爺さんは千三をじろりと見やつたが其の眼から涙がぼろ〳〵零れた。一圓紙幣が濡れては困ると千三は思つた。
『逆臣尊氏に攻められて、天が下御衣の御袖乾く間も在さぬのぢや』
『それでは……これが……本當の……』

千三は仰天して思はず大地に跪いた。此の時行列が靜々と御通りになる。

『眞先に來た小櫻縅の鎧着て葦毛の馬に乘り、重籐の弓を持つて鷹の切斑の矢を負ひ、鍬形の甲を馬の平首に附けたのはあれは 楠 正行ぢや』

とお爺さんが言つた。

『あゝさうですか、それと並んで紺青の鎧を着て供奉をして居るのはどなたですか』

『あれは正行の從兄弟和田正朝ぢや』

『へえ』

『そら御輿がお通りになる、頭を下げい、あゝお痩せましました事、一天萬乘の御君が戰塵に塗れて山又山、谷又谷、北に南に御さすらひなさる。あゝ恐れ多い事ぢや』

お爺さんは頭を大地に着けて泣いて居る、千三は涙が眼に溜つて玉顏を拜む事が出來なかつた。

『御輿の御後に供奉する人はあれは北畠親房ぢや』

『えつ？』

千三は顏を擧げた。

赤地錦の直垂に緋縅の鎧着て、頭に烏帽子を戴き、弓と矢は從者に持たせ、徒歩にて御輿に從いた



と供奉する三十六七の男、鼻高く眉秀で、眼には誠忠の光を湛へ口元には智勇の色を湛す、威風堂堂として四邊を拂つて見える。

千三は呼吸も出來なかつた。

『何れも皆忠臣の龜鑑、眞の日本男兒ぢや、あゝ此の人達があればこそ日本は萬々歳まで滅びないのだ』

かうお爺さんが言つたかと思ふととつと走つて行く、其の早い事百メートル五秒間位である。

『待つて下さいお爺さん、お紙幣になるには未だ早いから』

かう言つたが聞えない。お爺さんは櫻の中に消えてしまつた。

俄に轟く軍馬の音！　法螺！　陣太鼓！　銅鑼ぶう／＼どん／＼。

向ふの丘に現れた敗軍の大勢！　丸二つ引の旗を翩翻と飜へして落日を後に丘の尖端！　ぬつくと立つた馬上の大將は、これ歴史で見た足利尊氏である。

すはとばかりに正行、正朝、親房の面々屹と御輿を護つて賊軍を睨んだ、其の眼は血走り憎怒の歯嚙み、毛髪悉く逆立つて見える。

『やれ／＼ッ逆賊を叩き殺せ』と千三は叫んだ。

『これ千三、これ』
母の聲に驚いて眼が覺めればこれなん正しく喧嘩の夢であつた。
『どうしたんだい』
『どうもかうもねえや、畜生ツ、足利尊氏の畜生ツ』と千三は未だ夢中である。
『喧嘩の夢でも見たのか、足利の高さんと喧嘩したのかえ』
『何だつて畜生ツ、高慢な面あしやがつて、天子様に指でも指して見ろ、俺が承知しねえ、豆腐屋だと思つて尊氏の畜生馬鹿にするない』
『千三どうしたのさ、千三』
『お母さんですか』
千三はかう言つて初めて吾に返つた。母はじつと千三を見詰めた、千三の顔は次第々々に活き活きと輝いた。
『お母さん、僕は勉強します』
母は默つて居る。
『僕は今日先生に僕の御先祖の事を聞きました。北畠顯家、親房……南朝の忠臣です。其の血を受

けた僕はえらくなれない法がありません』

『だけれどもね、此の通り貧乏ではお前を學校へやる事も出來ずね』

母はほろりとした。

『貧乏でも構ひません。お母さん、顯家、親房はほんの裸身で以て奥州や伊勢や諸所方々で軍を起して負けては逃げ、逃げては又義兵を集め、一日だつて休む暇もなく天子様の爲に働きましたよ、それに比べると日に三度づつ御飯を食べて居る僕なぞは勿體ないと思ひます。ねえお母さん、僕は今夢を見たんです。先祖の親房といふ人は實に立派な顔ですぜ、僕の様にチビではありませんぜ、尊氏を屹と睨んだ顔は體中忠義の炎が燃え上つて居ます、僕だつてね、チビでも忠臣になれない事はないでせう』

『いゝ夢を見たね』

母は病みほゝけた身體を起して佛壇に向つて御辭儀した。

千三は生れ變つた。翌日から何を見ても嬉しい。彼は外を歩きながらそればかりを考へて居る。

『やあ向ふから八百屋の半公が來たな、あれも忠臣にしてやるんだ』俺の旗持位だ、あゝ錻力屋の淺公、あれは母親の財布をごまかして活動にばかり行くが、あれも何かに使へるから忠臣にしてや

る、やあ酒屋のブルドツク、あれは馬の代りにならないから使つてやらない』

默々先生はチビ公が急に活氣付いたのを見てひとりほく／＼喜んで居た。

或日彼は一人の學生を先生に紹介された。それは昨年第一高等學校に入學した安場五郎といふ青年である。默々塾を出て高等學校へ入れたのは安場一人きりである。先生は安場が好であつた。色が赤黒く顔は七輪に似て、羊羹色になつた制服を着て腰に手拭を下げ、帽子は苔色になつて居る。彼は一年の間に身體がめき／＼と發達したので制服の腕や胴は身體の肉がはちきれさうに見える。彼は代書人の息子である。彼は東京から家へ歸ると直ぐ默々先生の御機嫌伺ひに來る。

『先生只今』

『うむ歸つたか』

先生は注意深く彼の一擧一動を見る。

『學校はどうだ』

先づ學校の樣子を訊き、それから友達の事を訊く。

『どんな友達が出來たか』

『鮟鱇といふ奴があります。口が恐しく大きいんで林檎を皮ごと二口で食つてしまひます。それか

らフンプンといふ奴がありますす。これは一年に一ぺんも猿股を洗濯しませんから、いつでもフンプンとして居ます。それから蝮といふ奴、これは生きた蛇を頭から噛ります」
『ふん、勇敢だな』
先生はにこ〳〵する。
『此の三人はみんな出來る奴です。頭が恐しくいゝ奴です、三人とも政治をやると言つてます』
『頼母しいな、君とどうだ』
『僕よりえらい奴です』
『さうか』
先生が一番注意を拂ふのは友達の事である。彼は其の蝮やフンプンや鮟鱇がどんな話をしてどんな遊びをしてどんな本を讀んでるかまで精しく訊いた。
『活動を見るか』
『盛んに見ましたが、あれは非常に下卑たものだと解つたから此の頃は見ません』
『それがいゝ』
先生は安場がいつも友達の自慢をするのを頗る嬉しさうに聞いて居た。人の惡口を言つたり自慢

を言つたりするのは先生の最も好まざる處であつた。
安場は實際先生思ひであつた。彼は歸省中には毎朝必ず先生を訪ねて水を汲み飯を炊き夜の掃除をした。先生は外へ出ると安場の自慢ばかり言ふ。
『彼奴は今に大きなものになる』
先生は僅ばかりの汽車賃があればそつと東京へ出て一高を視察に出掛ける、さうして安場がどんな生活をしてゐるかを人知れず監視するのであつた。其の癖彼は安場に向つては一度もほめた事はない。
『君は英雄を何と思ふか』
『英雄は歴史の花です』と安場は即座に答へる。
『カアライルを眞似てはいかん。英雄は花ぢやない、實である。若し花であるならそれは翩々たる輕薄の徒と言はなきやならん。名譽、物質慾、其等を以て目的とするものは眞の英雄とは言へないぞ、いゝか。英雄は人類の中心點である、さうだ、中心點だ、車の軸だ、國家を支へる大黒柱だ、希臘の神話にアトラス山は天が墜ちるのを支へて居る山としてある。天が墜ちるのを支へるのは英雄だ花だなんてそんな浮はついた考では未だ語るに足らん。もつと修養しろ馬鹿ツ』

凡てかういふ風である、どんなに馬鹿と言はれても安場はそれを喜んで居た。

「先生は有難いな」

彼はいつもかう言つた。彼とチビ公は直ぐ親友になつた。折り／＼二人で郊外へ出て長い／＼堤の上を散歩した。寒い／＼風がひゆう／＼野面を吹く、枯芦はざわ／＼鳴つて雲が低く垂れる、安場は平氣である。彼は高い堤に立つて胸一ぱいに張つて高らかに歌ふ。

嗚呼玉杯に花うけて、緑酒に月の影
やどし、治安の夢に耽りたる、榮華の
巷低く見て、向ケ岡にそゝり立つ、
五寮の健兒意氣高し。………

バリトンの聲であるが、量は豐かに力が滿ちて居る。それは遠くの／＼森に反響し、近くの野面を渡り靄々たる落雲を破つて、天と地との廣大無邊な間隙を一ぱいに顫はす、チビ公は默つてそれを聞いて居ると、體内の血が躍々と跳る樣な氣がする。自由豪放な青春の氣は其の萎れた肉體や、衰へた精神に金蛇銀蛇の赫耀たる光を與へる。

「もつとやつてくれ」と彼は言ふ。

『うむ、よしッ』

安場は七輪の樣な顏をぐつと屹立させると同時に、鼻穴をばつと大きくする、と直ぐ猪の樣に荒い呼吸をぷうと吹く。

芙蓉の雪の精をとり、芳野の花の華
を奪ひ、淸き心の益良男が、劍と筆
とをとり持ちて、一たび起たば何事
か、人生の偉業成らざらん。

唄つて行く中に彼の顏は益々黑く赤らみ、其の眼は輝き、我が校を愛する熱情と、永遠の理想と、現在力學の勇氣と、凡ての高邁な不撓な奮鬪的な氣魄が嵐の如く突出して來る。チビ公は涙を垂れた。

『君はな、貧乏を氣にしちやいかんぞ』と安場は言つた。『貧乏ほど愉快なことはないんだ』

彼はチビ公の傍らに坐つて言續けた。

俺は貧乏だから書物が買へなかつた。俺は雜誌すら讀んだ事はなかつた。すると先生は俺に本を貸してくれた。先生の本は二十年も三十年も前の本だ、先生が俺に貸してくれた本はスミスの代數

とスウヰントンの萬國史と資治通鑑それだけだ、あんな本は東京の古本屋にだつてありやしない。だが新刊の本が買へないから、古い本でもそれを讀むより他に仕樣がなかつた、そこで俺はそれを讀んだ、友達が遊びに來て俺の机の上をジロジロ見る時、俺は恥かしくて本を隱したものだ、太政官印刷なんて本があるんだからな、實際恥かしかつたよ。俺はこんな時代後れの本を讀んでも役に立つまいと思つた、だが、先生が貸してくれた本だから讀まないわけに行かない、それ以外には本がないんだからな、そこで俺は讀んだ。最初は難かしくもあり詰らないと思つたが、段々面白くなつて來た、一日々々と自分が肥つて行く樣な氣がした。俺は入學試驗を受ける時、ほんの十日ばかり先生が準備復習をしてくれた。

『こんな舊式なのでもいゝのか知らん』と俺は思つた。

『大丈夫だ行け』と先生が言つた、俺は行つた、さうしてうまく入學した。

『なあチビ公』

安場は何を思つたか眼に一ぱい涙を湛へた。

試驗の前日、先生は俺にかう言つた。

『安場、腕角力をやらう』

『僕ですか』

『うむ』

先生は鵞鳥の様に首が長く、ひよろ〳〵痩せて、年が老いて居る。俺は此通り力が自慢だ、負かすのは失禮だと思つたが、さりとて故意に負けるとへつらふことになる。互角位にして置かうと思つた。



『やりませう』

先生は長い膝を開いて疊に俯伏しになつた。恰ら榮養不良の蛙の様！

『さあ來い』

『よしツ』

俺も肱を疊に突いた、がつきと手と手を組んだ、俺はいゝ加減にあしらふ積であつた、先生の痩せた長い腕がぶる〳〵顫へた。

『弱虫！　泣虫！　芋虫！　屁放虫！』と先



生は言つた。

『先生こそ弱虫です』

『何を？』

『どつこい』

俺は少しづつ力を出して不動直立の態度を取る積であつた。だが先生の押す力がずつと肱にこたへる。

『弱い奴だ、青年がそれでどうする、米の飯を食はせて置くのは惜しいものだ、やい、芋虫、泣虫、草鞋虫！』

餘りしつこく虫づくしを言ふので俺も一寸癪にさはつた。

『いゝですか、本氣を出しますぞ』

『よしッ、虫螻の本氣はそんなものか、屁放

虫！』

『よしッ』

俺は滿身の力を込めて一氣に先生を押倒さうとした、先生の腕が少し傾いた。

『いゝかな』

先生はかう言つて、『うん』と一つ唸つた、なよ〳〵とした細い腕はがつきと組んだまゝ大磐石！

『おやッ』

俺は頭を疊に擦り付け、左の掌で疊をしつかと抑へ肩先に力をあつめて押し出した。

『蟲が暴れる〳〵』と先生はげら〳〵笑つた。俺はどうも不思議で堪らない、負ける筈がないのだ。

『いゝかな』

先生はかう言つて俺の拳をひた押しに倒してしまつた。俺は汗をびつしよりかいて、ふう〳〵息をはずませた。

『どうだ』

首を傾げて不思議がつてる俺の顔を見て先生は笑つた。

『不思議ですな』

『お前は馬鹿だ』
『何と言はれても仕様がありません』
『いよ〳〵ジヤクチウかな』
『ジヤクチウとは何ですか』
『弱蟲だ、はッ〳〵〳〵』
『先生はどうして強いんですか』
『私が強いんでない、お前がジヤクチウなんだ』
『僕はそんなに弱い筈がないのです』
『お前は何處に力を入れてるか』
『肱です』
『腕を出して見い』
先生のひよろ〳〵した靑ざめた腕と俺のハチ切れさうに肥つた圓い赤い腕が並んだ。
『肱と肱の力なら私の方がとても敵はない筈ぢやないか』と先生が言つた。
『ぢや先生は？』

先生はにつこり笑つて、胸の下を指さした。

『腹ですか』

『うむ、力は凡て腹から出るものだ、西洋人の力は小手先から出る、東洋人の力は腹から出る、日露戰爭に勝つ所以だ』

『うむ』

『學問も腹だ、人生に處する道も腹だ、氣が逆上すると力が逆上して浮き立つ、だから弱くなる、腹をしつかりと落着けると氣が臍下丹田に收まるから精神爽快、力が全身的になる、中心が腹に出來る、いゝかお前は臍を何と思ふか』

『餘計なものだと思ひます』

『それだからいかん、人間の身體の中で一番大切なものは臍だよ』

『併し何の役にも立ちません』

『さうぢやない、今の奴等は臍を輕蔑するから皆輕佻浮薄なのだ、臍は力の中心點だ、人間は凡ての力を臍に集注すれば、どつしりと落着いて威武も屈する能はず富貴も淫する能はず、沈毅、剛勇冷靜、明智になるのだ、孟子の所謂浩然の氣は臍を讃美した言葉だ、臍だ、臍だ、臍だ、お前は試

驗場で頭がぐら〳〵したら懐から手を入れて靜かに臍を撫でろ』

俺は試驗場で臍を撫でなかつたが、難問題にぶつかつた時に先生の此の言葉を思ひ出した、さうして、

『臍だ〳〵』と口の中で言つた、と急にをかしくなつて不思議に氣が靜まる、かつと頭に上せた熱がずんと下つて下腹に力が滿ちて來る。

舊式の本、それを讀んだ事は所謂試驗準備のため印刷された本よりも遙かに有効であつた。

どんな本でも、精しく〳〵幾度も〳〵讀んで研究すれば凡ての學問に應用する事が出來る、數多くの本を、いろ〳〵ざつと見流すよりたつた一冊の本を精讀する方がいゝ。

俺が受驗から歸つて來ると先生は僕を待ちかねて居る、俺は試驗の問題と俺の書いた答案を語る、先生はそれに就いて一々批評してくれた、さうして俺に鷄のすき燒を御馳走してくれる。

『うんと滋養物を食はんといかんぞ』

から先生が言ふ。七日の間に先生が大切に飼つて居た三羽の鷄がみんななくなつた。

『俺は先生の恩は忘れない、若し先生の樣な人が此の世に十人もあつたら、凡ての青年はどんなに幸福だらう、町の奴は……師範學校や中學校の奴等は先生の教授法を舊式だといふ、舊式かも知ら

んが先生は俺の様な詰らない人間でも勵ましたり打つたりして一人前に仕立てゝくれるからね』

安場はかう言つて口をつぐんだ、彼は堪へきれなくなつて泣き出した。

『なあ青木、お前も責任があるぞ、先生がお前を可愛がつてくれる、先生に對してもお前は奮發しろよ』

『やるとも』と千三も無量の感慨に打たれて言つた。

『さあ歸らう』

夕闇が迫る武藏野の枯芦の中を二人は歸る。

花咲き花はうつろひて、露おき露のひるがごと、星霜移り人は去り、舵とる舵手は變るとも、我乘る船は永久に、理想の自治に進むなり、

日はとつぷりと暮れた、安場ははたと歌を止めて振返つた。

『なあおい青木、一緒に進まうな』

『うむ』

互ひの顏が見えなかつた。

『俺も早く其の歌を歌ひたいな』とチビ公は言つた、安場は答へなかつた、さわ／＼と枯草が風に



鳴つた。

「俺の歌よりもなお青木」と安場は言つた「お前の喇叭の方が尊いぞ」

「さうかなあ」

「進軍の喇叭だ」

「うむ」

「勇ましい喇叭だ吹けッ大いに吹け、吹いて吹いて吹きま

くれ」

ひゆう／＼風が吹くので聲が散つてしまつた。

幸福の神は何時までも青木一家に澁い顔を見せなかつた、伯父さんとチビ公の勉強に依つて一家は次第に恢復した。チビ公の母は病氣が癒つてから店の隅に僅ばかりの雜穀を並べた、默々先生は眞先になつて知人朋友を勸誘したので、雜穀は見る／＼賣れ出した。生蕃親子が此の地を去つてから最早チビ公を迫害するものはない、店は益々繁昌し、大した收入がなくとも不自由なく暮せる樣になつた。

安場は日曜ごとに浦和へ來た、さうして千三に捕球を教へたりした、元來默々塾に通學するものは凡て貧乏人の子で、丁稚小僧工場通ひの息子、中には大工や左官の内弟子もあつた。彼等はみんな仲好であつた、ハイカラな制服制帽を着る事が出來ぬので、大抵和服に袴を穿いて居た。

チビ公は日曜ごとには朝から晩まで遊ぶ事が出來る樣になつた、塾の生徒は師範學校や中學の生徒の樣に費用に飽かして遠足したり活動を見に行く事が出來ないのでいつも塾の前の廣場でランニング高跳などをして遊んで居た。それが安場が來てから捕球がはやり出した、安場は東京の友達から立派なミットを貰つて來てくれた、チビ公は光一の處へグローブの古い奴を貰ひに行つた。

『あるよ、いくらでもあるよ』
光一は古いグローブ二つと新らしいグローブ一つとを出してくれた。
『こんなに貰つてもいゝんですか』と千三は言つた。
『僕は買つて貰ふからいゝよ』と光一は言つた。
『これは新しいんですね』
『心配するなよ』
グローブ三つに球二つ、それを貰つて千三は塾へ行つた時一同は萬歳を唱へた、勉強は出來なくとも貧乏人の子はスポーツがうまい、一同は段々上達した。
或時千三が豆腐を賣り廻つてると道で光一に逢つた。
『おいボールがうまくなつたさうだね』
光一は例の如く上品な眼に笑を湛へて言つた。
『少しうまくなりました』
光一は妙に沈んだ顔をして千三の眼を見詰めた。
『君、頼むからね、僕に向つて丁寧な言葉を使つてくれるなよ、ね、君は豆腐屋の子、僕は雜貨屋

の子、同じ商人の子ぢやないか、ねえ君、君も僕も同じ小學校に居つた時の樣に對等の友達として交はりたいんだ、君も學生だからね』

『あゝ』

今に始めぬ光一の立派な態度に、千三はひどく感激した。

『それからね、君、君の塾と僕の學校と試合をやらないか』

『あゝ、だけれども弱いから』

『弱くてもいゝよ、お互に練習だからね』

『相談して見よう』

『君は何をやつてるか』

『僕はショートだ』

『それがいゝ、君は頭がよくて敏捷だから』

『君は』

『僕は今度から投手をやつてるんだよ』

『素的だね』

「なか〳〵まづいんだよ、手塚はショートだ、彼奴なか〳〵うまいよ」

其夜千三は塾で一同に相談した。

「やらう〳〵」と言ふものがある。

「とても敵はない」と言ふものもある。議論はいろ〳〵に分れたが結局安場に來て貰つて決める事になつた。

安場は翌日やつて來た。

「やれ〳〵、大いにやれ、親から金を貰つて洋服を着て學問する奴に強い奴があるものか、我が塾の威風を示すのは此時だ」

一同は直ぐ決心した、毎夜課業が濟むとこそ〳〵其の事ばかりを語り合つた、だが悲しい事には貧乏人の子である、マークの付いた帽子や、ユニフオームを買ふ事は出來ない、況んやスパイクの付いた靴、プロテクター、脛當に於てをやである。

「錢が欲しいなあ」と一同は言つた、此の話がいつしか黙々先生に漏れた、先生は早速一同を集めた。

「遊戯は精神の修養を以て主とするもので形式を主とするものでない、みんな裸でやるたら許す、

俺はバットを作つてやる、裸が寒いなら襯衣に猿股、それでいゝ、それが當塾の塾風である』

『先生の言ふ通りにします』と一同は言つた。

翌日先生は庭先に出て大きな鉞で樫の丸太を割つて居た。

『先生何をなさるんですか』と、チビ公が訊いた。

『バットを作つてやるんだ』

放課後も先生は鋸やら鉋やらでバット製作に取掛つた。と仕立屋の小僧で呉田といふのが、襤褸切を幾重にも縫ひ合せて捕手のプロテクターを作つた。すると古道具屋の子は撃劍の鐵面でマスクを作つた。道具は一通り揃つた。安場が日曜に來て各シートを決めた、安場は東京からの汽車賃を倹約するためにいつも五里の道を歩いて來るのである。

投手は馬夫の子で松下といふのである、彼は十六であるが十九位の身長があつた。幼さい時に火傷をしたので頭に大きな痕がある、皆なそれを綽名して五大洲と稱した。彼の球は恐しく速かつた。

捕手は「クラモウ」といふ綽名で左官の子である、何故クラモウといふかといふに、いつも默つてものを言はないのは暗がりの牛の樣だからである、身體は横に肥つて蟹の樣に股が開いて居る。

一壘手は旗竿と稱せられる細長い大工の子で、二壘手は「雀」といふ綽名で駄菓子屋の子である、

雀はボールは上手でないが講釋がなか／＼うまい、彼は安場がコーチの横合から口を出していつも安場に叱られた。

三壘手にはどんな球でも必ず止める橋本といふのがある、彼は恐ろしい勢で一直線に飛んで來た球を鼻で止めたので後にびつくり返つた。それから彼を橋本と呼ばずに鼻木とよんだ。

外野にもなか／＼勇敢な少年があつた、ショートはチビ公であつた、チビ公は身丈が低いが非常に敏捷であつた、彼は球を捕るには一種の天才であつた、彼は僅ばかりの練習でゴロにいろ／＼なものがある事を感じた、大きく波を打つて來るもの、小さく刻んで來るもの、球の廻轉なしに眞直にすうと地を擦つて來るもの、左に旋回するもの、右に旋回するもの、約十種ばかりの性質に依つて握り方を變へなければならぬ。チビ公は無意識ながらもそれを感じた。

一生懸命に汗を流して削り上げた先生のバットは餘り感心したものでなかつた。それは粗削りの疣だらけで途中に節があるものであつた。

『なんだこれは』

『擂粉木の樣だ』

『犬殺しの棒だ』

『いやだな、お前が使へよ』
『俺もいやだ』
少年共はてんでに尻込みをした。さりとてこれを使はねば先生の機嫌が悪い。一同は途方に暮れた。
『僕のにする』とチビ公は言つた『此のバットには先生が僕等を愛する慈愛の魂が籠つてる、僕は必ずこれでホームランを打つて見せるよ、僕が打つんぢやない先生が打つんだ』

九

浦和中學と默々塾が野球の試合をやるといふ噂が町内に傳はつた時人々は冷笑した。
『勝負になりやしないよ』
實際其は至當な評である、浦和中學は師範學校と戰つていつも優勝し、其の實力は埼玉縣を壓倒して居るのだ、昨日今日やうやく野球を始めた默々塾などはとても敵し得べき筈がない。それに浦中の捕手は沈毅を以て名ある小原である、投手の柳は新米だが其の變化に富める球と頭腦の明徹はやくも專門家に囑目されて居る、其の上に手塚のショートも實際うまいものであつた、彼はスタ

ートが機敏で、跳躍して片手で高い球を取る事が最も得意であつた。

「練習しようね」と柳は一同に言つた。

「練習なんかしなくてもいゝよ、默兵衛の奴等は相手にならんよ」と手塚が言つた。

「さうだ〳〵」と一同は賛成した。だが二三日經つてから小原が顏色を變へて一同を召集した。

「僕は昨日默々の練習を見たがね、火の出る樣な猛練習だ、それに投手の五大洲は速力のある球を出す、あの上に若しカーブが出たら誰も打てやしまい、ショートのチビ公も中々うまいし、捕手のクラモウはロングヒットを打つ、なか〳〵油斷が出來ないよ、一體今度の試合は敵に三分の利があり味方に三分の損がある、敵は新米だから負けても左まで恥にならないが、味方は古い歴史を持つて居るから、若し負ければ世間の物笑になるよ」

「あんな奴は大丈夫だよ」と手塚は言つた。

「さうぢやない、若し一人でも傑出した打手があつてホームランを三本打てば三點取られるからね、勝負は其の時の拍子だ、強いからつて油斷がならない」

「だから僕は練習をしようと言ふんだ、青木千三は小學校時代には實にうまかつたからね、身體が小さいが恐ろしいのは彼だよ」

と光一は言つた。

『豆腐屋の如きは眼中にないね』と手塚が言つた。

『それがいけないよ手塚君、君はうまいけれども敵を侮るのは悪い癖だ、僕は青木の方が僕よりうまいと思ふ』

『君は青木を買被つてるよ、彼奴は未だ腰が決まらない』

『いざとなれば強くなるよ』

『弱蟲だね君は』と手塚は嘲笑した。

『君よりか青木の方がうまい』と光一も癪にさはつて言つた。

『あんな奴に比べられて堪るものか』

多人數の前なので手塚は虚勢を張つて言つた。

『さうぢやない手塚』と小原は怒鳴つた『お前はいつもうまいと人に見られようと思つて、片手で球をとつたりする、あれはよくないぞ、下手に見られてもいゝから健實でなけりやいけない』

先輩の一言に手塚は顏を赤めて默つた。其の日から練習を始めた。

一方默々塾では學業のひま〳〵に猛練習を續けた。だが家業が忙がしいために練習に來る事の出

來ない者もあるので、人數はいつも揃はなかつた、安場は日曜以外には歸省しない、此に於て漸々く先生が自身に空地へ出張した、先生は野球の事をよくは知らない、が彼は撃劍の達人なので打撃はうまかつた、彼は猿股一つと襯衣一枚の姿で、自製のバットでノックをする、其れは實に奇妙不思議なノックであつた、先生の打つ球には方向が一定しない、三壘へ行つたり一壘へ行つたり、ゴロかと思へば外野へ飛んだり、フアールになつたり、ホームランになつたりする。

『先生！　シートノックはシートの方へ打つて下さい』と千三が歎願した。

『馬鹿ツ、方向がきまつてるなら誰でもとれる、敵は何處へ打つか解りやしないぢやないか』

先生はかう言つて長いバットを持つて力のありたけで打つのだから堪らない、鐵砲玉の樣な恐しく早い球はぶん／＼唸つて飛んで來る、選手はいづれも汗だらけになつて走り廻る。其れが終るとフリーバッテングをやる、それも投球するものは先生である。先生の球はノックの如くコントロールが悪い、右に左に頭上高く、或は足元にバウンドし、或は腰骨を打つ。

『先生！　眞直な球を下さい』と千三が言ふ。

『馬鹿ツ敵はいつも眞直に投るかよ』

それが終ると先生は千三に投球させて自分で五六本を打つ。だが先生の造つたバットは瘤々たら

けなので、打つた球は皆なファールになり、チツプになる。で先生が滿足に打つまで球を投らなければ機嫌が惡い、やうやく直球を一本打つと先生はにつこりと子供らしく笑ふ、さうしてから言ふ。

『俺の造つたバツトはなか〳〵いゝわい』

練習が濟むと先生は一同に芋を煮てくれる、それが何よりの樂みであつた。だが先生は野球のために決して學課を疎かにしなかつた、若し生徒の中に學課を忘る者があると先生は嚴然として一同を叱り付ける。

『野球を止めてしまへツ』

此のために生徒は一層學課に勵まざるを得なかつた。

日が段々迫つて來た、或日安場が來た、コーチが濟んで一同が去つた後、先生はいかにも心配さうに安場に言つた。

『今度中學校に勝てるだらうか』

『さあ』と安場は躊躇した。

『どうかして勝たして貰ひたい、私が生徒に野球を許したのは少し考があつての事だ、此の町の者は官學を尊敬して私學を輕蔑する、いゝか、中學校や師範學校の生徒は威張るが、默々塾の生徒

は小さくなつて居る、なあ安場、君も覺えがあるだらう』
『さうです、僕も隨分中學校の奴等に馬鹿にされました』
『さうだ、金があつて時間があつて學問するものは幸福だ、私の塾の生徒はみんな不幸な奴ばかりだ、同じ土地に生れ同じ年頃でありながら、只、金のために甲は意氣揚々とし乙は悄然とする、こんな不公平な話はないのだ、いゝか安場、そこでだ、私は生徒共の肩身を廣くさしてやりたい、金づくでは敵はない、彼等の學校は洋風の堂々たるものだ、私の塾は壁が落ち屋根が漏り疊がぼろぼろだ、生徒は町を歩くにいつも小さくなつてしよぼ〳〵して居る、だからせめて野球でもいゝから一遍勝たしてやりたい、實力のあるものは貧富に拘はらず優勝者になれるものだといふ事を知らしめたい、師範生も中學生も默々生も同等のものであると思はせたい、大手を振つて町を歩く氣にならせたい、だからどうしても今度は勝たねばならん、私も此の年になつて、何を苦んで素裸になつて空地でバットを振り生徒等を相手に遊んで居たからう、生徒の自尊心を養成したいためだ、さうして一方に於て町の人々や官學崇拜者を見返してやりたいためだ、野球の勝敗は一小事だが、此處で敗ければ私の生徒は益々自尊心を失ひ肩身を小さくする、實に一大事件だ、なあ安場、今度こそはだ、なあおい、しつかりやつてくれ』

先生の聲は次第に涙を帶びて來た。

『先生！』

安場は燃ゆる樣な眼を先生に向けて言つた。

『僕もさう思つてます、僕は必ず勝たして御覽に入れます』

安場は翌日規則正しい練習をした、一回二回三回一同は夜色が迫るまで續けた。愈々明日になつた土曜日の早朝から一同が集まつた。

『今日は休むよ』と安場は言つた。

『明日が試合ですから、是非今日一日みつちりと練習して下さい』

と一同が言つた。

『いや／＼』と安場は頭を振つた。

『今日はゆつくり遊んで晩には早く寢る事にしよう、いゝか、熟睡するんだぞ、一人でも夜更かしを



すると明日は負けるぞ」

　其の日は一日遊んで安場は東京に於ける野球界の話を聞かしてくれた、彼は一高と三高の試合の光景などを面白く語つた。一同はすつかり興奮して眼に涙を湛へ、眞赤な顏をして聞いて居た。

　其の夜千三は明日の商賣の仕度を終つてから窓から外を見やつた外は暗いが空は名殘なく晴れて星は豆を蒔いた樣に輝いて居た、千三は明日の好天氣を豫想して靜かに眠つた。

　眼が覺めると、もう朝日が一ぱ



いに窓から射し込んで雀の聲々が樂しさうに聞える。
『やあ寢過した』と千三は慌てゝ飛起きた。
『もつと寢てゝもいゝよ』と伯父さんはにこ〳〵して店から聲を掛けた、彼はもう豆腐を桶に移して草鞋を穿いて居る。
『伯父さん、僕が商賣に出ますから伯父さんは休んで下さい』と千三は言つた。
『今日は日曜だからお前は休め、お前は今日大事な戰爭に行かなきやならないぢやないか』
『野球は午後ですから、朝だけ僕は賣りに出ます』
『いや構はない、俺もおひるからは見物に行くぞ、しつかりやつてくれ』
『有難う伯父さん、それぢや今日は休まして貰ひます』
『うむ、うまくやれよ、金持の學校に負けちや貧乏人の顏にかゝはらあ』
伯父さんはかう言つて喇叭をぷうと鳴らして出て行つた。千三は井戸端へ出て胸一ぱいに新鮮な空氣を呼吸した、それから彼は素裸になつて十杯の釣瓶水を浴びて身を潔めた。
『どうぞ神樣、僕の塾を護つて下さい』
じつと眼を閉ぢて祈念すると不思議にも勇氣が次第に全身に充滿する。朝飯を濟まして塾へ行く

と安場が既に来て居た。一分時の違ひもなく全員が打揃うた。そこで先生が先頭になつて諏訪神社へ参詣する、それから例の空地へ出て猛烈な練習を始めた。

春も既に三月の半である、木々の梢には若やかな緑が吹き出して、櫻の蕾が蝶を誘る晴天に向つて薄紅の爪先を揃へて居る。向ふの並木は朝日に照されて其の影を長く〳〵と畠路の上に映して居ると、其處には鶏や雀などが嬉しさうに飛び廻る。

昨夜熟睡したのと、昨日一日練習を休んだために一同の元氣は素晴らしいものであつた、空腹はすつかり恢復した。

『この調子では必ず勝つぞ』

一同は練習を終つて汗を拭いた。

『集まれい』と先生は號令を掛けた、一同は集まつた。

『みんな裸になれ』

一同は裸になつた。

『臍を出せい、おい』

一同は笑つた、併し先生はにこりともしなかつた。一同は神妙に褌を下げて臍を出した。先生は

第一番の五大洲（投手）の臍の處を押して見た。

『おい、君は下腹に力がないぞ、胸の處を凹まして下腹を膨らます樣にせい』

『はい』

先生は次のクラモウの臍を押した。

『おい、大きな臍だなあ』

『僕は今力を入れて突出してるのです』

『いかん、臍の處を突出すのぢやない、臍の下へ食べたものを皆な下げてやるんだ、いゝか、胸がせか／＼して負けまい／＼と焦れば焦る程下腹が凹んで、肩先に力が入り頭がのぼせるんだ、味方が負け色になつたら皆な臍に氣を落着けろ、いゝか、忘れるな、默々塾は一名臍學校だぞ、さう思へ』

先生は一人々々に臍を押して見た。

『餘り押すと先生、小便が漏ります』と二壘手の雀が言つた。そこで先生も笑つた。

其の日の試合は製粉會社の裏の廣場でやる事になつた、中學の運動場は修繕のために使用が出來なかつた、朝からの快晴で且日曜であるために見物人はどし／＼出掛けた。豆腐屋の覺平は早く商

賣をしまつて肩に喇叭を掛けたまゝ出掛けた、見ると正面に大きな網を張り、白い線を大地に引いて、三ヶ所に大きな枕の様なものを置いてある、二本の長い線の兩端に見物人が陣取つて居るが、草の上に新聞紙を敷いて坐つてるのもあり、又莚や腰掛を持出したのもあつた。覺平はかくまで野球が人氣を惹くとは思ひも寄らなかつた、彼は野球とはどんな事をするものか知らなかつた。彼は豆腐桶を擔つて町を歩く時、折り／＼子供等に球を頭に當てられたり背骨を打たれたりするので寧ろ野球に對して反感をいだいて居た。

「擂粉木を振廻すなんて詰らねえまねをするもんだ」

から彼はいつも言つた、だが今來て見ると子供等ばかりでなく、勞働者も商人も紳士も役人も集まつて居る。

「大變な事になつたものだ」

彼は肝を潰してまご／＼して居ると後から聲を掛けたものがある。

「覺平さん」

振返るとそれは八百屋の善兵衛であつた、善兵衛は何よりも野球が好きであつた、野球が好きだといふよりも、野球を見ながらちびり／＼と二合の酒を飲むのが好きなのである、彼も餘り野球の

知識はない方だが、それでも覺平よりは凡てを知つて居た。

『やあお前さんも來てるね』と覺平が言つた。

『俺あハア三度の御飯を四度食べても野球は見たい方で』と善兵衛が言つた。

『俺にや解らねえ』と覺平が言つた。

『ぢや俺あ教へてやるべえ』と善兵衛は言つた。

『處で一杯どうです』

『これは〳〵』

二人は一つの盃を獻酬した。善兵衛はいろ〳〵野球の方法を話したが覺平には矢張り解らなかつた。

『詰り球を打つてとれない處へ飛ばしてやればいゝんです』

『なる程ね』

二人が草に坐つて且飮み且語つてる中に見物人は刻々に加はつた。中學の生徒は制服制帽整然と打揃うて一壘側に並んだ。其の背後には中學贔負の大人連が陣取つて居る、其中に光一の伯父さん總兵衛が其の肥つた胸を擴げて汗を拭き〳〵盛んに應援者を狩り集めて居た、彼は甥の光一を勝た

せたい爲に商賣を休んでやつて來たのである

此の日師範學校の生徒は默々塾に應援する積であつた、師範と中學とは犬と猿の如く仲が惡い、だが此の應



援は中止になつた、いかんとなれば審判者は師範の選手が頼まれたからである、で師範は中立隊として正面に陣取つた。

『早く始めろ』

『何をぐづ〳〵してるんだ』

氣の短い連中は聲々に叫んだ、此の溢るゝ如き群集を分けて浦和中學の選手が英氣颯爽として場内に現はれた、揃ひの帽子ユニフオーム、靴下は黑と白の二段抜き、靴のスパイクは日に輝き、胸のマーク横文字の urachu はいかにも名を重んずる若き武士の如く見えた。

見物人は拍手喝采した、脛當とプロテクターを着けた肩幅の廣い小原はマスクを腋に挾み、ミツトを提げて先頭に立つた、それに續いて眉目秀麗の柳光一、敏捷らしい手塚、其他が一糸紊れず靜かに歩を運んで來る。

『バンザアイ、浦中萬歳』

總兵衞は有りつたけの聲で叫んだ。浦中應援隊は應援歌を歌つた、手に手に持つた赤い旗は波の如く一起一伏して聲調律呂はきちん〳〵と揃ふ。

選手は入場するや否や直ぐ捕球を始めた、それが濟むと、一同さつと散つて銘々のシート〳〵

に走つた。やがてノツクが始まつた。ノツカアは慶應の選手であつた山田といふ青年である。正確なノツクは士氣を一層緊張させた、三壘から一壘までノツクして外野に及び又内野に及ぶまで一人の過失もなかつた、次第に興奮し來る技術の早業は其の花やかな服裝と、いかにも得意然たる顏色と共に見物人を壓倒した、ダブルプレー、トリプルプレー、其の中に手塚の出來榮は別して素晴らしかつた、彼はどんなゴロでも完全に摑んだ、彼は頭上高き球をジヤンプしてとつた、左側に打たれた難球を轉んで摑んだ、摑むや否や二壘に送つた。其の機敏さ、洒脱さは恰ら輕業師の如く見物人を醉はした。

『手塚！　手塚！』

の聲が鳴り渡つた。丁度其の時默々塾の一隊が入場した。

見物人は立上つて其の方を見やつた、同時に『わあツ』といふ笑聲が一度に起つた。

『來た〳〵〳〵』

見よ！　默々塾の一隊！　それはマークの着いた帽子もなく揃ひのユニフオームもない、彼等は一様に手拭で鉢卷をして居た、彼等の着た襯衣にはメリヤスもあれば鼠色に古びたフランネルもあり、腕のない襦袢もあつた、彼等は大抵猿股の上に兵子帶をきり〳〵と卷き、結び玉を後へ垂れて

居た、彼等の穿いてるのは車夫のゴム足袋もあれば兵隊の古靴もある。九人は悉く異つた服裝、其の先頭にコーチャーの安場は七輪の樣な黑い顏をして苔色になつた一高の制服制帽で堂々と步いて來る。

　何れを見てもそれはいかにも慘めな一隊であつた、彼の花やかな浦中と對照してこれは何といふ汚ならしい選手達だらう、見物人は戰はぬ中に勝敗を知つた。

『駄目だよ、つまらない』

もう見限りを付けて歸つたものもある。一同は肩馴らしをやつた上で、さつとシートに着いた。

安場は上衣を脫いでノツクした。それは何といふ事だらう。

元來晴の戰場に於けるノツクには一種の秘訣がある、それは難球を打つてやらぬ事である、誰でも取れる樣な球を打つてやれば過失がない、過失がなければ氣が落着く、特に試合に慣れぬチームに對してはノツカアは餘程寬大に手心せねば徒らに選手をあがらしてしまふ恐がある。

　何を思つたか安場のノツクは峻辣を極めたものであつた、難球又難球！　第一番に三壘手がミスする、次でシヨウトの靑木、これも見事にミスする、やり直す、又ミスする、三度、四度！　千三は次第に胸が鼓動した、見物人は口々に罵る。

『やあい、豆腐屋、駄目だぞ』

嘲笑罵詈を聞く度に千三は頭に血が逆上して眼がくらみさうになつて来た。彼が血眼になればなる程、球場のノックが猛烈になる。やつと球を摑んだかと思ふと一塁へ三尺も高い球を投り付ける。見物人は益々笑ふ。

散々な悪罵の中にノックは終つた。千三は幾度も〳〵躓つたので身体は泥だらけになつた、其の他の人々も同様であつた。

軈て審判者が厳かに宣告した。

『プレーボール！』

浦中は先攻である。黙々の投手五大洲は初めて真中に立つた、彼は十六歳ではあるが身長五尺二寸、投手としては申分なき體格である、彼は手製の襯衣を着て居た、それは白木綿で襟が垂らしてくれたのだが、彼は其の胸の處に墨黑々と片假名で「モクモク」と右から左に書いた。彼がこれを着た時、雀がそれだけは止してくれと言つた、彼は頑としてきかない。

「俺は日本人だから日本の文字の標を書くんだ、毛唐の眞似になんか死んでもしやしないよ」

これを聞いて黙々先生は感歎した。

『松下！　お前は今にえらいものになるよ』

見物人は今彼の胸の片假名を見て一度にどつと笑つた。

『やあい、モグ〳〵』

『モグネンジンやあい』

『砂もぐりやあい』

『モグ兵衛やあい』

だが彼は少しも怯まなかつた、彼の鐵砲の如き速球は瞬く間に二人を三振せしめた、次は柳光一である。光一はボックスに立つて屹と投手を見やつた、彼は速球に對して確信がある。千三は小學校にありし時光一の癖をよく知つて居る、彼は光一が必ず自分の方へ打つだらうと思つた。

『打たしてもいゝよ』と千三は五大洲に言つた。

『よしッ』

五大洲は眞直な球を出した。戛然と音がした、見物人はひやりとした、球は果して千三に向つた

千三は早くも右の方へ寄つた。

『しめたッ』

と思ふ間もなく彼は足を滑らした、鴻巣の眼が眩つた、球は一直線に中堅の方へ轉がつた。千三の眼から涙がこぼれた。光一は早くも二塁に走つた。

次の打手は敵の大將小原である。ホームランか三塁か、何れにしても一點は取るだらうと人々は思つた、投手五大洲はじつと腕を拱んで捕手のサインを見やつた。第一球は高目の曲球であつた。五大洲は其通りに球を投げた。小原はボールを取るだらうと思ひの外、彼は跳り上つてそれを打つた、球はショートの頭を遥かに高く飛んだ、千三はうしろに走つた、と球は伸びるかと思ひの外、途中で切れて逆落しに落ちた、ハツと思ふ間もない、光一は疾風の如く本塁を襲うた、千三は慌ててホームに投げた、球は高くネツトを打つた。

次の打者の三振で僅かに食ひ止めたもの〻、第一回に於て默々は一點を負けた。千三は顏を擧げる事が出來なかつた、彼は泣くにも泣けなかつた。

ぼんやりベンチへ歸ると安場はにこ〳〵して居た。

「おい、大丈夫今日の試合は此方のものだぞ」

「僕は駄目だ」と千三が言つた。

「いやなか〳〵い〻、素的にい〻」と安場は言つた。

柳がダイヤモンドに立つた時群集は一度に喝采した。實際柳の風采、其の鷹揚な態度は既に觀衆を醉はした、其に對して小原の剛健沈毅な氣宇、二人の對照は堪らなく美しい。

「柳！」



『小原！』

此の聲と共に學校の應援隊が轟いた。默々の第一打者は五大洲である彼はかん／＼に怒つて居た。彼は頭の鉢卷をかなぐり捨てた時、其の斑々たる火傷の痕が現れたので見物人は交々喝采した。

御は靜かに敵の姿勢を見やつた、さうして美しいボディスキングを起した、のび／＼とした四肢や胴體の鮮やかさ、恰ら雲に見るが樣、球が手を離れた。五大洲がバットを振つたかと見ると球は左翼の頭上遙かに飛んだ、外野手は走つた、內野手も走つた、陣營騷然と亂れた、小原は呆氣に取られてマスクを脫ぎ捨てたまゝ本壘に立つて居る。

『ホームイン』

五大洲の一擊で一點を恢復した。此の時三壘の背後の松の枝高く喇叭の音が聞えた。次で氣違じみた聲！

『もぐ／＼萬歲！　もぐ／＼勝つたぞ』

『ぷう／＼ぽう／＼ぷう』

喇叭は千三の伯父覺平で、叫んでるのは善兵衛である。

此の聲援と共にこゝに驚くべき聲援者が現はれた、それは製粉會社の職工四五十名と、木村會社

其の他の勞働者、百姓、人足、馬夫！　あらゆる貧民階級が一度にどつと鬨の聲を擧げた。

『もぐ〳〵勝つた〳〵』

これに對して善兵衛は初めは羽織を脱ぎ次は肌拔ぎになり終りに素裸になつて跳り出した。

『フレー、フレー、浦中！』

野球場は見物人と見物人との應援戰となつた。

回が進んだ、一勝一敗が二勝二敗となり、五回六回に及んだ時浦中は五點、默々は三點になつた。二點の相違！　此の儘で押通すであらうか。千三は回毎にミスをした、しかも彼は三振二つ、ピーゴロ一つを打つただけである。彼は隅に小さくなつて涙ぐんで居た。覺平はもう松の枝に乘りながら喇叭を吹く勇氣もなくなつた。

『勝てないかなあ』と彼は善兵衛に言つた。

『勝てさうもないなあ』と善兵衛が言つた。凡ての應援者も力が拔けてしまつた。實際御の成績は驚くべきものであつた、彼の球は速力に於て五大湖に劣つて居るが、其の縱横自在な正奇の球は回が重なるに從つて熱氣を帶びて來た、どうかして彼が敵に打たれ込む時には小原がマスクを脱いでダイヤモンドへ進んで來る、さうしてから言ふ。

『おい、俺の鼻穴に何か入つてないか見てくれ』
『何もないよ』と柳は小原の鼻を見て言ふ。
『さうか、蟹が一匹入つてる樣な氣がするよ』
『そんな事があるもんか』と柳は笑ひ出す。
其れを見て小原は又言ふ。
『五大洲の頭に蟹を這はせてやらうか』
『なぜだ』
『天下横行だ』
『はツ〳〵〳〵』
これで柳の氣がしつかりと落着くのである、柳は小原の老巧に感謝するのはいつもかういふ點にある。
柳ばかりでない、手塚もいろ〳〵な快技曲技をやつて見物人を醉はした、彼は最も得意であつた、快技をやる度に見物人の方を見やつて微笑した、時には帽子を脱いで應援者に御辭儀をした。
千三は暗い〳〵氣分に壓されて默つて居た。彼は此の儘此の場を逃げ出したいと思つた。と安場

がにこ〳〵して來た。

『そろ〳〵いゝ時分だよ』

『何が?』

『ラッキーセブンだ』

『僕にラッキーは無い、駄目だ』

『馬鹿言へ、君は確かに勝てるのに勝たずに居るんだ』

『どうして?』

『君は大事な事を忘れてる』

『何を? 大事な事を?』

『うむ、先生に教はつた事を』

千三はじつと考へた。

『あッ、臍か』

『人間が臍を忘れたら、もうおしまひだ』

『さうか、うむ、あゝ臍だ、はッ〳〵〳〵』

と千三は笑つた。
『解つたか』
安場はぐつと千三の肩を押した。不思議に千三は頭がすッと軽くなつた、胸に痞へたもや／＼したものが煙の如く消えて、どつしりと腹の底に重みが出来た。
『見ろ！ あの手塚て奴は今に大変なミスをやるぞ、見物人に責められる事ばかりを考へてるからね』
『やる！ 乾度やる』と千三は言つた。此の時五大洲は安打して一塁を取つた、次のタッセツはバウンドした、手塚はそれを取つて二塁へ投げようか一塁へ投げようかと躊躇してる中に双方を生かしてしまつた。三番は千三である。
『ぶう／＼ぼう／＼』と喇叭が鳴つた。
『青木！ 青木！ フレイ／＼』と吾兵衛が怒鳴る。
『豆腐屋ア』と敵方がひやかす。
千三はボックスに立つ前にバットを一振り振つた、それは先生の手製の瘤だらけのバットである。彼は血眼になつて光一を睨んだ。今まで彼は光一を見る時一種の畏敬を感じたのであつた、故

は我が伯父が入獄中に受けた柳家の高恩を思ひ、我が貧を憐れんで學資を出してやらうとした光一の友情を思ふと、彼の球を打つ氣合が拔けてどうする事も出來ないのであつた。

今彼は臍下に氣を沈め、先生のバットを提げて立つた時、初めて野球の意義が解つた。

私情は私情である、恩義は恩義である、だが野球は先生及び全校の名譽を荷うて戰ふのである、私情を離れて公々然と戰つてこそそれが本當の野球精神である、此のバットは先生を代表したものである、僕が打つのでない、先生が打つのだ。

から思つて光一の顏を見やると光一は微笑して居る、其の男らしい口元、上品な眼の中にはから言つてるかの如く見える。

『お互ひに全力を盡して技術を戰はさうぢやないか、負けても勝つてもいゝ、敵となり味方となつても善く戰つてこそお互の本望だ』

千三は堪らなく嬉しくなつた、彼はボックスに立つた。それを見て光一は思つた。

『可哀さうに靑木は今日は馬鹿に悄氣返つて居る、一本位は打たしてやりたいな』

だが彼は直ぐに考へ直した。

『いや〳〵、僕のお情の球を打つて喜ぶ靑木ではない、そんな事は却つて靑木を侮辱し且學校と野

球道を信條するものだ」
實際敵の走者が第一第二壘にある、少しも油斷のならぬ場合である、彼は捕手のサインを見た、小原は既に青木を偵つて居る、彼は第一にウエストボールをサインした、第二も同……第三には直球である。それは青木の豫想する處であつた。
彼は光一の球が燦然たる光を放つて我が思ふ壺を眞直に來たと思つた、彼は八分の力を以て撲つた。
わつといふ喊聲と共に千三は球が確かに手塚に取られたと思つた、と球は手塚の靴先にバウンドした、手塚はダブルプレーを食はして喝采を博さうと焦つたのでスタートを誤つたのである、彼はバウンドした球を掴まうとしてグローブの上で跳ね返した、再び拾はうとした時二壘手と衝突して倒れた。彼は起上つたが慌てたために球が見えなかつた、球は彼の靴の踵の處にあつたのである。
「ボールが／＼」と彼は悲鳴を擧げた。中堅手がそれを拾うてホームへ投げた、が此の時は既に晩かつた、五大洲とクラモウは長驅してホームへ入り、千三は三壘に滑り込んだ。
「バンザアイ」
天地を撼がすばかりに群集は叫んだ、此の叫びが終らぬ中に直ぐに不思議な喝采が起つた。

松の枝に乘つて居た覺平と善兵衞はバンザイを叫んだ拍子に兩手を擧げたので、松の上から轉がり落ちたのであつた。落ちたまゝ覺平は喇叭を吹く事を止めなかつた。

『ぷうぷうぽうぽう』

『バンザァイ』

かうなつて來ると默々隊は急に活氣づいて來た。一壘手の旗竿は二壘打を打つて千三が本壘に入つた。次の雀はバウンドを打つて旗竿を三壘に進めた。

默々は一點を勝ち越した。と次には安場の作戰が奇功を奏しスクヰーズプレーで又一點を取つた。

浦中は必死になつた、小原、柳は死物狂に戰つた、が千三の快技はあらゆる難球を食ひ止めた、

彼はしつかりと腹を落着けた、彼の頭は透明で氣が朗らかであつた。

七――五

默々は勝つた、波濤の如き喝采が起つた、中立を標榜して居た師範生は悉く默々の味方となつた。

安場が先頭になつて一同は中學の門前で凱歌を擧げた、さうして町を練り歩いた。町々では手桶に水を汲んで接待したのもあつた。善兵衞は自分の店の蜜柑を殘らず舁ぎ込んで蜜柑を撒きながら選手の後について行つた。一同は喜び勇んで塾へ歸つた。彼等は塾の前でみんな襯衣を脫ぎ、臍をだ

して門内へ入つた。

先生は一張羅の羽織と袴を着けて出迎へた。

『勝ちました』と安場が言つた。

『それは最初から解つてる』と先生が言つた、さうして『ボールをやると同じ氣持で學問をすれば天下の大選手になれる』と、附加へた。

## 一〇

拙の秘傳を覺えてから千三はめき／＼と腕が上達した。浦中と默々は復讐戰をやる、其の次には決勝をやる、復讐のまた復讐戰をやるといふ風に此の町の呼物になつた。

『チビ公の奴、どうして俺の球をあんなに打つんだらう』

光一は不思議で堪らなかつた、實際千三は如何なる球をも打ちこなした、對師範校との試合にはオールヒットの成績を擧げた。それは光一に取つて最も苦しい敵であつたが、併し光一は其のために驚くべき進歩を示した、彼はどうかしてチビ公に打たれまい、チビ公を三振させようと研究した。昔武田信玄と上杉謙信は互ひに覇業を爭うた、其の結果として双方は互ひに研究し合ひ、武田

流の軍學や上杉風の戰法などが日本に生れた。最も好き敵は最も好き友である、他山の石は相砥礪して珠になるのだ。千三がある爲に光一が進み、光一がある爲に千三が進む。戰場に於ては敵となり鎬を削つて戰ふもの丶光一と千三は家へ歸ると兄弟の如く親しかつた。

『今日は一本も打たせなかつたね』

『此の次には必ず打つぞ』

二人は笑つて話し合ふ。どんなに親しい間柄でも公の戰場では一歩も讓らないのが二人の約束であつた。時として光一は家へ歸つても物も言はずに鬱ぎ込んでる事がある、だが千三が訪ねて來ると直ぐ愉快な氣持になるのであつた。

或時光一は眞面目な顏をしてから言つた。

『青木君、僕の學校へ入學し給へよ』

『今更そんな事は出來ないから、一高で一緒にならう、もう二三年經てば僕の家も樂になるから』

『檢定を受けるつもりか』

『あ丶、さうとも』

『ぢや一高で一緒にならう、君がショートで僕が投手で小原が捕手だつたら愉快だな』

二人は顔を見る度にそれを語り合つた。二人は果して一高で一緒になり得るだらうか、今は隱者にそれを漏らすべき時でない。兎に角花は咲き花は散り、月日は青春の希望と共に伸びやかに輝きながら移り行く。柳光一は四年生になつた。

其の頃學校内で奇怪な風說が傳はつた。生徒の中で女學生と交際し、ピアノやヴァイオリンの合奏をしたり、手紙を交換したり、飲食店に出入したりするものがある、今の中に探し出して制裁を加へなければ浦和中學の體面に關する。

憤慨の聲々が起つた。

『誰だらう』

『誰だらう』

最初の中は此の風評を取上げるものはなかつた。

『師範の奴等が言ひ觸らしたんだ』

實際それは師範生徒から出た噂である、師範生徒は中學生に比べると學資も少し、また富める父兄をもたぬ處から何かに付けて不自由勝である、それに反して中學生は多くは相當の資産ある家の子である、彼等は自由に贅澤な襯衣を買ひ、ハイカラな文房具を用ひ、活動や芝居などを見物し、

洋食屋へも出入する、さうさせる事を不純だと思はない父兄が多いのである。

寄宿舍に閉ぢ込められた籠の鳥の如く小さくなつて居る師範生の眼から見ると、中學生の生活は全く不潔であり放縱であり頽廢的である。

久保井校長の次に來た熊田校長といふのは恐ろしく嚴格な人であつた、久保井先生は溫厚で謙遜で中和の人であつたが、熊田先生は直情徑行、火の如き熱血と、雷霆の如き果斷をもつて居る。若し久保井校長が春なら熊田校長は冬である、前者は春風駘蕩、後者は寒風凜烈！ どんなに寒い日でも熊田校長は外套を着ない、校長室に火鉢も置かない、曾て大吹雪の日、生徒は悉く顫へて居た日、校長は校庭に出て雪達磨を轉がし廻つた、其の髮となく眼となく口となく、雪だらけになつたが少しも怯まなかつた。

久保井先生が去つてから次に來るべき校長に對して生徒も町の人も一種の反感をもつて居た、だが日を經るに從つて新校長の實踐躬行的な人格は全校を壓し町を壓し、今では誰一人尊敬せぬものはない。

「默々先生と熊田先生とどつちがこはいだらう」

町の人々はかう噂した。それだけ嚴格な熊田先生が今中學校内に不良少年があると聞いたのだか

ら堪らない。

『嚴罰に處すべしだ、よく調べてくれ』

校長の命令に職員は眼を皿の如く大きくして捜し立てた。

と、また誰が言ふとなくそれは手塚だといふ噂が立つた。此の事を申立てたのは中村といふ同級生であつた、中村は善良な青年だが、思慮に乏しく言葉が多いのが缺點である、彼は學校中の凡ての事を知つて居るので皆が彼を探偵と呼んで居た、だが此の探偵は決して人に危害を加へない、口から出まかせに好きな事をしやべり散らして喜んで居るだけである。中村は手塚が昨日不良少女と活動寫眞館から出たのを見た、さうして後をつけて行くと洋食屋へ入つたといふのであつた。

級の重なるものが五人集まつて相談會を開いた、若し手塚であるなら同級の恥辱だから何とか今の中に相當の手段を講じなければなるまい。これが會議の主眼であつた。

『彼奴は一體生意氣だからぶん撲るがいゝよ』

と濱本といふ劍道の選手が言つた。濱本は凡てハイカラなものは嫌であつた、彼は洋服の上に袴を穿いて學校へ來た事があるので、人々は彼を彰義隊と綽名した。

『撲る前に一應忠告するがいゝよ』と澁谷が言つた、澁谷は手塚と親しかつた、彼は日曜毎に手塚

の家へ行つて御馳走になるのであつた。彼はまた手塚から眞珠入の小刀だの、水晶のペン壺などを



貰つた。彼が手塚を庇つた事がかへつて一同の憤激を焚き付ける事になつた。

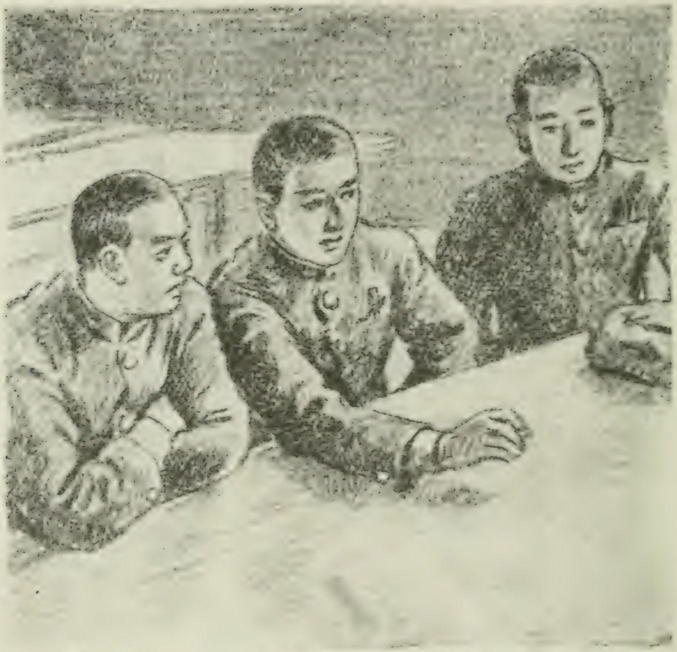
『馬鹿ッ、貴様は醫者の子から賄賂を貰つてるからそんな事を言ふんだらう、誰が何と言つても俺は撲る、彼奴は一體小利口で陰險だぞ』

『さうだ〳〵』と皆が賛成した。

『いつか生蕃カンニング事件の時にも生蕃は手塚の犧牲にされたんだぞ』

かう言ふものもあつた。

『待つてくれ』と光一は言つた。



「一體手塚の何が惡いんだ、問題の要點が僕に解らないから説明してくれ給へ」

「飲食店へ出入するのが惡いよ」と草瀬隆が言つた。

「それはね、學生としていゝ事ではないが、偶然だつて喉が渇ひたかつたり、汁粉屋へ入る事もあるから手塚ばかりは責められないよ」と光一は言つた。

「活動を見に行くのが怪しからん」

「併し、諸君の中に活動を見ない人があるかね、どうだ」

光一は四人を見廻した、一同は默

つた。

「女と合奏したり、手紙をやりとりしたりするのはどうだ」

「それは僕もよくないと思ふ、併しそんな事は忠告で濟む事だ一度忠告してきかなかつたら其の時に第二の方法を考へようぢやないか、僕は生蕃の事で懲りた、生蕃は決して惡い奴ぢやなかつた、だがあの時諸君が僕に同情して生蕃を根柢から憎んだ、其のために彼は再び學校へ來る事が出來なくなつた、僕はいつもそれを思ふと、吾々は感情に激した爲に一人の有爲の青年を社會から葬る事になつた事が實に殘念で堪らん、人を罰するには愼重に考へなければならん、さうぢやないか」

「さう言へばさうだ」と彰義隊は快然と言つた。

光一の眞劍な態度は一同の心を動かした。

「それぢや誰が手塚に忠告するか」

「僕でよければ僕が言はう」と光一は言つた。

「よし、それで決まつた、だが若しそれでも反省しなかつたら其の時には誰が何と言つても僕は彼奴を撲り殺すぞ」

「よしッ、僕は必ず反省さして見せる」

會議は終つた、光一は彼と別れてひとり町を歩いた。悲しい情緒が胸に溢れた。彼は他人の缺點を言ふ事は何より嫌であつた、まして其の人に向つて其の人を侮辱するのは忍び得ざる事である。だが言はねばならぬ、言はねば手塚は護られる、護られるのは構はないとした處で、手塚は自分の惡事を惡事と思はずに益々墮落するだらう、彼には美點がある、だが缺點が多い、彼は美點を養はずに缺點のみを增長させて居る、かくて彼は終に救ふべからざる淵に沈むだらう。

から彼は決心した。彼は直ぐ手塚の家を訪ねた。丁度勝手口に手塚の母が立つて居た、光一は手塚の母が折り／＼三味線を彈いて居るのを見た事があるので、いつも何となく普通の人でない樣な氣がするのであつた。

『手塚君は？』

『まだ學校から歸りません』と母が言つた。

『いゝえお歸りになりました』と女中が横合から顏を出した。

『さうかえ』

『お着替になつて直ぐ御出ましになりました』

『何處へ行つたんですか』と光一が訊く。

『さあ何處ですか、何だか大變にお急ぎでいらつしやいました』

『活動ぢやないかえ』と母が言つた。

『さうかも知れません』

光一は一禮して外へ出た。

『活動だ、それに違ひない』

光一は手塚の母が平氣で、『活動ぢやないかえ』

と言つた言葉を憶ひ出した。

あの家では活動を見る事を公然許して居ると見える、お母さんが承知の上なのだ、それに對して學校がいくら活動を禁じても何の役にも立たない話だ。

一體あの家では手塚が學校から歸つたかどうかもよく知らずに居る、それでは手塚が外で何をしてるかを知らないのも無理がない。

『手塚は不幸な男だ』

光一はふとかう考へると眼が熱くなつた、家庭に樂しみがないから、外に樂しみを求めるのだ、活動、飮食店、不良少女、遊びの友達！ かくて彼は撲られねばならなくなる。

いろ〳〵な感慨が胸に溢れた、彼は其の儘足を活動小屋に向けた。

光一とても絶對に活動寫眞を見ないではなかつた、彼は新聞や雜誌や世間の噂に高いものを五つ六つは見に行つた、だが彼はいつも堪へきれない様な嫌惡を感じて歸るのであつた。

活動館の前に五色の旗が立つて春風に吹かれて居る、其處からいかにも無智な子守や女工などが喜びさうな樂隊の音が漏れて聞える、小屋の前の軒の下に寫眞が幾つも〳〵掲げられて其の下に大勢の子供、米屋の小僧、小料理屋の出前持、子を背負うた女中などが群れて居た。光一が第一に不愉快なのは切符の賣場に大きな胡坐を掻いて尻までおらはして居る布袋の様な男が横柄な顔をしてお客を下目に見下して居る事である、それと向ひ合つて營養不良の様な小娘が淺黄の事務服を着て極めて冷かに切符を受取る。光一はそれを我慢しなければならなかつた。

暗い幕を潜つて中に入ると正面のスクリーンに西洋人の女の顔が現れた、うす明りに見物人の頭が見える、土曜日の事とてお客は一ぱいである。光一はやうやく中程へ進んでやうやく腰掛の端に腰を下ろした、手塚が來て居やしまいかとあたりを見廻したが暗がりで見えない。

場内には煙草の煙が濛々と立籠つて不潔な悪臭が腦を甘くする程に襲うて來る、腰掛と言つてもそれは極めて幅の狹い板を杭に打付けたもので、どうかすると尻がはづれて地に滑り込みさうにな

る、それを支へて居るのは中々容易な事ではない、なぜこんな不親切な設備をするかと言ふに、三等席を不自由にして置くとお客は直ぐ疲れて二等席に移るからである。お客を苦しめて金儲けをしようといふ興行師の策略だから堪らない。

實際興行師ばかりが悪いのでない、お客其のものも、そんな事は平氣である、其の代りに彼等は煙草ものめば、物も食ふ、蜜柑、鹽煎餅、南京豆、キヤラメル、彼等は絶えず口を動かして居る。蜜柑などは音がせぬから無事だが、隣席の人が鹽煎餅をボリ〳〵食ふので其の音だけでも寫眞を見る興味を滅ずる事おびたゞしい、いろ〳〵な食物から發する臭氣や煙草の煙や不潔な身體から發する熱氣が混合して一種の濁つた空氣となり、人間の鼻穴口腔から侵入するために、大抵の人は喉の渇きを感ずる、此處に於てラムネを飲んだりサイダーを飲んだりする。足元はどうかといふと蜜柑の皮や南京豆の殼、あらゆる不潔物で掃溜の如く亂れて居る。

かくの如く無智で不行儀な客を相手にするのだから興行師もそれ相當に不親切を盡す事になる。

『こんな汚ない掃溜によく我慢が出來るものだ』と光一は思つた。

寫眞は西洋のもので、いやにきらきら針の様な斑點が光つて見える恐ろしく古いものであつた、光一は默つてそれを眺めた。一人の男と一人の女が現れて肩に手を觸れ合つた。見物人は聲を擧げ



て嘔吐した。光一は思はず眼を閉ぢた。それは苟くも潔白な人間が目に見るべからざる不純な醜悪な光景である。

「馬鹿野郎！」

見物人の拍手の響めの中で破鐘の様に怒鳴つたものがある。

「毛唐の豚め、引込め」

聲は[illegible]であつた、彼は光一の丁度鼻先に陣取つて居た。

「おい」と光一は肩を叩、

いた。

『おう』

彰義隊は振返つた。

『來てるのか』

『うむ、君が忠告する筈だつたが、俺はどうしてもあいつをぶん撲らなきや腹の虫が納まらないからやつて來た』

『待つてくれよ、ね、決議に背いちやいかんよ』

『いや、俺は撲る、忠告なんて手ぬるい事では駄目だ、あれを見い、毛唐人は犬や猫の樣な眞似をしてそれが愛だといふんだ、俺はそれが氣に食はねえ、日本の寫眞は其の眞似をしてるんだぜ、日本の役者……さうだ俺は何かの雜誌を讀んだがね、米國では人間の中で一番劣等なものは活動役者だつて……さうだらう、劣等でなければ、あんな醜惡な動作をして恥かしいとも思はず平氣でやつて居られんからな、けだものめ』

あたりの人は皆笑ひ出した。

『何を笑ふか馬鹿野郎、お前達は趣味が劣等だから劣等なものを見て喜んでるんだ、蛆虫が糞を臭

いと思はない癖に、お前達は活動寫眞を劣等だと思はないんだ、氣の毒な奴だ、馬鹿な奴だ、死んでしまふ方が國家の經濟だ、やい其處に居る會社員見たいな奴、帽子を脱げよ、そんな安つぽい帽子を俺に見せようたつて俺は見てやらないぞ、インバネスを着やがつて鯣ぢやあるまいし、やい女ぽり／＼煎餅を食ふなよ」

彰義隊はすつかり昂奮して怒鳴り續けた。

「もういゝよ、怒鳴るのは止せよ」と光一は宥めた。

「俺だつて怒鳴りたくはないさ、だが……あゝ女が出た、あれは何とかいふ女なんだね、どうだ、毛唐の面はみんな猿に似てゐるね」

寫眞は終つた、場内が明るくなつた。彰義隊は立ち上つて前後左右を見廻した。光一も同じく見廻した。彼は二階の欄干にひたと身體を添へて顏を隱して居る手塚の姿を見た、はつと思つたが直ぐ思ひ返した、いま此處で彰義隊に知らしたら大騷ぎになる。

「居ないね」と彰義隊が言つた。

「居ないよ」

「畜生め、何處かに隱れてるんだ」

から云つた時再び電燈が消えた。
『此の間に手塚が逃げてくれゝばいゝ』と光一は思つた。と此の時彰義隊は拍手喝采した。
『やあ〳〵、近藤勇だ、やあ〳〵』
彼は「幕末烈士近藤勇」といふ標題を見て拍手したのであつた。と直ぐ丁髷の顔が現れた。
『あれは近藤勇か』と光一が訊いた。
『違ふ、近藤勇はあんな懦弱な顔をして居らんぞ』
『君は近藤勇を知つてるのか』
『知らんよ、だがあんな下等な芋の様な面ぢやない』
『元來丁髷の頭は下等なものだよ、僕はあれを見ると堪らなくいやになる』
『それでも近藤勇ならいゝよ、國定忠次だの鼠小僧だの、博徒や泥棒などを見て喜んでる奴は糞溜へ投り込むがいゝ、俺は近藤勇だ』
だが彰義隊君の期待する様な近藤勇は現れなかつた、喉に魚の骨を刺した様な聲で辯士は說明した、それに依ると芋の様な面は近藤勇なのである。
『駄目だ〳〵』と彰義隊は又もや憤慨した。

「そら敵が來た、足を配つて、足、足！ 足を……右足を輕くせんと横から斬り込まれた時に體が固くなるぞ、あゝ駄目だ、あの役者は隙だらけだ、あんな近藤勇があるもんか、あゝ馬鹿ッ、上段に振かぶる奴があるか、手元に付け込んで胴を斬られるぞ、馬鹿ッ切先が下がつてる、切先が、そんな劍客が、あゝ〳〵馬鹿々々〳〵」

彰義隊が餘りに憤慨するので周圍の人々はこそ〳〵と逃げてしまつた。實際彰義隊の眼から見ると……光一の眼から見ても此の役者の劍鬪は滅茶々々なのであつた、それでも見物人は喝采して居た。

「俺は歸る」と彰義隊は立上つた、『馬鹿々〳〵しくて見て居られん」

彰義隊はかん〳〵に怒つて歸つた、光一はほつと溜息を吐いた、さうして靜かに二階へ上つた。暗がりの欄干の傍に手塚は頭から羽織を被つて一生懸命にスクリーンを眺めながら聲を掛けて居る。

『いよう、大統領！」

其の隣に居た小さい女の子が皮も剝かずに林檎を嚙つて居る、

其の隣で手塚より首一つだけ背の高い驢馬と綽名されてる青年が奇妙な聲で叫んだ。

『いよう、せいちやん！』
『淸ちやん、しつかり！』と手塚は叫んだ。近藤勇に扮した役者は淸ちやんといふ名前なのだ。手塚はかういふ場所で、役者や何かの事を精しく知つて居るといふ事を見物人に誇りたいのであつた。
『手塚君』と光一は聲を掛けた。手塚は振向いたが直ぐ横を向いた。
『手塚君』と光一は傍へ步み寄つた時驢馬の膝に足を當てた。
『痛えな、氣を付けやがれ』と驢馬は云つた。
『失敬』
光一はあやまつた、驢馬は中學を二度ほど落第して退學してから、ぶら〳〵家に遊んでは手塚と共に何處へでも行く男である。
『手塚君、僕は一寸君に話したい事があるんだが外へ出てくれんか』と光一は言つた。
『いやだ』と手塚は言つた。
『一寸でいゝんだよ』
『いやだといふものを無理に引張り出さなくたつていゝだらう』と驢馬が言つた。
『大事な事だからさ、でないと君の身體が危ないんだ』

『いやに嚇かしやがるね、どうしようてんだ、手塚を攫らうてのか、面白い攫つて貰はう』

驢馬は吼えた。

『お前は默つてろ』と光一は颯と言つた『お前に用があるんぢやない、手塚に用があるんだ』

『何を？』

『喧嘩か、喧嘩するなら外へ出てやらう、僕が手塚と話を濟ますまで待て』

光一はから云つて凝と驢馬の顏を覗いた、驢馬は默つた、さうして隣席の女の子が噛りかけた林檎を取つてかぶりと噛つた。

手塚は光一の權幕に恐れて澁々席を立つた。二人は外へ出た。と向ふの果物屋の前で彰義隊が一人の學生と話をして居た。光一はハッと思つた。

『手塚隠れろ、荷車の横を歩いて行かう』

二人は彰義隊に見付からぬやうに群集に紛れて材木屋の前へ出た。

『何の用だ』と手塚は不平さうに言つた。

『君は制裁を受けなきやならなくなつたんだ、其の前に僕は一應君に忠告する、僕の忠告をきいてくれたら僕は生命に代へても君を保護しようし、また學校でも君を恕す事になつて居る』



『恕されなくてもいゝよ、僕はなんにも惡い事をしない』
『それがいけないよ、なあ手塚、人は誰でも過失があるんだ、それを改めればそれでいゝ』
『僕に改めべき點があるのか』
『あるよ、手塚、學校ではね、此の頃不良少年があると言つて頻りに捜してるんだ、其の候補者として君が數へられて居る』
『僕が不良？』
『君はよく考へて見給へ』
『僕は考へる必要がない』
『ぢや君、活動へ行くのは？』
『活動へ行くのが不良なら、天下の人はみな不良だ』
『さうぢやない、君は何のために活動へ行くのだ』
『面白いからさ』
『面白いかね、あんな不純なもの、あんな醜惡なものが面白いかね』
『人は好き〳〵だよ、他人の趣味に干渉して貰ひたくないね』

『いやさうぢやない、僕は君と小學校からの友であり同じく野球部員である以上は、君の墮落を見過す事は出來ない、ねえ手塚、君は活動が好きだから見ても差支ないと言ふが、好きだからつて毒を食べたら死んでしまふ、活動は最も低級で俗惡で下劣な趣味だ、下劣な趣味に耽ると人格が下劣になる、僕はそれを言ふのだ』

『活動は決して下劣ぢやない』と手塚は言つた、彼は光一の言つた事が充分に解らないのである。

『ぢや君は活動のどういふ點が好きか』

『近藤勇は義俠の志士ぢやないか』

『其處だ、君は近藤勇を充分に知りたければ維新の史料を讀み給へ、愚劣な作を愚劣な役者が扮した近藤勇を見るよりも、專門家が調べた歷史を讀み、靜かに考へる方がどれだけ面白いか知れない、活動の小屋は豚小屋の樣だ、掃溜の樣だ。あんな惡い空氣を呼吸するよりも山や野や但しは君の清淨な書齋で本を讀む方がどれだけいゝか知れない、活動なんて卑しいものを見ずに、もつと立派な趣味を樂しむ事は出來ないのか、高尙で健全で男性的な趣味は他にいくらでもある、趣味が劣等だと人格も劣等になる、君はそれを考へないのか』

『僕は劣等だと思はない』と手塚は繰返した、光一はどうしても高尙な意義を理解する事が出來な

い手塚の低級に呆れてじつと顔を見詰めた。歴史を讀み聖賢や英雄の傳記を讀み、山に野に遊び、野球を練習する。それだけでも活動より遙かに面白かるべき筈だのに、どうして見る〳〵穢濁の中に墮ちて行くんだらう。

『氣の毒だ、可哀さうだ』

光一は胸一ぱいになつた。

『ぢや活動の事はそれで止しにしよう、第二に君は飲食店へ出入するさうだね』

『あゝ、それがいけないのか、誰だつて飲んだり食つたりするだらう』

『手塚君、僕だつて人が洋食を食へば食ひたくなる、蕎麥屋へ入る事もある、だがね、學生は何處までも純潔でなければならないのだ、飲食店は大抵大人に汚されてゐる、不潔な女が出入する、學生はさういふ……少しでも不潔な場所へ行つてはいけないのだ、身體が汚れるからだ、いゝか、立派な玉は桐の箱に入れて藏つて置くだらう、學生は汚れのない玉だ、それを君は溝渠の中に投込んでるのだ、君は家に居れば洋食でも何でも食へる身分ぢやないか、なぜ食べたければ家で食べないのだ、學校でやかましく言ふのも形式ではない、そんな腐つた趣味を喜ぶ樣にならない樣にするためだ、君の事ばかりを言ふのぢやないよ、僕だつて折り〳〵大人の眞似をしたいと思ふ事がある、

だがそれは卑しい事だと思ひ返すだけだ』
『いやだ、僕は僕の錢で僕の好きな所へ行くのに學校が何も干渉するには當らないぢやないか』
『手塚君、君はどうしても僕の忠告をきいてくれないのか』
『いやだ、僕に悪い事がないんだ』
『それでは君』と光一は憤然として眼をみはつた『僕は君を侮辱したくないからこれだけ言つて後は君の反省に讓るつもりで居たのだ。が、君が飽までも頑張るなら僕は言はなきやならん』
『何でも云ふがいゝ』
『君の心に潔白か』
『無論だ』
『良心に對して疚しくないか』
『疚しくない』
『君は不良少女と遊んでるね、いま君の隣に居て林檎を嚙つて居た女の子は何だ』
『あれは……』と手塚は吃つた。
『あれは泥棒をして二三度警察へ擧げられた子ぢやないか』

「あれは……驢馬の友達だよ」

「驢馬は君の親友だらう」

手塚は默つた。春の日は暮れかけて軒並に灯が點り出した、積み上げた材木に蝙蝠が戸惑をして風に吹かれ行くと遙かに豆腐屋の喇叭が哀れに聞える。光一は手塚の肩に寄り添うて其の手をしつかりと握つた。

「手塚！ 今聞える喇叭は誰だか知つてるだらう、青木だ、青木は學校へ行きたくても能きない、小學校に居た時は彼はいつも一番か二番であつた、君や僕よりも頭がいゝのだ、學問をしたら僕等より遙かに立派になる人間だ、それでも家が貧乏で父親がないために、毎日々々喇叭を吹いて豆腐を賣り歩いて居る、君や僕は兩親のお蔭で何不自由なく贅澤に學問して居るが、青木は一錢二錢の錢を儲けるにもなか〳〵容易でない、君が活動を見に行く錢だけで青木は本を買つたり月謝を拂つたり、着物も買ふのだ、君の一日の小遣は青木の一ケ月働いた分よりも多い、そんなに贅澤しても君や僕は有難いと思はない、あんなに貧乏しても青木は伯父さんを有難いと思つて居る、なあ手塚、青木は活動も見ない、洋食も食べた事はない、ヴアイオリンも彈かない、女の子と遊びもしない、彼は只一高の寮歌を唄つて樂しんで居る、不器用な調子外な聲を出して、あゝ玉杯に花うけて

と唄つて居る、それだけが彼の樂しみだ、此の樂しみに比べて君の樂しみはどうだ、活動、洋食、ヴァイオリン、君の樂しみは金のかゝる樂しみだ、青木は堤の草に寢ころんで玉杯を唄つてる時、君は蟇口から銀貨を摑み出して不良共に振撒いて居る、どつちの樂しみが純潔だらう、僕は君を攻擊する資格がない、僕だつて青木に比べると遙かに劣等だ、劣等な僕等が不自由なく學問して居るのに、優秀な青木は豆腐を賣つて居る、勿體ない事だ、若し僕等が親を失ひ貧乏になつたら青木の如く苦學するだらうか、君はいつも青木を輕蔑するが、それが君の劣等な證據だ、活動に趣味を有するものは高尙な精神的なものが解らない、なあ手塚、腹が立つなら奮發してくれ、僕のお願だ、僕は一生君と親友でありたいのだ』

光一の言葉には一語每に熱氣を帶びて來た、彼は手塚の自尊心を傷つけまい〳〵と努めながらも、次第にこみあげて來る感情に驅られて果は淚をはら〳〵と流した。

『柳！』

手塚はぐつたりと首をたれて言つた。

『堪忍してくれ、僕は改心する』

『さうか』

光一は嬉しさの餘り手塚を抱き締めたが急に聲を出して泣いた。手塚も泣いた。日は暮れて何も見えなくなつた。横合の小路を喇叭を吹き〳〵チビ公が荷を搖つて唄ひ行く。

『……淸き心の益良男が、劔と筆とをとり持ちて、一たび起たば何事か、人生の偉業成らざらん、ぷう〳〵、豆腐イ、ぷうぷう』

## 二

柳一家はいつも幸福に滿たされて居た、光一はいつも平安であつた、彼の一番好きなのは朝である。彼は朝に眼をさますと寢床の中で校歌を一つ唄ふ、それから床を出て手水を使ひ茶の間へ行くと父と母と妹が待つて居る。

『お兄さんは寢坊ね』

妹の文子はいつもかう笑ふ、兄妹の規約として晩く起きたものがお辭儀をする事になつて居る、光一は每日妹にお辭儀をせねばならなかつた。癪にさはるが仕方がない。

茶の間には爽やかな朝日が一ぱいに射し込む。飯櫃や鍋から騰る湯氣は睦まじげに日光と遊んで居る、父はにこ〳〵して二人の子を見比べる、母は三人のお給仕に忙がしく自分で食べる暇もなか

つた。彼女は光一と文子の食力を計算する事を決して忘れなかつた、今日はいつもより多く食べたと言つては喜び少なく食べたと言つて病氣ではないかと心配する。大抵光一は五杯の飯を食べるが文子は三杯であつた、5對3ではあるが、光一の方はスピードが速いので殆ど同時におしまひになる、それから一緒に家を出る。

『お前後からお出で』

『兄さんは男だから後になさいよ』

此の争は絶ゆる事がない、二三年までは一緒に肩を並べて行つたものだが、此頃では二人揃うて行くのはきまりが悪い。特に光一に取つては迷惑至極であつた。

『君の妹は綺麗だね』

から友達に言はれてから彼はたとへ親父の葬式の日でも妹と一緒には歩かないと覺悟を決めた。

だが彼は妹が好きであつた、妹はすらりと姿勢が好く、お下髪の腦天に水色の蝶々のリボンを着けて居るが、それが朝日に輝いていかにも可愛らしい、彼は又文子の長い海老茶の袴や其の下から見える眞直な脚と靴の恰好が好きであつた。文子は洋服よりも和服が似合ふ。文子はまた誰よりも兄さんが好きであつた、野球試合のある時には彼女はいつも應援旗を持つて出掛けた、兄さんが

負けた時には家へ歸つて夕飯も食べずに寢てしまふのでいつも母に笑はれた。

兄妹二人は折り〳〵喧嘩をした、文子の一番嫌ひな事は顏が腫れたと言はれる事である。

『おい、お前の頰べたが段々膨れて來たね』

『いゝわ』

『後から見ると頰べたが耳の傍に突き出てるぞ』

『いゝわ』

『僕は八百屋の前を通つたらお前の頰べたを賣つてたよ、買つて來ようと思つたら茄子だつた』

『いゝわ、兄さんだつて鼻の先にニキビがあるぢやないの？』

『これは直き癒るよ』

『口の傍に黒子があるから大食だわ』

『食ふに困らない黒子なんだ』

喧嘩の終はいつも光一が母に叱られる事になつて居る。だが二人の睦まじさは餘所の見る目も羨ましい程であつた。文子は心の底から兄を尊敬して居た、といふのは彼女は學校から歸つて兄に英語や漢文の下讀をして貰ふ、それには一つも誤りがないからである。彼女の友達も悉く光一お

好きであつた、彼女等が文子の許へ遊びに來ると、文子は兄の書齋を一覽させる、大きな書棚に並べられた和洋の書籍を見て彼女等は何れも驚歎の聲を擧げる。兄が褒められるのは文子に取つて無上の喜であつた。

或日文子は雜誌を買はうと思つて蟇口を懷にして外へ出た、雜誌屋の店頭に男女の學生が群れて居た。此の店は二年前までは至極小さな店で文房具少しばかり繪本少しを並べて居たのだが、見る見る繁昌し出して書籍や雜誌が崩れるまでに積まれてある。瘠せた神經質らしいおかみさんは一人のいつも睡さうにして居る小僧をひどく怒鳴り付けてお客の手先と商品とを監視させて居るが、それでも毎日一冊位は盜まれるのである。

學生の中には毎日決まつて雜誌を讀みに來るのがある、それが一冊でも買ふのかと思ふと一冊も買はない、二時間も立つて一通り讀み終ると翌日又別なのを讀みに來る、かういふのは只讀んで行くだけだから罪が輕いが、ひどいのになると五六人團結してあれやこれやとひつくりかへして其の混雜に紛れて懷へ掻き込む。大抵は其の顏を知つて居るものゝ、事を荒立てると却つて店の人氣が無くなる。そこでおかみさんの癇癪が小僧の頭に破裂する。

『お前がぼや〳〵してるからだよ』ぴしやりッ。

小僧だつて朝から晩まで泥棒の張番をするといふ事は中々辛い、彼は十七になるが、十三か十四位にしきや見えない、毎日毎日頭を撲られるから上の方へ伸びないのだと自ら信じて居る。

文子は新刊の少女雑誌と英語の雜誌を買つた、それから書棚を見ると漢文の字典があつたのでそれを引拔いた、それで止めにしようと思つたが此時彼女は現代名畫集といふのを見た、其は叢書の第一卷で彼女が常に欲しい〳〵と思つて居たのであつた。彼女は其も引拔いておかみさんに言つた。

『これだけで幾らですか』

おかみさんはこれが御家の令孃だとは氣付かなかつた。

『五圓六十錢です』と彼女は言つた。

『さう?』

文子は蟇口を開けて銀貨を掌に數へた、一枚二枚三枚……。五圓二十錢しきやない。

『あら、足りないわ』

文子は顏を眞赤にして言つた、彼女は周圍に立つて居る男女學生が皆自分の方を見てる樣な氣がした。おかみさんは冷やかに文子を見やつた。

家へ歸つてお母さんにお錢を戴いて來ようかしら、と文子は考へた、だが其の間に此の本が他人

に買はれると困る、彼女は全く途方に暮れた。若し彼女が私は柳の娘ですから宅へ届けて下さいと言つたなら、おかみさんは二度返事で應ずるのであつた、ところが文子にはそれが出來なかつた。

『いくらお持ちなの?』とおかみさんが言つた。

『四十錢足りないのよ』

『へえ』

おかみさんはくるりと横を向いた。と此時一人の女學生が文子に聲を掛けた。

『文子さん、私出してあげますわ』

文子は其人を見た、それは彼女が小學校時代の上級生で染物屋の新ちやんといふのである、新ちやんは桃色の洋服を着て同じ色の帽子を被り、きら／＼した手提袋から銀貨を出した。

『有難う……でもいゝわ』と文子は言つた。

『いゝのよ、四十錢ぽち何でもないわ』

『さう? それぢや私直ぐお返しするわ』

『あらいゝわ』

文子は新ちやんに四十錢を借りて本と雜誌を紙に包んで貰つた。

『ではね新ちやん、私の家へ一寸寄つて下さらない？　お金をお返しするから』と文子はもう一度言つた。

『いやねえ、あなたは水臭いわ』

文子は水臭いといふ意味が解らなかつた。

『でもお借りしたんだから』

『一緒に散歩しませう』と新ちやんが言つた、二人は大通りから斜の横町に出た、其處の材木屋の材木の上に大勢の子供が戰爭ごつこをして居た。それから少し離れて生垣の下で三人の學生が何やらこそ〱相談をして居た。

『いやだ』と一人が言ふ。

『俺もいやだ』と他の一人が言ふ。

『俺に任せろ』と背の高い一人が言ふ、それは驢馬といふ綽名のある青年であつた。彼等は新ちやんと文子を見るや否や默つた。

『何をしてるの？』と新ちやんが言つた。

『一寸お出で』と一人が言つた、新ちやんは三人の圓居に入つた。四人は顏を突き合はして何か話



つた。文子は驢馬を初めとして他の二人の少年とは餘り親しくなかつたので何となく不安を感じながら立つて居た。

『行きませう』と新ちやんは文子に近づいて言つた。『私の家へ行つて下さる？』

『あゝお寄りするわ、でも何か食べてからにしませうよ』

『何を食べるの？』

『私ね、お汁粉を食べたいわ、それともチヤンにしませうか』

『チヤンて何あに』

『支那料理よ』

『私食べた事はないわ』

『おいしいわ』



文子は學校で友達から支那料理のおいしい事を聞いて居た。どんなものか食べて見たいと母に言つた時、母はそんなものはいけませんと拒絶した。

『たが食べて見たい』

好奇心が動いた。

『でも私お金が……』

『私持つてるからいゝわ』

『いけない』と文子は猛然と思ひ返した、母に禁ぜられたものを食べる事、他人の御馳走になる事これは愼まねばならぬ。

『私叱られるから』

『叱られる？』

新ちやんはにや〳〵と笑つたが軈て文子

つた。

『ぢや止しませうね』

二人は活動寫眞館の前へ出た、日曜の事とて館前は樂隊の音賑やかに五色の旗が飜つて居る。

新ちやんは立止まつた。

『入つて見ませうか、私切符があるわ』

『あゝ一寸だけね』

文子は此の上反對が出來なかつた、彼女は五六度女中や店の者と共に此處へ來た事があるのだ。寫眞を見たとて母に叱れはしまい。かう思つた。

新ちやんと文子は暗がりを探つて二階の正面に陣取つた、寫眞は一向面白くなかつた、が段々畫面が進行するにつれて最初に醜惡と感じた部分も、辯士の黄色な聲も、濁つた空氣もさまで厭でなくなつた、さうして家庭や學校では聞かれない野卑な言葉や、放縦な畫面に次第々々に興味をもつ様になり、終りには筋書の進行につれて泣いたり笑つたりする様になつた。

『面白い?』と新ちやんは幾度も訊いた。

『面白いわ』

ぱつと場内が明るくなると何時の間にか先刻の二人が後に來て居た。
『出ようよ』と一人が言ふ。
『うむ』
新ちやんと文子も二階を降りた。
『此方が近い』
一人が言つた、一同は路地口から溝板を渡つた、さうして、とある扉を押して其處から階段を昇つた、昇り詰めるとそれは明るい硝子戸の付いた支那料理屋の二階であつた、向側の呉服屋其隣の時計屋なども見える。
『私歸るわ』と文子は驚いて言つた。
『いゝぢやないの？　ワンタンを一つ食べて行きませう』と新ちやんが言つた。
『でも……私』
『お金の事を氣にしてるんでせう、構はないわ、此の人達はね今材木屋の前でお金を拾つたんですとさ、いくら奢らしても構やしない、ねえ驢馬』
『驢馬々々といふなよ』と驢馬が言つた。

新ちやんはだまつて蟇口を驢馬に投げ付けた。銀貨が、さら〳〵と零れた。
『いくら使つたえ』と他の一人が言つた。
『二人前の切符代だけ貰つたよ』と新ちやんが言つた。
『拾つたお金で活動を見たの？』と文子は仰天して言つた。誰もそれには答へなかつた。
『歸らして頂戴』と文子は泣聲になつた。
『歸つてもいゝよ、どうせ俺達の仲間になつたんだから、歸りたければ歸つてもいゝ』
『私が仲間？』
『お前達は默つておいで』と新ちやんは男共を制した、さうして文子にかう囁やいた。
『恐い事はないのよ、彼人等は馬鹿なんだから……でも文子さん、あなたも同じ蟇口の金を使つたんだからお友達におなりなさいね、さうしないと彼人等はお宅へ行つてお母さんに何を言ふか知れませんよ、ねえ、毎日でなくとも、たまにちよい〳〵私達と遊びませう、ね、お母さんに知れたら困るでせう』
文子は呼吸も出來なかつた、實際既に不正な錢の御馳走になつたのである、こんな事が母に知れたら母はどんなに怒るだらう、怒られても仕方がない、母が歎きの餘り病氣になりはしないか、そ

れから又兄さんは……兄さんの名譽に係はる事があると……
　哀れ文子は四苦八苦の死地に陷ちた、彼女は去るにも去られなくなつた。と階段の音が聞えて一人の學生が現れた。
『やあ』
　文子は顏を上げた、それは兄の友の手塚であつた。彼は露西亞の百姓が着るといふルパシカに大きな縁のある天鵞絨の帽子を被つて居た。
『どうしたの？　文子さん』と彼は言つた。文子は手塚の腕に縋り付いて泣き出した。
『お前達はどうかしたんぢやないか』と手塚は詰る樣に一同に向つて言つた。
『何もしやしないよ』と驢馬が言つた。
『惡い事を教へると承知せんぞ』
　手塚の語氣は益々鋭い。
『いやに威張るのね』と新ちやんが言つた。
『默つてろ』と手塚は怒鳴りつけて文子の涙を手巾で拭いてやり、
『心配しなくてもいゝよ、さあ僕と一緒に行きませう』



手塚につれられて文子は外へ出た、文子は泣きながら一伍一什を手塚に語つた。

「解つてるよ」と手塚はいかにも侠客の様な顔をして言つた。

「彼奴等はね、あなたを囮に掛けて金をゆすらうて計略なんだ、僕が引受けていゝ様にするから安心していらつしやい」

「でも富ちやんに四十錢と菓子のお錢を返さなきやならないわ」

「いゝよ、それも僕が引受けたから」

手塚は文子の家近くまで送つて來た。彼は別れ際にかう言つた。

「兄さんに秘密だよ」

「えゝ」

讀者諸君！　世に不良少年少女といふものがある、彼等とても決して生來の惡人ではないのだ、だがそれ等の多くは意志が薄弱で忍耐力がなく、健全な[illegible]がたい爲から我儘になり野卑になり學校が嫌ひになり、其の代に娯樂を求むる念慮が盛になる、上品な娯樂は人間の靈の養分になるが、下等な娯樂は靈を腐蝕する鹽酸である。

讀者諸君！　諸君は決して油斷をしてはならぬ、諸君の前にいろ／＼な誘惑が口を開いて待つて

居るのだ、諸君は右を見ても左を見ても諸君を誘惑するものが並び立つて居る時、自らの理性に訴へて惡を御け善を採用せねばならぬ、諸君の思慮に餘る場合にはそれを隱さずに父母や兄や姉や學校の先生に相談せねばならぬ。

災難や過失は何人も免れる事は出來ない、が、其の場合に父母に叱られる事を恐れたり先生に笑はれる事を恐れたりして、淺墓な自分の智慧で秘密に事を運ばうとすると其の結果たるや益々惡くなるばかりである。若し女子が早く父母若くは兄の光一に凡てを打明けたなら、災難は其日限りで無事に濟んだのである。人の子たるものは父母に對して秘密を作つてはならぬ、人の弟や妹たるものは兄や姉に對して、さうして人の弟子たるものは師に對して秘密を作つてはならぬ、秘密を打明ける事は恥かしいが、打明けなければ罪が次第に深くなるのだ。秘密を打明けたとて決してそれを叱つたり笑つたりする樣な父母兄弟や先生は此の世にない。

讀者諸君！　少年時代に一番愼まねばならぬのは娯樂である。娯樂にはいろ〳〵ある、眼の娯樂耳の娯樂、口の娯樂、それ等よりも最も有益なのは心の娯樂である。

活動寫眞、飲食店、諸君がいつも誘惑を受けるのはこれである。娯樂には友達が必要である、諸君は此のために活動の友達や飲食の友達が出來る。不良氣分が此處から胚胎する。其の中に奸智あ

ゐもの、良心に乏しきものは此の娯樂を得るために盗賊を働く、一人では心細いから合棒を作る、弱いものを脅迫し金品を捲き上げる、他の子女を誘惑して同類に引込む、一度此の泥田に足を突込むともう身動きが出來なくなる。

讀者諸君！　孝子は巖牆の下に立たずと古の聖人が言つた、親のあるものは自重せねばならぬ、兄弟姉妹のあるもの、先輩のあるものは自重せねばならぬ、卑しい娯樂場へ足を踏み入れて生涯を誤る事は愚の極である。

扨て文子はどうなつたか、文子の兄光一は其の頃野球に忙がしかつた、彼の學業は益〻進み同時に野球の技術が素晴らしいものになつた。彼の身の丈は五尺四寸、腕は鐵の如く黒く、隆々とした肉が肩に隆起し、胸は春の野の如く廣く伸びやかである。彼の母はいつも彼を見やつて微笑した。

「私より首一つだけ大きくなつた、此の子は仕様がないね、去年の着物がみんな間に合はなくなつた」

かうこぼしながらも心中の喜びは抑へきれない。それと同時に文子も次第に美しくなつた、が文子の顔に何やら一點の曇りが棚引き初めた。

「お前どうかしたのかえ」と母が訊く。

『何でもないわ』と文子は笑つた。だが文子は決して何でもなくはなかつたのである。彼女は例の一件があつてから其の秘密を手塚に握られてしまつた。若し彼女が家へ歸つて母に打明けたなら、こんな苦みはせずに濟んだのである。

手塚は一旦光一に忠告されて改心したものゝそれはほんの束の間であつた、彼はどうしても娯樂なしには生きて居られなかつた、活動寫眞で低級な演劇趣味を吹き込まれた彼は自分で芝居をして見たくなつた。彼は活動を見ては家に歸つて其の眞似をした、若し彼が恥を知る學生であつたなら本當の正しき魂がある少年であるなら、國定忠次だの鼠小僧だの、賭博打や泥棒の眞似を恥づべき筈だが、彼にはそんな良心はなかつた、彼は只人眞似がしたいのである、實際彼はそれが上手であつた、彼は軍鷄の樣な辯士の似聲を使つたり、又箒を提げて劍劇の眞似をするので女中達は喜んで喝采した。

『坊ちやまはお上手でいらつしやる事』

『男振がいゝから役者におなんなさるといゝ』

此の聲々を聞くと手塚は頗る得意であつた、それと同時に母は鼻の下を長くして喜んだ、彼の母は凡て藝事が好きで一と月に三度は東京へ芝居見物に行くのである。

父は冠者を罵つて狼の様な聲で謠を謠ふ、母は三味線を彈いてチンツトンシャンと囃る、さうして手塚は拳を振つて、やあやあ者共と目玉を剝き出す。大抵此の場合に袈裟で斬られる役になるのは代官の若君や車夫の幸吉である。だが若君も幸吉もさう〳〵はいつも斬られてばかり居られぬ、たまに癇癪を起して國定忠次を緣側から投り出す事がある。そこで手塚の機嫌が惡くなる、從つて奧様も、旦那様も、一家が不機嫌になる。

それやこれやで家の中ばかりの芝居は面白くなくなつた、そこで手塚は同志を糾合して少年劇をやらうと考へた。幸ひな事に驢馬の父は製絲工場の職人である、此の工場は二年前に倒產して今では半ば倉庫の樣になつて居る、其の一部分だけでも優に芝居に使用する事が出來る。

手塚は毎日其處へ出張して芝居の稽古をした、彼は監督であり座長であつた、驢馬は敵役や惡役を引受けた、新ちやんは母親やお婆さんになつた、若くて綺麗で人氣のある役は手塚が取つたが此處に一番困つたのは若い娘に扮する女の子がない事である、手塚はそれを文子に當てた。

『いやよ、私いやよ』と文子は顔を眞赤にして拒絕した。

『いやならいゝよ、僕はあなたのお母さんに賴んで來る、これこれのわけで文子さんは僕等の仲間になつたのだからつてね』

文子は當惑した、母に秘密をあばかれては大變である。
『おや私やるわ』
毎日集まる度に一同は何か食べる事に決まつて居た、鰻や天麩羅、支那料理、文子はいろ〳〵なものを御馳走になつた、其れ等の費用は大抵手塚から出た。だが手塚とても無盡藏ではない、彼も次第に小遣錢に困り出した。
『文子さん、どうにかならないか』
毎日人の御馳走になつて濟まして居るわけに行かない、文子は母に貰つた小遣錢を殘らず出した。二三日過ぎて彼女は貯金箱に手を付けた、それから次に本を買ふ積で母を欺した。さうしなければ秘密をあばかれるからである。かういふ狀態を續けてる中に彼女は段々此の團體の不規則で野卑な生活が好になつた、母の前で行儀を好くしたり、學校の本を復習したりするよりも、男の子と遊んで食べたいものを食べて居る方がいゝ。
文子の母は今までと打つて變つた文子の態度に氣が付いた。彼女は文子を嚴しく戒めようと思つた、だが其の原因を究めずに徒らに騷ぎを大きくしては何の役にも立たぬ、これには何か力強い誘惑があるに違ひない。

から思ふものゝ悲いかな彼女はそれを探偵すべき手掛がないのであつた、父に言へばどんなに叱られるか知れない、十六にもなれば人の目に付く年頃だから滅多な事をして奉公人共に後指をさゝれる事になると、あの子の名譽にも係はる、さりとて打棄てゝ置く事も出來ない。

我が子を叱りたくはないが、叱らねば救ふ事は出來ない、母は思案に暮れた。彼女は番頭光一の室へ行つた。

『光一、お前に相談があるんだが……』

『何ですか、何かうまいものでも僕にくれるの？』と光一は微笑して云つた。

『それどころぢやないよ、文子の樣子が此頃何だか變だとお前は思はない？』

『變ですな』

『さうだらう』

『頬ぺたが益々膨れる』

『そんな事ぢやない、學校の歸りが大變に晩い』

『居殘りの稽古があるんです』

『でもね、お金使ひが荒いよ』

『本を買ふんです、今が一番本を買ひたい年なんです、僕にも少し下さい』
『お前の事を言つてるんぢやないよ、本當に文子が本を買ふためにお金がいるんだらうか』
『さうです』
『でも每晚何だか手紙の樣なものを書いてるよ』
『作文の稽古ですよ、彼奴なか〳〵文章がうまいんです』
『此の間男の子と歩いてるのをお松が見たさうだよ』
『男の子とだつて歩きますよ、僕も女の子と道づれになる事がある、隣りの珠子さんが犬に追はれた時、僕はおんぶして歸つて來た』
『お前は何とも思はないかね』
『大丈夫ですよお母さん、文子は決して馬鹿な事はしませんよ、僕の妹です、あなたの娘です』
『さうかね、それならいゝが』
母は安心して室を出た、後で一人光一は卓子に頰杖を突いて考へ込んだ、文子が每日晩く歸る、稀に早く歸つても道具を抛り出したまゝ何處かへ出て行く、それに就いては光一も面白からず思つて居る、のみならず、此頃はしみじみと話をした事もない、母の言葉によつて扨は何か良からぬ事

があるかも知らぬ、と思つたもの〻、母に心配を掛けるのは何より辛い、出來る事なら自分一人で事の實否を究めて見たいさうして不幸にも妹に危險な事があるなら母にも父にも知らさずに、自分一人で萬事を解決してやらう、かう思つてわざと平氣を裝うて母に安心さした。

だが文子は果して惡魔の手に落ちたであらうか。

光一は、じつとそれを考へ續ける中に階下の方で文子の聲がした。

『只今！』

光一は立上つた、二階を降りると文子は靴を穿く處であつた。

『文さん』と光一は呼び止めた。

『なあに？』

『何處へ行くの？』

『お友達が待つてるのよ、テニスよ、今日は復讐戰よ、大變よ』

『一寸待つてくれ』

『だつて、もうおそいんですもの、あゝ暑い、私汗びつしよりよ』

彼女は風呂敷包を抛り出してさつさと出て行つた。光一は風呂敷包を持つたまゝ暫らく妹の後

姿を見送つたが、急に二階の書齋へ駈け上つた。彼は風呂敷包を解いた、中から歴史や地理や圖畫や筆箱などが出た、彼はそれ等を一つ〳〵に檢べると雜記帳の間から一封の手紙が落ちた。封筒には只「文子樣」と書いてある、彼は中を披いた。

『一昨日逢つて昨日逢はなかつた、いつもの處へ來て下さい、今日は大事な相談があります。文子さん……



千三より』

『あつ』とばかりに光一は思はず聲を揚げた。

『千三！　千三！　青木か、あゝ青木が……あのチビ公が、畜生！』

茫然と尻餅を突いた光一の瞳は見る〳〵火の如く赤くなつた。畜生！　思知らず！　彼奴が文子を誘惑してるのだ、彼奴が文子を誘惑してるのだ、彼奴が俺も俺の父もあれだけに盡してやつたに拘らず妹を誘惑して妹から錢を取りやがつた、あゝチビ公！　そんな奴だとは思はなかつた、俺は賣られた、俺は……俺は……

光一は其儘二階を降りるや否や、草履を突掛けたまゝ家を出た、彼は眞直に千三の家へ走つた。

『まあ坊ちやん、折角お出下すつたのに、千三は留守ですよ』と千三の母が言つた。

『商賣から歸らないのですか』

『今日はね、お晝前だけでお晝過から休みです、ボールへ行つたのぢやありますまいか』

『左樣なら』

光一は直ぐ引返して默々塾へ出掛けた。塾には誰も居なかつた、光一は引返さうとすると窓から痩せた髭面がぬつと現れた。

『やあ柳君、一寸入れ』

『僕は急ぎますから失禮します』

『何？　急ぐ？　男子たるものが急ぐといふ法があるか、急ぐといふ文字は天下國家の大事な場合にのみ用ふべしだ』

『ですが先生、僕は……』

『敵に聲を掛けられておめ〳〵逃げるといふ卑怯者は浦中にあるかも知らんが、默々塾には一人もないぞ』

『ぢや簡單に御用向を伺ひませう』と光一は中腹になつて言つた。

『よしッ、ちや君に訊くが君は水を飲むか』

『飲みます』

『一日何升の水を飲むか』

『そんなに飲みません』

『いかん、人間は毎日一升の水を飲むべしだ、顏回は一瓢の飲と言つたが、あれは三升入の瓢だ、聖人は』

「左樣なら」

光一は堪らなくなつて逃げ出した。

「馬鹿にしてやがる、塾長があんな風だから弟子共まで碌なものはない、あの畜生！　チビの奴、何處へ行つたらう」

光一は赫々と燃え立つ怒に驅られながら血眼になつて千三を探し廻つた、彼は大抵千三が散歩する路を知つて居たので調神社の方へ走つた。彼は夢中に並木と並木の間を覗いたりお宮をぐるぐる廻つたりした。と、彼は不圖大きな松の下で人影を見た。

## 二

我が妹を誘惑して墮落の境に惹き込まうとしつゝあるチビ公を搜し廻つた光一が今松の下蔭で見たのは確かに妹文子の片袖と海老茶の袴である。

「一人だらうか、二人だらうか」

彼にはそれが解らなかつた。十幾本となく並んだ松と松との間は狹い。

「どうしてこんな處へ來てるんだらう、多分チビと一緒だらう」

光一はかう考へたが、急に二人の前へ出たら二人は驚いて逃げるかも知れない。彼はかう思つて靜かに足を忍ばした。と突然横合の松蔭から口笛が起つた。と思ふ間もなく石の礫が四方から飛んで來た。

『誰だ』と光一は背後を向いて言つた。が人の姿は見えない。茶の花畠の間や肥料小屋の間から盛に礫が飛んで來る。

『卑劣な奴だ、出て來い』

彼はかう言ひながら八方を睨んだ。さうして再び文子の方を見やると文子の姿はもう見えない。

『しまつた、何處へ逃げたらう』

彼は血眼になつて搜した。もう礫は飛んで來ないが、お宮の境内はしんとして人の音もない。風が出て松の梢をさら〳〵と鳴らした。濃かい葉の影のところ〴〵に春の日が零れた樣に大地に光つて居る。光一はお堂の前に出た。其處の櫻の下に千三が立つて居る。光一は愕とした。彼は野猪の如く突進した。

『おい、チビ！』と彼は叫んだ。千三は驚いて顏を擧げた。彼は今石獅子の寫生をして居たのであつた。

『やい、貴樣は俺を欺したな、貴樣は俺の妹を貴樣は……貴樣は……』

餘りに急き込んだので光一の辭が喉に詰まつた。千三は呆れて眼をきよろ〳〵させた。彼は光一が惡戯にこんな事を言つてるのだと思つた。

『やい、貴樣は此處で何をしてるんだ』

『僕は高麗犬の寫生をしてるんだよ、どうもね、一つの方が口を開いて一つの方が口を閉めてるのが不思議でならねえ』と千三は言つた。

『何が不思議だ、貴樣がこゝに居る方が餘程不思議だ、馬鹿野郎！』

『君は本當にそんな事を言つてるのか』と千三は改まつた。

『當り前だ、貴樣は俺の妹を誘惑したらう』

『僕が！』

『彼處の松の處で妹と話をして居たのだ、それを俺が見た、貴樣から妹にやつた手紙も見た、知らないとは言はせないよ、馬鹿ッ』

『おい柳！　どうしたといふんだ、僕が君の妹を！　君！　君！　それは噓だ、飛んでもない事だ、君、誤解しちやいけないよ』



『白ばつくれるなよ、俺には證據がある』

『ぢや證據を見せ給へ』

『證據はこれだ』

光一は拳骨を固めて千三の横面を撲つた。あつと千三は頬に手を當てた。彼は火の如く顔を紅くした泣顔で眼に一ぱいの涙を湛めた。

『君は僕を撲つたね』

『無論だ、文句があるなら買つて來い』

『柳君！』と千三は光一の腕をとつた。『君は後悔するぞ、君は僕をそんな人間だと思つて居たのか、君は……』

『何を！　生意氣な』

光一は千三を横に撲つた。千三は櫻の根に躓いて倒れた。筒袖の袂に纏めた二尺帶が解けて、懐の烏作帳が辞書と共に大地に落ちた。此時お宮の背後から手塚が現れた。

『やあ柳！　どうしたのだ』と手塚が言つた。

『此奴はね、不都合な事をするから懲らしてやつたんだ』

『チビぢやないか、おいチビ、お前一體生意氣だよ、お前は何だらう、今、此處で文子さんと話して居たんだらう』と手塚は言つた。

『僕は一人だよ』と千三は起たうともせず大地に坐りながら言つた。

『隠すなよ、俺がちやんと見て居たんだ、なあ柳、此奴は油斷がならないよ、氣を付け給へね、併し此の位やつつけたら二度と惡いことはしまいから堪忍してやれ、可哀さうに、おいチビ、改心しろよ』

手塚は光一を宥め〳〵して手を曳いて去つた。境内は再びもとの靜寂にかへつた。さら〳〵と動く松の梢の上に名も知らぬ小鳥が一つ何處からともなく飛んで來て囀り出した。松の間から遠くの天の白い雲が見える。千三は坐つたまゝ動かなかつた。彼は何が何やら解らなかつた。彼の第一に感じたのは光一の亂暴！　其の次に起つたのは金の力と腕の力の相異に依つて默つて侮辱に甘んじなければならぬ悲しさであつた。柳は財産家の子だ、それに腕力が強い、貧乏で身體が小さい俺は彼に對して抵抗する事が出來ない。

いや〳〵と彼は思ひ返した。これには何か事情がある。俺が第一になすべき事は俺の潔白を明らかにする事だ。若し文子さんを誘惑したといふ疑が俺に掛つてるものとすれば俺は其の事實を究

めて柳に謝罪させなければならぬ。其時こそは俺は決して一歩も讓らない。彼が今、俺を撲つたほど俺も彼を撲つてやる。

此事があつてから光一と千三は仇敵の如くになつた。二人は路で逢つても顔を反向けた。

『今に復讐してやるぞ』

千三はかう肚の中で言つた。文子は光一に嚴しく說諭されて再び手塚の許へ行かなくなつた。月日は過ぎて、暑中休暇が近づいた。するとこゝに珍らしい事件が起つた。

浦和學生辯論會！

野球の試合ばかりが學生の興味でない。體力を養成すると共に知識を求めなければならぬ。浦和各中等學校の學生が一堂に會して辯論を研究しよう、これが目的で學生辯論會なるものが組織された。元來浦和に他山會なるものがあつて、師範學校と中學校の學生有志が一つの問題を提供して兩方に分れて闘論したのであつた。だが此の會には弊害があつた。師範學校と中學校と、學校に依つて議論を分けたので、詰り對校試合と同じものになつた。それがために中學生が師範生の說に贊成する事が出來なかつたり、師範生が自分の校友の說に反對する事が出來なかつたり、其のために個人個人の自由意志が束縛されて辯論の主義が立たなくなつた。そこで浦和辯論會は何れの學校に屬

する學生でも自由に所懷を述べて差支ない事にした。さうして默々塾をも勸誘した。愈々當日となつた。場所は師範學校の大講堂である。時は夕方から。

此の催しを聞いて浦和の町の父兄達も定刻前に會場へ詰め掛けた。各學校の先生達は我が生徒に勝たせようと忍び〳〵に群集の中に紛れ込んで行つた。時刻になると師範生の恐ろしく丈の高い男が演壇に現れた。彼は頗る愛嬌者で頭の横に二錢銅貨位の禿があるので銅貨の綽名があつた。彼は妙に氣取つて兩手を腰の左右にくの字に突張つた。

『玩具の兵隊！』と誰かゞ聲を掛けた。彼はそれを聞いて脚を固く突張つて歩く眞似をしたので群集はどつと笑つた。かういふ滑稽な男が司會をしたといふ事は會の威嚴を損じたに違ひないが、併し二つの學校の生徒が鎬を削つて戰はうといふ殺氣立つた會場を春の如く平和にしたのは此の男のお蔭である。

辯論の題は此の席上で多數決で決める事になつて居る。

各自の抱負を陳べる事、

科學に就いて、

英雄論、

此の三つが提出された。英雄論を提出したのは手塚であつた。司會者は採決した。英雄論が大多數を以て通過した。それは如何にも青年にふさはしき題であつた。學生の眼は悉く異様に輝き、其の呼吸は次第に迫つて來た。併し誰あつて眞先に立つ者がなかつた。凡そかういふ場合に先登をする者は極めて損である。如何となれば後の辯士に攻撃されるからである。中學生は悉く手塚と柳の方を見やつた。手塚は頻りにノートを繰つて居る。光一は微笑して居る。師範學校側では野淵といふ上級生と矢島といふのが人々に肩を突かれて居た。默々塾では皆がチビ公を目指した。チビ公は頭を縮めて引込んだ。と、突然演壇に立つた青年がある。それは例の濱[illegible]であつた。彼は劍道の稽古着に白い袴を穿き、紐の横に汚ない手拭をぶら下げたまゝ、のそ〳〵と卓子の上の水差から洋盃で水を飲んだ。

「水を飲みに上がつちやいかん」と誰かゞ言つた。實際彰義隊には辯舌が下手なので何人も曾て演說をするとは思はなかつたのである。

「滿場の諸君！」

彰義隊は屹と直立して兩手を袴の紐の間に挾み、恐ろしく大きな聲で怒鳴つた。會衆はわつと笑ひ出したが直ぐ靜かになつた。

『滿場の諸君！』と彼は再び言つた。さうして又『滿場の諸君！』と怒鳴つた。會衆は湧くが如く笑つた。

『我輩は英雄を崇拜する、我輩は英雄たらんとしつゝある。我輩は諸君が英雄たる事を望む、小說や音樂や芝居や更に最も下劣なる活動寫眞を見る樣な奴は到底英雄にはなれない。我輩は其奴等を馬鹿野郞と呼ぶ、今夜此處に英雄も來て居るだらうが、馬鹿野郞もなか／＼多い、我輩は片端からぶん撲つて首を拔いてやるからさう思へ』

『脫線々々』と叫んだものがある。

『何を！……』

『暴言は止めて下さい』と司會者の銅貨が注意した。

『よしッ、解りました、そこで滿場の諸君？』

彰義隊はから向き直つて何か續けようとしたが何を言ふ積りであつたか忘れたので頻りに頭を搔いた。

『終りッ』

彼は壇を降りた、拍手と笑聲とが一度に轟いた。

『只今のは少し脱線しました、次は……』と鋼作が言つた。此時手塚が皆に押されて座席を離れた。會衆は波の如く動いた。手塚は器用で頓智がある。人真似が上手で、活動の辯士の聲色は最も得意とする處であり、且毎月多くの雜誌を讀んであらゆる流行語を知つて居る。彼は新らしい制服を着て滑らかに光る靴を穿いて居た。

拍手に送られて彼は演壇に立つた。

『私は英雄を非認するために此の演壇に上りました。私は歴史のあらゆる頁から英雄を抹殺したいと思ひます。英雄なる文字は畢竟奴隷なる文字の對象であります、私共の祖先は英雄の奴隷であつたのです、個人の權利を侵掠して自己の征服慾を滿足させたものは英雄であります、若し今日……デモクラシーの今日に於て猶英雄を崇拜するものあらばそれは個人の生存權利を知らない舊い頭の持主であります』

一氣にすら／＼と言ひ下した流暢な辯舌は爽やかに美くしい、彼の眼はいかにも聰明に輝やき其の頰は得意の心持と共に紅らんだ。

『よくしやべる奴だ』と彰義隊が叫んだ。

『叱ツ／＼』と制する聲。

手塚は會衆を滿足さうに見下ろして續けた。

『一將功成りて萬骨枯るといふ古言があります、一人の殿樣がお城を築くに、萬人の百姓を苦しめました、而も殿樣は英雄と謳はれ百姓は草莽の間に埋れて死にます、清盛、賴朝、太閤、家康、諸君は彼等を英雄なりと言ふでせう、併し彼等がどれだけ諸君の祖先を幸福にしましたか、個人が其の智力と體力を以て他の多くの個人を征服し、侵掠し、而も其の子孫にまで及ぼすといふ事は今日の世に許すべからざる事であります、既に世界に於て歐洲戰爭以來凡てがデモクラシーになりました、民衆が卽ち國家であります、民衆の意志であります、此に於て昔の樣に英雄なる一人の暴虐者の下に膝を屈するといふ事は斷じて止めなければなりません。諸君はナポレオンを英雄なりと言ふ、併しナポレオンのために佛蘭西はどれだけ英國や露西亞や獨逸の壓迫を受けたか、一英雄のために國は疲れ民は疲れ遂に女々しくも城下の誓をなして、彼の英雄をセントヘレナへ流したではないか、恐るべきは英雄である、忌むべきは英雄である、現代の日本は英雄崇拜の妄念を去つて平等と自由に向つて進まねばならぬ、凡ての偶像を燒いて世界の趨勢に從はねばならぬ、私の論はこれを以て終りとします』

會衆は恍惚として彼の聲を聞いて居た、それは極めて大膽で奇拔で、さうして斬新な論旨であ

る、偶像破壞！　平等と自由デモクラシーの意義！

破るゝばかりの喝采に送られて手塚は壇を降りた。彼の左右から校友が代る〴〵に握手するやら肩を打つやらした。手塚は揚々として席に着いた。

『反對！』と叫んだものがある。人々は其の方を見ると師範學校の野淵であつた。野淵といふのは模範生と稱せられて居る青年で、漢文や英語に長じ其の學問の豐な點に於て先生達も舌を卷いて恐れて居る。彼は底力のある聲量と悠然たる態度で先づかう言つた。

『只今の辯士の新知識を尊敬すると共に我輩は其の論旨に大なる疑を挾まねばならない事を遺憾と思ひます、辯士は英雄不必要を唱へました。英雄の對象は奴隷であると言ひました。偶像を破壞して民衆的にならねばならぬと言ひました。果してさうでせうか、嗚呼果して然るか』

語調は一變して大行急坂を下る勢を以て進行した。

『若し此世に英雄なかりせば人間はいかに慘めなものであらう、古人は櫻を花の王と稱した、世の中に絕えて櫻のなかりせば人の心やのどけからましと詠じた、吾人は野に遊び山に遊ぶ、其處に櫻を見る、一抹の霞の中に或は懸崖千仭の上に或は綠圃黃隴の邊に或は勿來の關に或は吉野の[illegible]に、古來幾億萬人、春の櫻の花を愛でて大自然の攝理に感謝したのである、若し櫻がなかつたなら

うであらう、春風長堤を吹けども落花に嘶ける駒もなし、南朝四百八十寺、甍青苔に濕へども鐘の袖に涙を絞りし忠臣の面影を偲ぶ山もなからう、花ありてこそ吾人は天地の美を知る、英雄ありてこそ人間の偉なるを見る、人類の中に最も秀でたるものは英雄である、英雄は目標である、羅針盤である、吾人は其の經歴や功績を見て進るべき道を知る、前辯士は清盛、頼朝、太閤、家康、ナポレオンを列擧し吾人の祖先が彼等に侵掠せられ、隷使されたと言つたが、何れの時代に於ても民衆の上に傑出せる英雄が生ずるのである。清盛、頼朝、太閤、家康、ナポレオンが生れなければ、他の英雄が生れて天下を統一するであらう、非凡の才あるものが凡人を驅使するのは、非凡の科學者が電氣や磁氣や害虫や毒波を驅使すると同じである。露國はソヴヰエツト政府を建てたが彼等を指揮するものはレニンとトロツキーである。伊太利はデモクラシーを廢してムツソリニを英雄として崇拜して居る、英雄主義は永遠に亡びるものでない、英雄のなき國は國でない、宇宙に眞理がある如く人間に英雄があるものである、徒らに英雄を無視せんとするものは自ら英雄たる能はざる者の絶望の嫉妬である』

『さうだ〳〵』と彰義隊は頭に鉢卷をして躍り上つた。『俺の言ひたい事を皆な言つてくれた』

人々は野潴の莊重な漢文口調の演説を舊式だと思ひつゝも其の熱烈な聲に魅られて、狂するが如

く喝采した。手塚はきまり悪さうに頭を低れた。實を言ふと彼の論旨は或る社會主義の同人雜誌から盜んだものなので、其の新らしさうに見える處が頗る氣に入つたのであつた。彼は此の演說で大いに「新人」振を見せびらかす積であつたが、野瀨に一蹴されたので堪らなく羞恥を感じた。さうして救を求むる樣に光一の方を見やつた。

光一は默つて演壇の方へ歩いた。人々は盛んに拍手した。光一は平素餘り議論を好まなかつた。彼は自分でも演說は下手だと思つて居る。だが皆の勸めを拒む事は出來なかつた。彼は演壇に上つた時胸が波の如く跳つた。さうして自分ながら顏が眞赤になつた事を感じた。だがそれを制する事も出來なかつた。彼は躊躇した。それは恰ら群がる虎の前に出た羊の如く弱々しい態度であつた。

千三はじつと眼を据ゑて光一を睨んで居た。

「畜生！　彼奴何を言やがるだらう、變な事を言つたらめちや〱に攻擊していつかの復讐をし滿座の前で恥を搔かしてやらう」

恐らくは當夜の會場で千三ほど深い注意を以て光一の演說を聽いて居たものはなかつたらう。

一方に於て手塚はほつと息を吐いた。救ひの船が來たのである。師範の野瀨をやつつけてくれるだらう。

『僕は演說が下手ですからよく〳〵は饒舌れません』

いかにも怏々した調子で而も低い活氣のない聲で光一は言つた。

『下手な奴だなあ』と千三は肚の中で言つた。

『ふだんにいくら威張つても晴れの場所では物が言へないだらう、臍に力がないからだ』

會衆も亦光一が案外下手なのに失望した。

『併し僕は野淵君の說に賛成する事は出來ません、野淵君は英雄と花とを比較して美文を並べたがそれはカアライルの燒直しに過ぎません、いかにも英雄は必要です、だが野淵君の言ふ樣な英雄は全然不必要です。如何となれば昔の英雄は國利民福を主とせずして自己の利害のみを主としたからであります、豐臣が諸侯を征服した。家康が舊恩ある太閤の遺孤を滅ぼして政權を私した、さうして皇室の大權を竊む事三百餘年清盛にしろ賴朝にしろ、悉くさうである、彼等は正義に依らざる英雄である。不正の英雄は拔山倒海の勇あるも以て稱讃する事は出來ません、武王は紂王を討つた、それは紂王が不正だからである、ナポレオンは歐洲を略した、それは國民の希望であつたからである、木曾義仲を討つた時義經は都に入るや否や第一番に皇居を守護した。彼は正義の英雄である、楠正成の忠は言ふまでもない。藤原鎌足の忠も亦言ふまでもない。抑々諸君は足利尊氏平

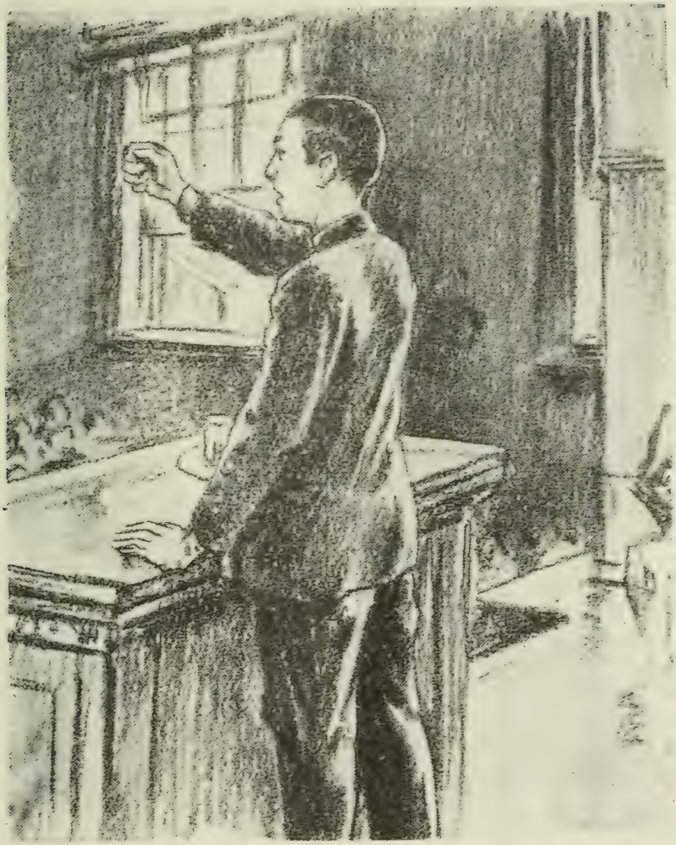
清盛、源頼朝をも英雄とするであらう。彼等は國賊である、臣子の分を紊るものは他に百千の功ありとも英雄と稱する事は出來ない、古來英雄と稱するものは大抵奸雄、梟雄、覇王の類である、僕はこれ等の英雄を憎む、それと同時に鎌足の如き、楠公の如き、孔子の如き、基督の如き、苟くも正義の士は心を盡し氣を傾けて崇拜する、それに何の不思議があるか、萬人に傑出する材ありと雖も弓削道鏡を英雄となし得ようか、三帝を流し奉りし北條の徒を英雄となし得ようか、諸君！諸君は西郷南洲を英雄なりと稱す、果して彼は英雄であるか、彼は傑出したる人材に相違ないが、苟くも錦旗に對して銃先を向けたものである、既に大義に反す、何ぞ英雄と言ひ得よう」

羊は俄然虎になつた。處女は脱兎になつた。今まで溪々と流れた小川の水が一瀉して海に入るや否や怒濤澎湃として岩を碎き石を飜へした。光一の舌頭は火の如く熱した。

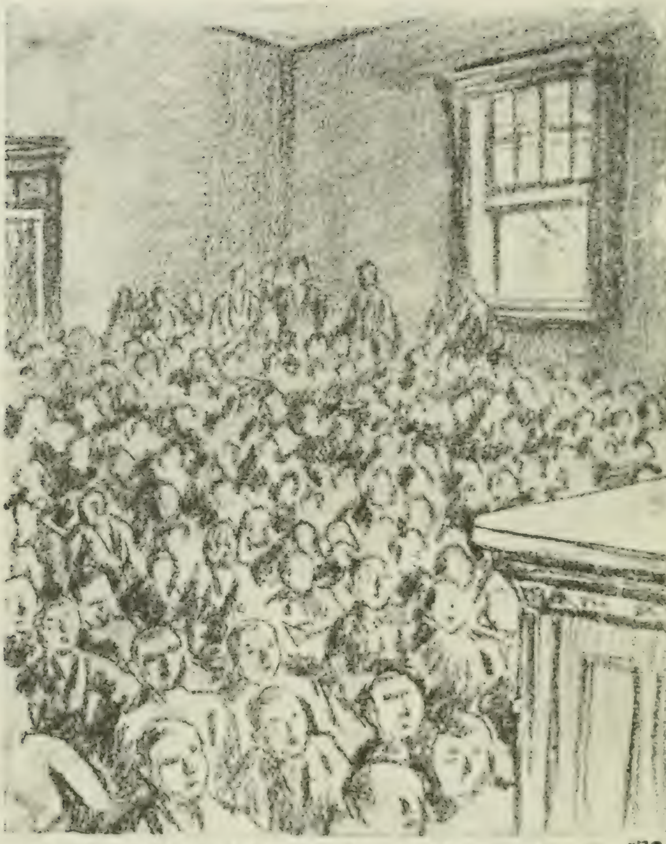
「野淵君は渇然と英雄の御利益を說いたが、如何なる者が是れ英雄であるかと說かない、正しい英雄と邪まなる英雄とを一括して概念的に其の可不可を論ずるは論據に於て既に薄弱である」

『ひや／＼』と手塚は立上つて叫んだ。

『待ち給へ、更に手塚君の說を駁さねばならん、手塚君は英雄は個人主義である、英雄は民衆を侵掠したと言つた、侵掠か征服か僕は何れたるかを知らずと雖も、弱者が強者に對して侵掠呼ばは



りをするのは今日の悪思想であります、婦人は男に對して亂暴呼はりをなし、貧者は富者に對して壓迫呼はりをなし、怠け者が勤勉者に對して傲慢呼はりをなす、此に於てプロレタリヤはブルヂヨアを呪ひ、勞働者は資本家を呪ひ、人民は政府を



呪ひ、子は親を呪ひ、妻は良人を呪ふ。抑々それは果して正しき事であるか、思ふに民衆と言ひデモクラシーと呼ぶ事今日ほど盛んな事はない、併し心を靜め耳を欹てゝ民衆の聲を聞きなさい、彼等はかう言つて居る。「首領が欲しい」「私達を

指導してくれる人が欲しい」「レニンが欲しい」「ムツソリニが欲しい」「ナポレオンが欲しい」と、如何なる場合にも團體は首領が必要である。首領は英雄である。佛蘭西人は革命を以て自由を得た、併し革命には十人を下らざる首領があつた、羅馬の國民は何を望んだか、シーザーにあらずんばブルタスであつた。日本の國民は何を望んだか、源にあらずんば平であつた、ナポレオンを島流しにしたのは國民であつたが、彼を帝王にしたのも國民であつた事を忘れてはならない。然るに手塚君は何のために英雄を非認するか、英雄出でよ、正しき英雄出でよ、現代の腐敗は英雄主義が衰へたからである、僕の所謂英雄は活動寫眞の近藤勇ではない、國定忠次ではない、鼠小僧次郎吉ではない、而も亦尊氏、清盛、頼朝の類ではない、手塚君の英雄でもなければ野淵君の英雄でもない、僕は正義の英雄を讃美する、苟くも正義であれば武藝が拙なくとも、智謀がなくとも、學校を落第しても、野球が拙くとも、金持でも貧乏でも、凡て英雄である、此の故に僕はかう言ひたい、

「凡ての人は英雄になり得る資格がある」と」

何とも言ひ樣のない嚴肅な氣が會場を壓して暫らく水を打つた樣に沈默したかと思ふと急に拍手喝采が怒濤の如く漲つた。手塚は何處へ行つたか姿が見えない。千三は呼吸も吐けなかつた。彼は光一の論旨には一點の隙もないと思つた。

『畜生ツ、うまくやりやがつた』

かう思ふと折角の復讐心も一半は挫かれてしまつた。

『詰らない、来なければよかつた』

彼は悄々しさに堪へかねて台場を出た、外は漆の如く闇い、振返つて見ると草原の彼方から煌々と灯の光が迸つて居た、千三は一種の恥辱を感じながら歩くともなく歩き続けた、と彼は路傍の石に躓いて下駄の鼻緒をふつつりと切らした。

『大変だ』

彼は途方に暮れた。

『鼻緒が落ちてなからうか』

かう思つて暗い地面を探り／＼並木の間を歩いた。今まで気が付かなかつたが此時足の拇指が痛み出した、手をやつて見ると生爪が剥がれてゐる、彼は大地に坐り込んだ。さうして兵子帯を引裂いて足を繃帯する事に決めた。

と何処からとなく人の声が聞える。

『来たか』

『来だ〳〵』
『氣を付けろよ』
『逃がしちやいかんよ』
一人の聲は手塚らしい。あとは四五人、忍び〳〵に三方に埋伏する。
『何をしてるんだらう』
千三はかう思つた。かういふ事は珍らしくない。青年の喧嘩だ。毎日一つ位はあるのだ。
『だがねえ、文子は此頃ちつとも來ないぢやないか』
一人の聲が聞える。
『手紙を見られたらしいよ』と他の聲。
『見られても構やしない、あれはねチビの名にしてあるんだから――はツ〳〵〳〵チビの奴それで酷く撲られたつけ』
千三の總身がぶる〳〵と慄へた。彼は初めてそれが手塚の奸策だと知つたのである。彼は立上つて彼等の後を追ひかけようと思つた。が足の痛みは骨を剔られる様に烈しい。
『待て畜生！ あゝいま〳〵しいな』

千三は足を嚴しく縛つた。さうして殘りの布で鼻緒をすげた。と此の時五六間先に叫聲が起つた。

『何をするんだ』

『疊んでしまへ、やれ〳〵』

『何處だ』

『此處だ』

『こん畜生！』

撲り合ふ音、倒るゝ音、ばた〳〵と走る音。

『おい〳〵みんな來い』と呼ぶ聲？

『生意氣な、貴樣は手塚だな』

かういふ聲は光一であつた。千三ははつと跳り上つた。彼は片方の下駄を手に持つたまゝ走り出した。と見ると三人を相手に光一は奮鬪最中である。一旦逃げた二人は引返して共に光一に掴みかかつた。光一は一人の頭を蹴つた。蹴られながらに其の男は光一の脚を一生懸命に掴んだ。背後から光一の喉を締めて居るのは驢馬らしい。手塚は前へ出たり後へ出たりして光一の顔を亂打した。

五人と一人、敵ふべくもない。

『柳、しつかりしろ』

千三はから聲を掛けて手に持つた下駄で手塚の横面をしたゝかに打つた。

『チビ！』

手塚は叫んで鼻に手を當てた。千三は驢馬の顔を打たうとしたが小さいので届かなかつた。彼は跳り上つた、が足の痛みが益々激しい。彼は手塚に首根を抑へられた。手塚は力任せにチビを撲つた、撲られながらチビは手塚の手をしつかりと摑んで放さない。

『大丈夫か柳』とチビが苦しさうに言つた。

『大丈夫だ、青木、濟まないな』と光一は言つた。さうして物の見事に驢馬を大地に叩き付けた、其の拍子に彼は片膝を折つた。三人は其の上に折重なつた。

『何を……糞ツ』

かういふ光一の聲は覺束なく聞えた。

『やられたな』

かうチビは思つた。途端に手塚の手がぐたりと弛んだ。と思ふや否や手塚は恰ら犬の屍の如く叩き付けられた。

『青木ぢやないか』
『おゝ安場君』
『うむ、俺だ』
『柳を助けてくれたまへ』
『よしッ』
安場がひらりと動いた。二人の姿が筋斗打つて倒れた。今一人は光一がしつかりと膝に組み敷いて居た。
『縛れ〳〵』と安場が言つた。
『縛るものがない』
『ふんどしで縛れ』
『僕は猿股だ』
『心持の悪い奴だ』
『安場、君は？』
『俺は無ッンだ』

千三は父しても帯を解いて手塚を縛り上げた。投げられた驢馬と今一人は安場が縛つた。安場は三人を電柱に縛り付けた。

光一の横顔は腫れ、手首は挫かれて居た。千三には何の怪我もない。

『おい青木』と光一は千三の前にひたと坐つて言つた。『俺を撲つてくれ、俺は悪かつた、さあ俺が君にした様に俺の顔の何處でも撲つてくれ』

『何を言ふか柳』と千三は光一にひたと寄り添うて手をしつかりと握つた。

『僕は今夜君の演説で眞の英雄が解つた、僕等はお互ひに英雄ぢやないか、正義の英雄だよ』

『許してくれるか』

『許すも許さんもないよ』

『有難う』

二人は再び手を握りしめた。

『やあ、凡人主義のデモクラシーの偶像破壊者共』と安場は三人に向つて言つた。

『平等と自由はどんなものか明日の朝まで其處で考へて見ろ』

『繩だけは解いてやつてくれ』と光一が安場に言つた。



『いや／＼』と安場は頭を振つた。『英雄に縛られて縄を解くのはデモクラシーの役目なんだ、さあ行から』

かう言つて安場は燐寸をパッと擦つて三人の顔を見た。手塚は涙ぐんで首垂れて居た。驢馬はきよとんとして首を上げて手塚を罵つた。

『だから俺はいやだといふにお前が加勢してくれといふもんだから』

『ざまあ見ろ』と安場は笑つた。『それが平凡主義の本性なんだ』

安場は歩き出した。さうして快然と唄ひ出した。

『あゝ玉杯に花うけて、緑酒に月の影やどし、治安の夢に耽りたる、榮華の巷低く見て……』

讀者諸君、此の物語は此にて擱筆します。若し諸君が人々の消息を知りたければ六年前に一高の寮舎にありし人に就いて聞くがよい。青木千三と柳光一はどの室の窓から其の元氣のいゝ顔を出してどんな聲で玉杯を唄つたか。

それから一年後れて入校した生蕃と綽名の付く阪井巌といふ青年が非常な勉強を以て首席で大學に入つた事も同時に聞くがいゝ。

更に安場の事が知りたければ黙々先生を訪ねなさい。先生は多分かういふだらう。

「安場ですか、あれは今倫敦の日本大使館に居ます」と。

更に諸君は「安場は倫敦で何をしてるんですか」と訊いてご覧なさい。先生は多分かう答へるでせう。

「鼎を撫でて居ます」

あゝ玉杯に花うけて（終）

（あゝ玉杯に花うけて奥附）

昭和三年三月十五日印刷
昭和三年四月三日發行

定價金壹圓五拾錢

著者　佐藤紅綠

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
發行者　野間清治

東京市小石川區櫻町二十六番地
印刷者　佐藤磨

東京市小石川區櫻町二十六番地
印刷所　昭文堂印刷所



發行所　東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
大日本雄辯會講談社
電話小石川（二三五・二三六・二三七・二三〇・一五二一・三五九六・五九八一・六九六〇・七〇八六・七三五四・二五二〇）
振替東京三九三〇番

☆これは刊行当初の奥付けです。復刻版の奥付けと定価は最終ページにあります。

安田製本

| 著者 | 書名 | 内容 | 體裁 | 定價 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 西條八十著 | 少年詩集 | 詩壇の權威西條八十先生が心血を濺げる珠玉の名篇力作揃ひにて内容豐富朗々誦すれば意氣自ら高し。 | 菊半截 美本 | 一、五〇 | ・一〇 |
| 佐藤紅緑著 | あゝ玉杯に花うけて | 病母を抱へた貧しき少年千三が、凡ゆる屈辱と苦難に堪へて奮闘、天晴、一高の秀才と謳はれるまでの壯烈な物語。 | 四六判 函入美装 | 一、五〇 | ・一二 |
| 佐藤紅緑著 | 紅顏美談 | 城北中學生の涙のにじむやうな友情や親愛、死を決して樺太の荒野に多數の無頼漢を相手の亂鬪、一讀何人も奮起す。 | 四六判 函入美装 | 一、二〇 | ・一〇 |
| 上井磯吉著 | 健男兒（一名、母を慕ひて幾千里） | 世界的の有名な伊太利のエドモンド・アミチスの傑作で、各國語に譯されて持て囃されてゐる少年少女絶好の讀物である。 | 四六判 美装本 | ・七〇 | ・〇八 |
| 大倉桃郎著 | 友情小説 曉の歌 | 新吉少年の母に孝養を盡し、日夜勉學に精出す健げさ、純情實に鬼神も泣かすであらう。青少年少女の必讀書。 | 四六判 函入美装 | 一、三〇 | ・一〇 |
| 大倉桃郎著 | 立志小説 少年戰線 | 貧しい家に生れた英一は、自ら働いて家計を助けつゝ寸暇を惜しんで勉學、一歩一歩地位を高めて行く立志小説中の白眉 | 四六判 函入美装 | 一、三〇 | ・〇八 |
| 高垣眸著 | 豹の眼 | 或は海上に或は霧深きフリスコの街に又はマウントモンテの暗夜の町に身の毛もよだつ大爭鬪、少年少女の大讀物。 | 四六判 函入美装 | 一、六〇 | ・一〇 |
| 高垣眸著 | 海賊奇譚 龍神丸 | 我が八幡船の子孫たる海賊共が、片々たる葉舟に駕して千古の秘密を求めて大活動を演じ、遂にその鍵を握る。 | 四六判 函入美装 | 一、六〇 | ・一二 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 體裁 | 定價 |
|---|---|---|---|---|
| 佐藤紅綠著 | 毬の行方 | 可憐の少女一子の健氣さ、心やさしき證子の眞情さ、全篇を流るゝ友情愛は眞に人の心を動さずには措かない。 | 四六判洋裝函入 | 一、五〇 、一〇 |
| 水谷まさる著 | 薄れゆく月 | 妙なる音樂を聽くやうな詩物語！その純美な境地には何人も恍惚として我を忘れるであらう。絕好の作。 | 四六判絹布裝函入 | 二、〇〇 、一二 |
| 加藤まさを著 | 消えゆく虹 | 力作の少女ロマンス長短十餘篇より成り優麗極りない裝幀に抒情詩的な插繪を豐富に載せて、眞に靈集を衆ねた寶玉集。 | 四六判羽二重函入 | 一、八〇 、一四 |
| 片岡鐵兵著 | 薔薇の戲れ | 美しい友情、悲しい母子の物語、けなげの少女の話など何とも云へぬ良い感じの新しいそして美しい物語集。 | 四六判洋裝函入 | 一、五〇 、一〇 |
| 吉尾信子著 | 三つの花 | 崇高く錄い幾代、凜々しいみどり、いとしさを思はせる幼い幸子――この三人の姉妹を主人公とせる純美な物語！ | 四六判絹布裝函入 | 一、八〇 、一〇 |
| 行友李風著 | 破軍星 | 血腥い幕末の頃爭亂の京都大和路に、幻の如く出沒する巡禮姿の美しい二八娘が持つ密書に纏る悲壯痛烈なる物語！ | 四六判洋裝函入 | 一、三〇 、〇八 |
| 横山美智子著 | 美談小說 級の光り | 大人も及ばぬ雄々しい感心な少年を主人公とした美談小說！これこそ眞に少年少女の理想的讀物！一讀何人も感涙に咽ぶ | 四六判洋裝函入 | 一、三〇 、〇八 |
| 福田琴月著 | 靜御前 | 源平盛衰の詩的時代を背景に美の化身たる靜と武の權化たる義經。この二人の戀を中心に描き盡せる歷史小說。 | 四六判洋裝函入 | 二、五〇 、一四 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 体裁 | 定価 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 宮田東峰著 | ハーモニカ奏法 | ハーモニカはどんなものか、どうすれば直ぐ覺えられるか、必ず上手になれる練習法等を親切叮嚀に書いた本。 | 四六判 洋装函入 | 一、二〇 、〇八 |
| 宮田東峰著 | ハーモニカ樂譜 | 國歌の部、歌謠の部等網羅せる歌曲百數十種、而も宮田先生が實際に吹奏して、ことにその吹奏上の注意を附けたもの。 | 四六判 洋装函入 | 二、〇〇 、一二 |
| 柚木卯馬著 | 發明美談 | 知らず識らずに非常な物識りになる面白い發明發見物語、珍しい逸話や寫眞などつさり這入り素敵によい本です。 | 四六判 優美函入 | 一、三〇 、一〇 |
| 大山千代雄著 | プリユターク英雄傳 | 英雄たらんとせば先づ英雄を知れ、本書は實にナポレオン等の西歐の偉人傑士皆愛讀せりといふ名著である。 | 四六判 洋装 | 一、〇〇 、〇八 |
| 加藤武雄著 | 君よ知るや南の國 | 音樂の天才まり子は上京、作曲家内山氏を訪れた。然るにすげなく彼は拒絶した、何故！　そこには悲しい秘密がある。 | 四六判 羽二重函入 | 一、八〇 、一〇 |
| 吉川英治著 | 神州天馬俠 | 勝頼の遺子伊奈丸が、富士の裾野に武田家の再興を企てた壯烈快絶の一大秘史！今三國史とも稱せられる不朽の名作。 | 四六判 洋装函入 | 第一、二巻 一、八〇 、一〇　第三巻 一、五〇 、一〇 |
| 田山花袋著 | 花袋行脚 | 史蹟名勝に富める京都奈良を中心として近畿四國中國九州等に至るまで杖を運びてものせる旅行記。類書中隨一の名著。 | 四六判 洋装函入 | 二、三〇 、一二 |
| 佐藤紅綠著 | 東西婦人觀 | 名流婦人、賢婦人、モダンガールにドン底の女性等々縱横に解剖し、觀察し、該博なる蘊蓄と卓拔なる識見とを披瀝す。 | 四六判 布装函入 | 二、〇〇 、一二 |

| 著者 | 書名 | 內容 | 體裁 | 定價・送料 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 井關十二郎著 | 現代 立身成功の近道 | 「就職難」、「生活難」「成功難」に惱む人々へ、その難を打開し成功せんとするに極めて大切な實驗心得を親切に說く。 | 四六判 布裝 函入 | 一、八〇 、一二 |
| 澤田撫松著 | 大正婦人立志傳 | 現代我國婦人界の一流名家が逆境を突破し、あらゆる艱難誘惑に打ち克ち、最後の榮冠を得るに至つた奮鬪の血涙史! | 四六判 洋裝 | 一、八〇 、一二 |
| 北島利男著 | 歐米大人物立志傳 | 現代歐米の大實業家、發明家等の苦心慘憺たる奮鬪傳。「東京高商」[illegible]會よりも推奬された名著である。 | 四六判 洋裝 | 一、八〇 、一〇 |
| 大瀧鞍馬著 | 三井王國 | 著者は材料を蒐むること幾星霜、幾多の事件と巨人傑人の大活躍の眞相を探り三井の經濟的大活動の過去及現在を描く。 | 四六判 洋裝 函入 | 二、〇〇 、一二 |
| 谷孫六著 | 金儲け實際談 岡辰押切り帳 | 著者多年の研究になれるものにして、何れにも實行出來る幾多の金儲け法を知らず〳〵の内に會得せしむ。 | 四六判 洋裝 函入 | 一、八〇 、一二 |
| 安田與四郎著 | 株式市場の表裏 | 著者は稀世の財界通として斯界の權威者。市場の表裏取引の實際を率直に詳細に說く。財界活躍の活指針。 | 四六判 洋裝 函入 | 一、八〇 、一〇 |
| 谷脇素文著 | 川柳漫畫 うき世さまぐ〵 | 素文先生獨特の川柳漫畫千五百有餘、諷刺あり諧謔あり、ピーンと琴心を刺す深刻な世間味は一讀現世の苦を忘れさせる。 | 四六判 洋裝 函入 | 二、三〇 、一二 |
| 近藤蕉雨編 | 社會萬般番附大集 | 政治、人事、實業、地理、歷史、演藝、文學、俚言教訓、經濟、洒落等社會のありとあることごと何人にも一目瞭然! | 菊判 布裝 函入 | 三、〇〇 、一六 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 體裁 | 定價・送料 |
|---|---|---|---|---|
| 佐々木邦著 | 次男坊 | 素封家の次男坊を主人公とし、是れに慾張村長、豪傑校長、良友、美人を配し活社會の種々相を遺憾なく描く。 | 四六判 クロース 函入 | 一、〇〇 、一二 |
| 佐々木邦著 | 主權妻權 | 女性禮讃の時代精神を一人前以上に持っ合せてゐる現代青年の美人國賓論や夫婦愛の内情話等を描く。 | 四六判 羽二重 函入 | 一、二〇 、一二 |
| 佐々木邦著 | 親鳥子鳥 | 敏感なそして非常に油斷のならない少年源太郎を主人公として其の家庭の和氣藹藹たる雰圍氣を描く。 | 四六判 羽二重 函入 | 一、〇〇 、一二 |
| 佐々木邦著 | 世間相人間相 | ユーモア文學の權威者たる佐々木邦先生が眼に觸れ耳にした物を片端から其快筆で描いたもの、插畫二十數葉入。 | 四六判 布裝 函入 | 一、三〇 、一四 |
| 佐々木邦著 | 愚弟賢兄 | 與導貞二君の就職、結婚問題を先生獨特のユーモアを以て綴れる肩の凝らない讀み始めたら止められない素敵に諧謔小說 | 四六判 布裝 函入 | 一、〇〇 、一二 |
| 佐々木邦著 | 脱線息子 | 大家の一人息子新太郎君と素敵に美しい近代的令孃秀子との戀と緣談を中心にした面白い諧謔小說。 | 四六判 布裝 函入 | 一、〇〇 、一二 |
| 山中峯太郎著 | 新郎新婦 | 若い陸軍士官と花やかな麗人との緣談ローマンス、珍談續出して誰でも吹出す明るい面白い滑稽小說。 | 四六判 洋裝 函入 | 一、〇〇 、一二 |
| 岡本一平著 | 漫畫小說 人の一生 | 三百有餘の名漫畫に配する奇想天外の名漫文。滑稽輕妙洒脫、男によく女によし面白きこと天下無比。 | 四六判 羽二重 函入 | 一、二〇 、一二 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 體裁 | 定價・郵税 |
|---|---|---|---|---|
| 鶴見祐輔著 | 小説 母 | 先生がその處女作なりし母君の弔合戰として一字一涙を以て強く美しき母の姿を描き出せる近來の名著！ | 四六判 布製 包凾 | 二、〇〇 、一二 |
| 鶴見祐輔著 | 小説 最後の舞踏 | 熱烈奔放な異國娘の情愛、隨所に發する奇想天外の諧謔、或は圓轉滑脫の社交談等明るく輕快で極めて面白い小說。 | 四六判 羽二重 包紙 | 一、八〇 、一二 |
| 佐藤紅緑著 | 幸福物語 | 孤兒となつて奈良から上京した清純な處女福子。幾多の誘惑は襲つた。果して彼女の運命は如何。 | 四六判 洋装 凾入 | 二、三〇 、一二 |
| 佐藤紅緑著 | 第一歩 | 母亡き後の父を誘惑する淫蕩の女を刺殺した少年！命を賭して之を保護する青年教師、波瀾又波瀾。 | 四六判 羽二重 凾入 | 二、二〇 、一二 |
| 菊池幽芳著 | 妖美人物語 | 名にし負ふ幽芳先生の傑作、快青年を中心に妖美人の哀戀、優麗なる處女の悲戀あり、著者一流の筆致は讀者の胸を抉る。 | 四六判 羽二重 凾入 | 二、三〇 、一四 |
| 小杉天外著 | 眞空鈴 | 絕世の美人にして淫蕩極りなき喜美子の戀愛より波瀾に波瀾を捲き起す人生行路の大悲劇結構雄大眞に天外先生の大傑作 | 四六判 羽二重 凾入 | 前、後篇各 二、二〇 、一二 |
| 小杉天外著 | 藤娘 | 貞淑なる令孃に憧はる結婚問題！突然の死に關する疑惑、若き未亡人の不義の戀！近來の力作。 | 四六判 羽二重 凾入 | 二、二〇 、一二 |
| 渡邊霞亭著 | 千鳥ヶ淵 | 初戀の甘きに醉ひ、彼女が知らず識らず深淵に沈み行くあはれ痛ましき經路！人間社會の種々相を描きて眞の愛、眞の戀を知らしむ。 | 四六判 洋装 凾入 | 二、〇〇 、一二 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 體裁 | 定價・送料 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 中村武羅夫著 | 女人群像 | 姿美しく心清き一女性の數奇な運命を敍し、職業婦人に纏る世相の裏面を剔抉す。女性のために光明を與ふる一大力作。 | 四六判 羽二重 函入 | 前、後篇 一、五〇 、一四 |
| 中村武羅夫著 | 女王 | 富豪の令孃と男性的氣魄と意氣に燃ゆる快青年との戀を中心として描かれたる大問題の小說、著者快心の作。 | 四六判 羽二重 函入 | 前、後篇 一、五〇 、一四 |
| 中村武羅夫著 | 夜の潮 | 某上流家庭に起つた戀愛事件を中心にし、肉慾生活の中から次第に眼覺め行く靈性の曙を巧に描く。 | 四六判 羽二重 函入 | 二、七〇 、一四 |
| 加藤武雄著 | 審判 | 暴力を以て汚された處女の、呪はれたる胎に生を得た彼が、如何にしてその母に邂り合つたか！ 一大運命悲劇。 | 四六判 羽二重 函入 | 二、五〇 、一四 |
| 加藤武雄著 | 華鬘 | 美人佐竹房子の、あまりに美しく、あまりに悲しき半生の哀史、過つて愛妻を呪ふ事一、その構想の妙、眞に文壇の大傑作。 | 四六判 オフセット 函入 | 二、三〇 、一四 |
| 岡田三郎著 | 聖火 | 戀！ 戀！ モダン・タイプの一女性摩耶子――を中心として捲起る熱烈にして深刻を極めた戀愛事件を描き盡す。 | 四六判 羽二重 函入 | 二、二〇 、一二 |
| 佐々木味津三著 | 右門捕物帖 | 水際立つた江戸前の美男子右門、その配下のおしやべり傳六、投繩の辰、何れ劣らず骨を粉に碎いての探偵物語！ | 四六判 紙裝 函入 | 一、八〇 、一二 |
| 村上浪六著 | 浪六名作選集 | 浪六先生の無慮數千篇の作品の中から選びに選び拔いて眞に浪六式を發揮した傑作中の傑作十有八篇を收む。 | 四六判 クロース 函入 | 二、三〇 、一二 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 体裁 | 定価 |
|---|---|---|---|---|
| 本田美禪著 | お洒落狂女 | 爛熟せる江戸文化の淵源に咲き誇れる美しき女性を中心に描き出したる前代未聞の大歷史小說。 | 四六判洋裝函入 | 上卷一、三〇 中、下卷一、四〇 |
| 本田美禪著 | 亂れ燒刄 | 風俗頽爛せる享保後の大江戸を背景として、美しき姉妹の數奇な主題に、女子の如き美男を配した長篇努力作。 | 四六判洋裝函入 | 前篇一、三〇 後篇一、三〇 |
| 本田美禪著 | 血染の伽羅 | 三十人の武藝者を彼方に廻してピクともせぬ俠勇士！之を戀する絶世の美女あり凄艷なる場面續々と展開！ | 四六判クロース函入 | 前、後篇各一、八〇 〒、一二 |
| 吉川英治著 | 劍難女難 | 優艷[illegible]寸時も休む間もなく取卷く愛慾の情火、劍難と女難を一身に引受けた美男新九郎の數奇なる運命は如何！ | 四六判洋裝函入 | 二、五〇 〒、一四 |
| 吉川英治著 | 坂東俠客陣 | 劍道眞庭流の宗家に傳はる秘文を中心に捲き起されたる驚天動地の大渦卷！幾多の劍士俠客入亂れて幾變轉。 | 四六判洋裝函入 | 二、四〇 〒、一四 |
| 小泉長三著 | だゝつ兒羅漢 | 大納言忠長卿の遺子長七郎亞羅漢七郎が驚天動地の大活躍！見よ！遂に南蠻に渡りてその霸業を全うせんとする。 | 四六判洋裝函入 | 二、五〇 〒、一四 |
| 村上浪六著 | 妙法院勘八 | 俠骨妙法院勘八、六尺の反身に思ふ存分快腕を揮つて向ふ所敵なき豪勇と膽力！此の人を廻る戀の情火。 | 四六判布裝函入 | 二、二〇 〒、一二 |
| 前田曙山著 | 大望 | 德川の末葉彰義隊と呼び若き美貌の後一寛が燃ゆるやうな熱血を中心に描かれたる大復讐物語。 | 四六判洋裝函入 | 二、三〇 〒、一四 |

| 著者 | 書名 | 内容 | 體裁 | 定價 | 送料 |
|---|---|---|---|---|---|
| 鶴見祐輔著 | 中道を歩む心 | 先生の思想、抱負、生活、理想を最もよく闡明せる本で、ある日本は本書に依て更に光輝を增すであらう實に國民必讀の名著 | 四六判 布装 函入 | 二、五〇 | 、一六 |
| 鶴見祐輔著 | 北米遊說記 | 偉人傳あり、世界花形人物評あり、文學、政治、宗教、居ながらにして米國を知り世界を知り日本精神の根本を了解せしむ | 四六判 クロース 函入 | 二、五〇 | 、一四 |
| 鶴見祐輔著 | 壇上紙上街上の人 | 日本、支那、歐洲、亞米利加に跨り政界、文壇、實業界、事業界に亘つて描出す、見よ！ 現代人修養の一大金字塔。 | 四六判 クロース 函入 | 二、七〇 | 、一六 |
| 鶴見祐輔著 | 思想山水人物 | 著者が親しく歐米の大人物を歷訪し、又は其の國の人情風俗及思想に接し明徹なる觀察眼を以てものせる隨筆集。 | 四六判 クロース 函入 | 二、五〇 | 、一四 |
| 鶴見祐輔著 | 現代日本論 | 現代日本のあらゆる方面に亙りて論評せる世界的の大文章、先生の英文原著を熱血の士澤田謙先生之を譯す。 | 四六判 洋装 函入 | 一、六〇 | 、一〇 |
| 鶴見祐輔著 | 英雄待望論 | 全世界の大偉人、大政治家、大思想家が熱誠、熱血の筆に描き出され一讀奮起せざる者なし。近來の好讀物！ | 四六判 洋装 美本 | 、五〇 | 、〇八 |
| 鶴見祐輔著 | 南洋遊記 | 天下の寶庫、世界の一大樂園たる南洋の風物を探り、眞摯なる達觀と鬱勃たる意氣とを披瀝せるが卽ち本書！ | 菊判 クロース 函入 | 六、〇〇 | 、一八 |
| 服部純雄著 | 雜草の花 | 流暢華麗の筆を以て、友情を語り、偉人を偲び、四方に歷遊しては、旅する心のときめきを語る。野趣横溢の好著。 | 四六判 布装 函入 | 一、八〇 | 、一二 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 理學博士 丘淺次郎著 | 煩悶と自由 | 其說く所懷疑の哀歌、辛辣なる筆鋒を以て時勢の中樞を抉り、文化問題に介入す。一大寶書にして近代人必讀の名著。 | 菊判 洋裝 函入 | 上製 四、五〇 、一六 並製 三、八〇 、一四 |
| 理・農學博士 松村松年著 | 進化と思想 | 世界文物の進化發展の理法を述べ、思想と進化の原則を闡明し平易に說く。眞に人生の光明を指示すべき福音書である。 | 菊判 クロース 函入 | 三、〇〇 、一六 |
| 理・農學博士 松村松年著 | 驚異と神秘の生物界 | 不可思議なる生物界の奇現象二百有余の事實を、現代生物界の權威たる著者が蘊蓄の神髓を入れて描ける不朽の名著。 | 四六判 布裝 函入 | 二、三〇 、一二 |
| 農學博士 横山桐郎著 | 蟲の世界を探ねて | ピンピンした蟲の生活のありのまゝを實細に觀察し、先生の第六感を交へて平易に、誰にも面白く讀める樣に書いてある。 | 四六判 クロース 函入 | 二、二〇 、一二 |
| 理學博士 日下部四郎太著 | 二人行脚 | 日本全國を行脚して未開時代の信仰や各種の風俗習慣を隈なく探りその由つて來れる所を皮肉警拔な筆で叙す。 | 四六判 クロース 函入 | 三、五〇 、一六 |
| 理學博士 日下部四郎太著 | 異國行脚 | 世界各國を遍歷し異國情調の數々、奇習、珍聞などの根源を繹ね、自然の神秘を闡き、科學の謎を解く。 | 四六判 クロース 函入 | 二、八〇 、一四 |
| 北原白秋編 | 日本民謠作家集 | 現代一流の文豪詩人五十餘氏が世上に發表せられし珠玉の名篇揃ひ。實に萬世に傳ふべき民謠の大詞華集。 | 四六判 布裝 函入 | 二、五〇 、一二 |
| 北原白秋編 | 現代民謠選集 | 現代日本に於ける各方面の人士の作幾千篇の中より白秋氏の嚴選せる一大寶玉集である。妙味自らにして湧く逸品揃ひ。 | 四六判 布裝 函入 | 二、〇〇 、一二 |

☆以上の広告は刊行当初のものです。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 大日本雄辯會編 | 永井柳太郎氏大演説集 | 聴け、一世を震撼せる大雄辯!! 辯論界の雄永井氏の全人格、思想抱負を遺憾なく披瀝せる不朽の名演説集！ | 四六判 洋装 | 一、五〇 、〇八 |
| 大日本雄辯會編 | 濱口雄幸氏大演説集 | 一言又一言、巨弾の炸裂して堅壘を屠るが如く、其の凛然荘重の辯、四隣を壓する概あり、巨人の面容躍如！ | 四六判 クロース入 函 | 二、〇〇 、一〇 |
| 大日本雄辯會編 | 尾崎行雄氏大演説集 | 水も洩さぬ論陣、或は敵を掌上に翻弄し或は辛辣敵の肺腑を抉る！ 流石に一世の大雄辯のみ。 | 四六判 クロース入 函 | 二、〇〇 、一〇 |
| 大日本雄辯會編 | 犬養木堂氏大演説集 | 先生の演説は終始一貫眞摯熱誠にして一點浮華の痕を留めず、本書も幾百千の演説中より冠絶せるもののみを蒐む。 | 四六判 クロース入 函 | 二、〇〇 、一〇 |
| 大日本雄辯會編 | 高島米峰氏大演説集 | 倫理學者として、社會教育家として先生の名は今や天下に普し、教育に政治に明快深刻なる一大痛棒を與ふ。 | 四六判 クロース入 函 | 二、〇〇 、一〇 |
| 大日本雄辯會編 | 鶴見祐輔氏大講演集 | 先生は其名海外にも鳴る大思想家にして又大雄辯家。聴け！ 是れ憂國の大熱辯にして混沌たる思想界を輝す一大炬火!! | 四六判 クロース入 函 | 二、二〇 、一〇 |
| 大日本雄辯會編 | 賀川豊彦氏大講演集 | 現代人の精神的墮落を歎じ或は窮民勞働者の慘狀を訴ふ、見よ！ 稀世の社會運動家が魂を火にして絶叫せる濁世の獅子吼 | 四六判 クロース入 函 | 二、〇〇 、一〇 |
| 大日本雄辯會編 | 加藤咄堂氏大講演集 | 先生は演壇に立つこと實に四十年。本書は數百の名講演中より特に後世に傳ふべき龜鑑的名雄辯のみを選び輯めたもの。 | 四六判 クロース入 函 | 二、〇〇 、一二 |

愛蔵復刻版少年倶楽部名作全集

**あゝ玉杯に花うけて**

N.D.C. 913　講談社　昭和45年　334p　19.6cm

昭和45年6月28日　第1刷発行

著　者　　佐藤紅緑

発行者　　野間省一

発行所　　株式会社　講談社

　　　　　東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号 112

　　　　　電話　東京(942)1111(大代表)　振替口座　東京3930

印刷所　　大日本印刷株式会社

製本所　　大製株式会社

**定　価　　720円**



0093-233897-2253 (0)　(児)



0093-233897-2253 (0)